

四絡 30 号外 1 線道路改良工事地内

小山遺跡第3地点発掘調査報告書
(第5次発掘調査)

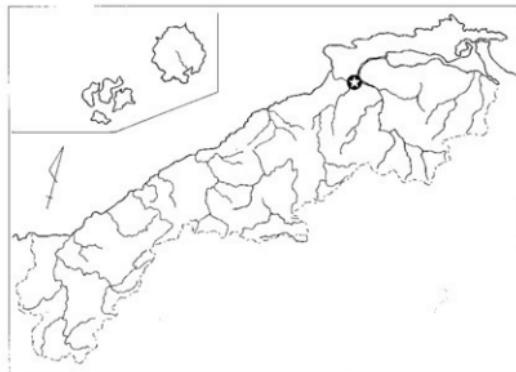


2005年3月

出 雲 市 教 育 委 員 会

四絡 30 号外 1 線道路改良工事地内

小山遺跡第3地点発掘調査報告書 (第5次発掘調査)



小山遺跡の位置

2005年3月

出雲市教育委員会



発掘調査地空中写真（北から）



発掘調査地空中写真（東から）



II区 遺構検出状況空中写真



I区 遺構検出状況



II区 SK12・SK13 検出状況



II区 A6Gr P01 遺物出土状況



V区 SE01 遗物出土状况



V区 SE01 土层断面



V区 SX01 遗物出土状況



V区 SX01 出土遺物



VI区 遺構検出状況



IX区 遺構検出状況

序

出雲市教育委員会では、平成16年度に四絡30号外1線道路改良工事地内に所在する小山遺跡第3地点の発掘調査を実施しました。

調査を実施した出雲市四絡地区は、矢野遺跡・大塚遺跡・姫原西遺跡など、出雲市でも有数の集落遺跡の密集地帯として知られています。近年の開発事業の増加に伴って、付近の発掘調査も大幅に増加し、しだいに古代の四絡地区の様相が明らかになりつつあります。

小山遺跡第3地点では、これまでに4次に亘る発掘調査が行われ、弥生時代の環濠らしき溝状遺構や墨書き土器・ヘラ描土器など官衙施設の存在を窺わせる貴重な発見がありました。今回の調査においても古墳時代前期初頭頃の多くの遺物や中世期の井戸跡を検出するとともに、小山遺跡第3地点における遺跡としての範囲がある程度確定されるなど、貴重な資料を得ることができました。本書はその報告書ですが、出雲平野の歴史解明に多少なりとも役立てば幸いに存じます。

最後に、今回の調査にあたりご理解とご協力を賜りました地元の皆様をはじめ、関係機関の皆様に心より御礼申し上げます。

平成17年3月

出雲市教育委員会

教育長 加藤武行

例　　言

1. 本書は、出雲市教育委員会が平成16年度に実施した小山遺跡第3地点発掘調査（第5次発掘調査）の報告書である。

2. 発掘調査は、下記の期間において実施した。

平成16年（2004）6月1日～平成16年（2004）9月29日

3. 発掘調査を行った地番は、次のとおりである。

出雲市小山町655番地先

4. 調査は、次の組織で行った。

〔調査指導者〕広江　耕史（島根県教育庁文化財課主幹）、東森　晋（同 主事）

〔事務局〕川上　　穏（出雲市役所文化財室 室長）

〔調査員〕岸　道三（出雲市役所文化財室主任主事）

〔調査補助員〕高橋　亜紀（同 臨時職員）

5. 本書で使用した遺構略号は次のとおりである。

S K …… 土坑状遺構 S D …… 溝状遺構 S X …… 性格不明遺構
S E …… 井戸 P …… ピット状遺構

6. 本書で使用した方位は真北を示す。

7. 本遺跡の出土遺物及び実測図、写真は出雲市教育委員会で保管している。

8. 本書掲載の遺物実測図は岸、高橋、写真撮影については岸が行った。

9. 本書の執筆、編集は上記の方々の協力を得て岸が行った。

10. 調査にあたっては、開発者である出雲市道路河川課及び地元の方々から多大なるご理解、ご協力を賜った。記して謝意を表します。

11. 発掘調査及び遺物整理にあたり、次の方々にご指導、ご協力を賜った。

田中　義昭（島根考古学会会長）、東森　晋（島根県教育庁文化財課主事）

12. 発掘調査にあたっては、次の方々に従事していただいた。

藤江 実 来間 達夫 小村 保夫 小村 恒利 公田 悅朗 今岡 勝美
高根 豊 太田 幸一

13. 遺物整理、報告書作成作業については、次の方々に従事していただいた。

吹野 初子 岩崎 晶美 中島 和恵

本文目次

カラー図版

序

例言

本文目次

挿図目次

I. 調査に至る経緯	1
II. 位置と環境	3
III. 4次に亘る発掘調査	6
IV. I区の調査	
1. 発掘調査の概要	9
2. 遺構と遺物	10
V. II区の調査	
1. 発掘調査の概要	17
2. 遺構と遺物	18
VI. III区の調査	
1. 発掘調査の概要	33
2. 遺構と遺物	35
VII. IV区の調査	
1. 発掘調査の概要	37
2. 遺構と遺物	38
VIII. V区の調査	
1. 発掘調査の概要	45
2. 遺構と遺物	46
IX. VI区の調査	
1. 発掘調査の概要	59
2. 遺構と遺物	60
X. VII区の調査	
1. 発掘調査の概要	73
2. 遺構と遺物	74
XI. VIII区の調査	
1. 発掘調査の概要	79
2. 遺構と遺物	81
XII. IX区の調査	
1. 発掘調査の概要	85
2. 遺構と遺物	86
XIII. 総括	93
図版	図版 1 ~ 図版 30
報告書抄録	

挿図目次

I. 調査に至る経緯	
第1図 試掘トレンチ位置図	1
第2図 試掘トレンチ堆積土層図	1
第3図 発掘調査区位置図	2
II. 位置と環境	
第4図 小山遺跡周辺の遺跡	3
第5図 小山遺跡近辺の遺跡	4
III. 4次に亘る発掘調査	
第6図 小山遺跡第3地点発掘調査例位置図	7
IV. I 区の調査	
第7図 SD01実測図	10
第8図 I 区遺構配置図	11・12
第9図 SX01実測図	13
第10図 SX02実測図	14
第11図 P 01実測図	14
第12図 P 02実測図	15
第13図 I 区出土遺物実測図	16
V. II 区の調査	
第14図 II 区遺構配置図	19・20
第15図 SK01実測図	21
第16図 SK02実測図	21
第17図 SK04実測図	22
第18図 SK05・SK06実測図	22
第19図 SK10・SK11実測図	23
第20図 SK11出土遺物実測図	23
第21図 SK12・SK13実測図	24
第22図 SK13出土木製品実測図	24
第23図 SK25実測図	24
第24図 SD01実測図	25
第25図 SD02実測図	26
第26図 B2Gr P01実測図	27
第27図 A6Gr P01実測図	27
VI. III 区の調査	
第28図 A6Gr P01出土遺物実測図	27
第29図 II 区出土遺物実測図(1)	28
第30図 II 区出土遺物実測図(2)	30
VII. IV 区の調査	
第31図 III 区遺構配置図	34
第32図 SK01実測図	35
第33図 P01・P02実測図	35
第34図 III 区出土遺物実測図	36
VIII. V 区の調査	
第35図 SK01実測図	38
第36図 SK04実測図	38
第37図 IV 区遺構配置図	39・40
第38図 SK05実測図	41
第39図 SK06実測図	41
第40図 SD01実測図	42
第41図 SD02実測図	42
第42図 IV 区出土遺物実測図	43
IX. VI 区の調査	
第43図 SE01実測図	46
第44図 V 区遺構配置図	47・48
第45図 SE01遺物出土状況実測図	49
第46図 SE01出土遺物実測図	49
第47図 SD01実測図	50
第48図 SD01出土遺物実測図	51
第49図 SD04実測図	51
第50図 SD05実測図	52
第51図 SD06実測図	53
第52図 SX01実測図	54
第53図 SX01遺物出土状況実測図	54
第54図 SX01出土遺物実測図	55
第55図 V 区出土遺物実測図	56
X. VII 区の調査	
第56図 SK01実測図	60

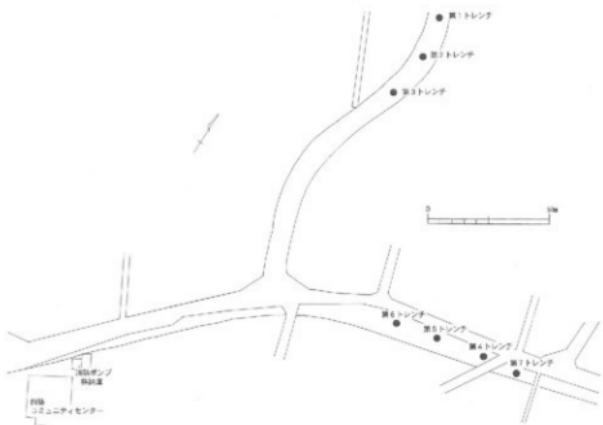
第57図	VII区遺構配置図	61・62	第90図	1Gr P01実測図	91
第58図	SK02実測図	63	第91図	2Gr P01実測図	92
第59図	SK02出土遺物実測図(1)	63	第92図	2Gr P02実測図	92
第60図	SK02出土遺物実測図(2)	64			
第61図	SK03実測図	65			
第62図	SK03出土遺物実測図(1)	65			
第63図	SK03出土遺物実測図(2)	66			
第64図	SK04実測図	66			
第65図	SD02実測図	67			
第66図	SD03実測図	68			
第67図	SD05実測図	69			
第68図	SD05出土遺物実測図	69			
第69図	SD06実測図	70			
第70図	VII区出土遺物実測図	71			
X. VII区の調査					
第71図	SK01実測図	74			
第72図	SD01実測図	74			
第73図	VII区遺構配置図	75・76			
第74図	SD02実測図	77			
第75図	P 0 1実測図	77			
X I. VIII区の調査					
第76図	VIII区遺構配置図	80			
第77図	SK01・P01実測図	81			
第78図	SK02実測図	81			
第79図	SD01実測図	82			
第80図	SX01実測図	83			
第81図	SX01出土遺物実測図	83			
第82図	P 0 1実測図	84			
X II. IX区の調査					
第83図	SK01実測図	86			
第84図	SK02実測図	86			
第85図	IX区遺構配置図	87・88			
第86図	SD01実測図	89			
第87図	SD01出土遺物実測図	90			
第88図	SX01実測図	90			
第89図	SX02実測図	91			

I. 調査に至る経緯

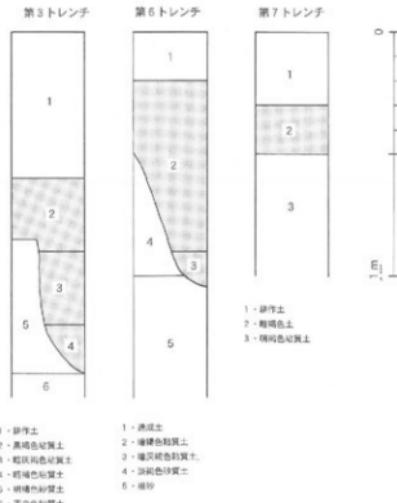
試掘調査は、同年

9月25日と26日の2日間に亘り12ヶ所のトレーニングを設定して実施した(第1図)。その結果、北側に設定した第1・第2トレーニングでは遺構や遺物は検出されなかつたものの、第3トレーニングからは土器類や須恵器などの遺物のほか、落ち込み状の遺構が検出された。このことから、遺跡としては第2トレーニング以南に広がりをもつものと判断した。一方、東西に設定したトレーニングでは、第4～第7トレーニングにおいて遺構や遺物が検出されたが、第7トレーニング以東に設定した第8～第12トレーニングにおいては遺構、遺物とも検出されなかつたことから、遺跡としては第7トレーニング以西に広がりをもつものと判断した。

各トレンチにおける堆積土を第2図に示しているが、北側のトレンチでは灰白色砂質土が基盤層になっており、この基盤層上面で遺構が検出されるとともに遺構面上層が遺物包



第1図 試掘トレンチ位置図



第2図 試掘トレンチ堆積土層図

含層となっている。一方、東西に設定した第4～第6トレンチにおいては、シルト系の砂質土または粗砂が基盤層となって、この上面において遺構が検出されるとともに遺構面上層が遺物包含層となっている。なお、第7トレンチは現況が水田であり、基盤層はしまりのあるシルト系の明褐色粘質土で、その上面に堆積する層が遺物包含層となっている。

試掘調査の結果から出雲市道路河川課と協議を重ね、北側においては第3トレンチと第2トレンチの間、全長25mの区域、東西においては周知の遺跡の範囲を含む全長185mの区域を発掘調査対象とし、調査を平成16年（2004）6月から実施することを確認している。

発掘調査に至る手続きについては、まず、事業者である出雲市から平成16年（2004）5月10日付で埋蔵文化財発掘の通知（文化財保護法第57条の3）が提出された。出雲市教育委員会ではこれを受理し、埋蔵文化財発掘調査の報告（同法第58条の2）を同年5月11日付で島根県教育委員会に提出している。

発掘調査は、平成16年（2004）5月から準備を進め、6月1日から実施した。調査地は便宜上、既設道路や既設建物への出入口などによって区分し、調査を行った順にそれぞれI区～IX区とした（第3図）。なお、III区～IX区にかけてはスクールゾーンに指定されており、歩道の確保が必要なことから狭小な調査区となっている。

各区の調査面積は、I区が東西15m×南北4mの60m²、II区が東西8m×南北25mの200m²、III区が東西7.5m×南北1.5mの11.25m²、IV区が東西36m×南北2mの72m²、V区が東西25m×南北1.5mの37.5m²、VI区が東西20m×南北5mの100m²、VII区が東西11.6m×南北1.4mの16.24m²、VIII区が東西6m×南北5mの30m²、IX区が東西13m×南北7mの91m²で総発掘面積は約620m²である。

各調査区では試掘調査によって確認された包含層までを重機によって取り除いた後、発掘調査を実施した。そして、記録的な猛暑や狭小な調査区、湧水の処理などに悩まされながらも、平成16年（2004）9月29日に調査を終了した。なお、調査終了後に埋蔵文化財発見届（遺失物法第13条）、埋蔵文化財保管証、発掘調査の概報をそれぞれ出雲警察署、島根県教育委員会に提出している。



第3図 発掘調査区位置図

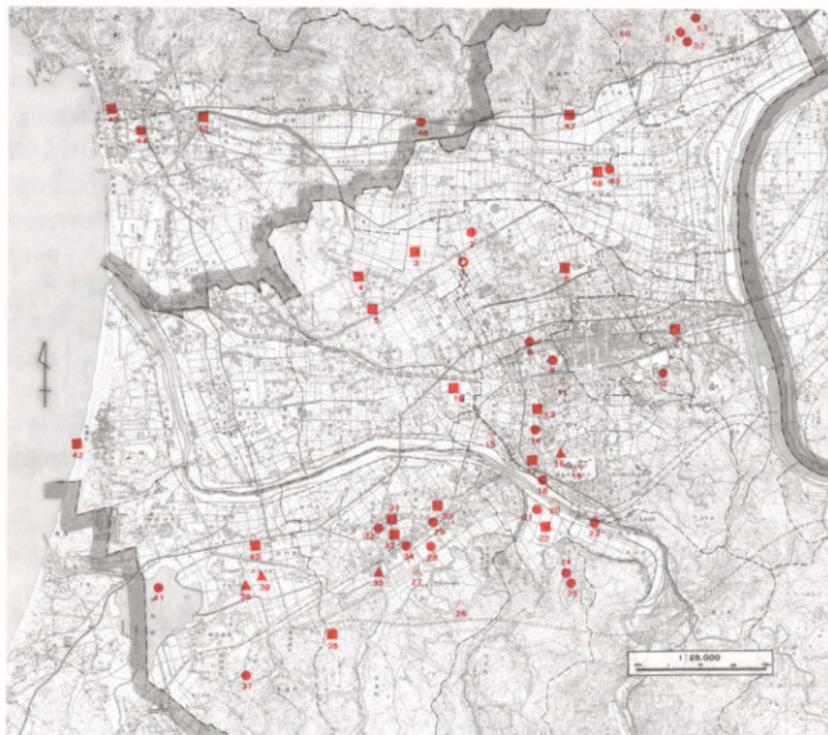
II. 位置と環境

(1) 遺跡の位置 (第4図)

小山遺跡第3地点は、山陰屈指の規模を有する出雲平野のほぼ中央、出雲市小山町に所在し、矢野町及び大塚町との町境付近に位置している。JR出雲市駅から北に1.5kmほど離れた地域に広がっており、周辺は宅地化が進み、日々開発の波にさらされている状況である。

遺跡の現況は、田畠がわずかながら存在しているもののほとんどが宅地として利用され、市道今市通堪線の東側に東西約300m、南北約450mのやや南北に長い範囲で遺物の散布が確認されている。

小山遺跡第3地点が所在する周辺には、北東に隣接して大塚遺跡、北西には出雲市指定史跡である矢野貝塚を含む弥生時代を中心とした大集落遺跡である矢野遺跡、西方には弥生時代後期の溝状遺構



- | | | | | | | | |
|------------|-------------|--------------|------------|-------------|--------------|--------------|-------------|
| 1. 小山遺跡 | 8. 燐古墳 | 15. 神門寺境内廣寺 | 22. 三田谷遺跡 | 29. 大賀古墳 | 36. 保知石遺跡 | 43. 出雲大社境内遺跡 | 50. 萩ヶ葉城跡 |
| 2. 大塔古墳 | 9. 今市大志寺古墳 | 16. 上原治隈六基群 | 23. 光利寺3号墳 | 30. 古志本郷遺跡 | 37. 北丸古墳 | 44. 原山遺跡 | 51. 平林寺山古墳群 |
| 3. 矢野遺跡 | 10. 天神遺跡 | 17. 斜山遺跡 | 24. 岬山古墳群 | 31. 下志遺跡 | 38. 小丸山横穴墓群 | 45. 麦根遺跡 | 52. 鹿鳴山古墳群 |
| 4. 井筒遺跡 | 11. 平岡九城跡 | 18. 上堀治地屋山古墳 | 25. 小坂古墳 | 32. 宝珠古墳 | 39. 福知寺横穴墓群 | 46. 石臼古墳 | 53. 大寺古墳 |
| 5. 白松荒神遺跡 | 12. 西吉原墳群 | 19. 大井城跡 | 26. 莪原城跡 | 33. 田盛遺跡 | 40. 如月宮多聞院遺跡 | 47. 山伴川川岸遺跡 | |
| 6. 中野美保遺跡 | 13. 角田遺跡 | 20. 平分城跡 | 27. 津土寺山古墳 | 34. 紗羅寺山古墳 | 41. 山地古墳 | 48. 中野西遺跡 | |
| 7. 梅伊川鉄橋遺跡 | 14. 上喜市篠山古墳 | 21. 半分古墳 | 28. 放丸山古墳 | 35. 地藏堂横穴墓群 | 42. 上長浜貝塚 | 49. 菊井古墳 | |

第4図 小山遺跡周辺の遺跡

や柱穴などが検出されている小山遺跡第1地点、南方には散布地として知られる第2地点などが所在している。さらに、第3地点より少し離れた南東には弥生時代終末期の多量の木製品や土器とともに橋状遺構が検出されている姫原西遺跡も存在しており、小山遺跡第3地点は以上の遺跡とともに「四絡遺跡群」を形成する遺跡のひとつである。

(2) 歴史的環境

出雲平野を取り巻く地形には、北に北山脈、南に中国山地から派生した丘陵地が連なり、東には宍道湖、西には日本海がある。この宍道湖と日本海には、それぞれ斐伊川、神戸川が注いでおり、出雲平野はこの二大河川によって形成された沖積平野となっている。

しかしながら、遺跡が形成され始めた頃の景観は、現在とはかなり異なっていたようである。奈良時代に編纂された『出雲国風土記』によれば、現在は東流して宍道湖に注いでいる斐伊川が、当時は西流して入海のような状況を呈していた潟湖(現在の神西湖)に注いでいたようである。そして、斐伊川が西流していた当時は、神門水海の北方に注いでいたようである。

このような地形のもと、小山遺跡は斐伊川と神戸川が南部丘陵から入海へと注ぐ平野の中央部付近に位置する旧自然堤防上に立地していたものと考えられる。

出雲平野における遺跡の初源は、平野の北にある菱根遺跡(大社町)、西の砂丘下にある上長浜貝塚^{かみながはま}が知られており、縄文時代早期末の遺物が確認されている。これに続く遺跡としては、縄文時代前期



第5図 小山遺跡近辺の遺跡

末から中期にかけての上ヶ谷遺跡(斐川町)が知られているが、その他では確認されていない。

縄文時代後期・晩期になると、平野の北に出雲大社境内遺跡、原山遺跡(大社町)が営まれるほか、南の丘陵下にある三田谷I遺跡や保知石遺跡、平野中央部の矢野遺跡・藏小路西遺跡などからも遺物が確認されている。

弥生時代には、矢野遺跡・姫原西遺跡や三部竹崎遺跡(湖陵町)などで前期の遺物が確認されているが、規模は小さい。しかし、中期中葉以降、入海周辺の沖積地に集落が飛躍的に拡大し、天神遺跡・古志本郷遺跡・下古志遺跡など集落を囲繞する環濠を有する大規模集落が営まれ、その拡大は古墳時代前期にまで及んでいる。

また、弥生時代後期には四隅突出型墳丘墓6基を含む西谷墳墓群が斐伊川に近い南の丘陵に築造される。この中には、突出部を入れると一辺60m近くもある3号墓など大形のものもあり、この頃にはある程度共同体的結合が図られ、首長の権力が強大になってきたことが窺える。そして、近年の発掘調査によって、平野部の中野美保遺跡や青木遺跡からも四隅突出型墳丘墓が発見され、集落と墓域の関係などを考えるうえで注目されている。

古墳時代には斐伊川左岸の南部丘陵地に三谷遺跡・長堀遺跡が所在し、古墳時代中期の土壙や竪穴式住居跡などが確認され、神戸川右岸の南部丘陵地にも三田谷I遺跡から多量の遺物とともに竪穴住居跡などが確認されている。また、平野部でも中野美保遺跡や中野西遺跡からは土壙などの遺構に伴って古墳時代中期の遺物が確認され、平野の北に位置する井原遺跡でも当該期の多量の遺物とともに溝や井戸、ピットなどの遺構が確認されている。

また、当該期の古墳としては、北山山脈に大寺古墳や上島古墳(平田市)が築造されるほか、神門水海に近い南部丘陵地には北光寺古墳、県内では類例の少ない筒型銅器を副葬し、内海航路を押さえた首長の墓と目される山地古墳などが築造される。

古墳時代後期後半には、今市大念寺古墳・上塩治築山古墳・地蔵山古墳など、横穴式石室を有す大規模な古墳が築造される。また、平野南部の丘陵斜面には上塩治横穴墓群・神門横穴墓群など大規模な横穴群が築かれ、東部出雲の安来平野、意宇平野に並ぶ勢力が存在していたことが窺える。しかし、これら古墳の被葬者を支える基盤となったであろう大集落遺跡は、現在のところ確認されていない。

奈良時代にも遺跡は点在しているが、あまり詳しいことはわかっていない。一方、この時期になると神門寺境内庵寺・長者原庵寺など私寺が建造されるとともに、小坂古墳の石櫃や朝山古墓、菅沢古墓のほか、墳丘内から石製骨蔵器が発見された光明寺3号墓などの初期火葬墓があり、古墳から火葬墓への過渡期の様子が明らかになりつつある。

中世の遺跡は、各地で井戸や建物跡などの遺構が検出されているが、集落としては部分的なものが多く、あまり詳しいことはわかっていない。その中にあって、出雲大社境内遺跡からは、平安時代から中世にかけての出雲大社の壮大さを示す3本を束にした柱跡が確認されている。そのほか、矢野遺跡からは14~15世紀にかけての溝で区画された屋敷地が発掘されており、藏小路西遺跡・姫原西遺跡からは中世の木棺墓が発見されている。

III. 4次に亘る発掘調査と遺跡の範囲

1. 4次に亘る発掘調査

小山遺跡第3地点では、これまでに種々の開発に伴い、4次の発掘調査が行われている(第6図)。

(1) 第1次発掘調査 一県立看護短大教員宿舎整備事業に伴う発掘調査—(1994年)

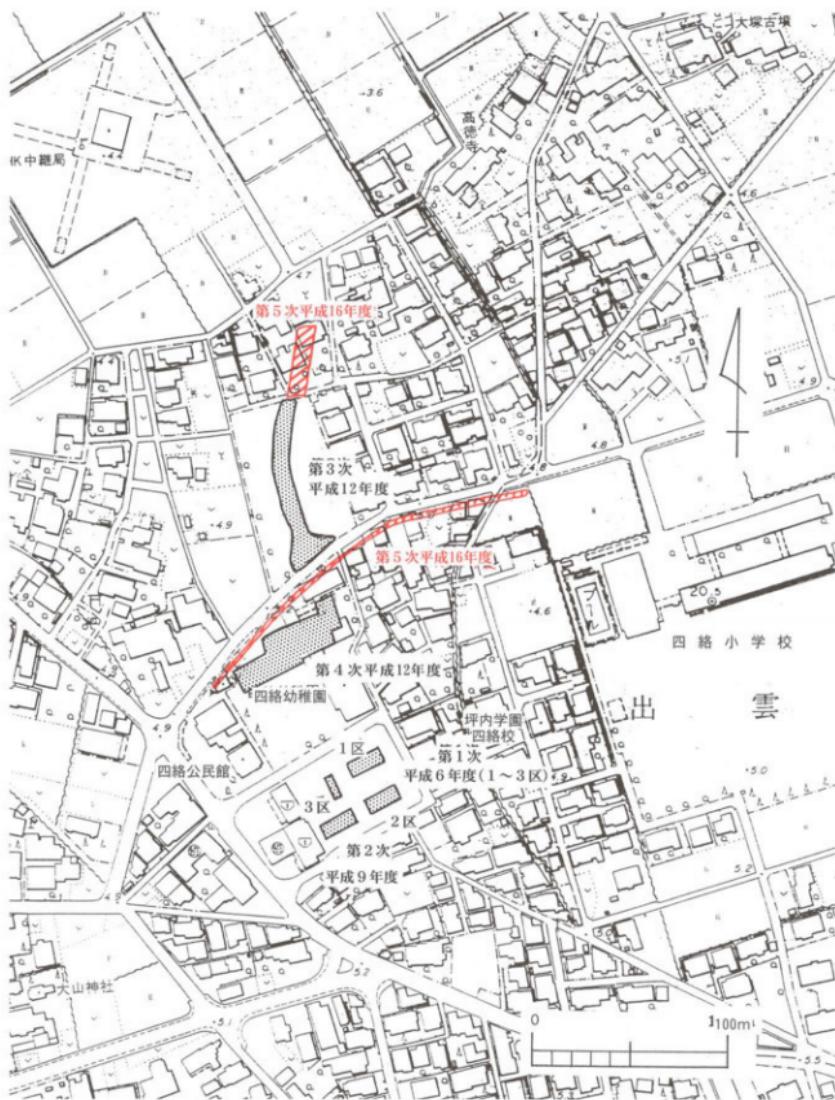
教員宿舎2棟と合併浄化槽建設部分の3ヶ所について発掘調査が行われている。1区では土坑や溝、ピット状遺構などが密に検出されている。特に奈良時代の須恵器片が比較的良好な状態で多数出土している。2区においても同様な遺構を多数検出しているが、包含層から底部に「池内」と墨書きされた9世紀後半頃の土師器壺や「井」とヘラ書きされた8~9世紀頃の須恵器長頸壺が出土している。当該地は『出雲國風土記』によれば「神門郡八野郷」に比定される地域であるとともに、これらの文字資料が出土したことから、郷庁の関連施設などが付近に存在する可能性が指摘されている。最も西に位置する3区では遺構・遺物ともに極端に少ないことから、西に位置する旧河道あるいは後背湿地の影響による氾濫を受ける可能性が強く、小山遺跡第3地点の西の縁辺部に位置するものと推察されている。なお、遺物には弥生時代中期後葉から平安時代にかけてのものが確認されているが、古墳時代前期後半から後期にかけては空白期間となっていることが指摘されている。

(2) 第2次発掘調査 一島根県立看護短期大学教職員宿舎建設に伴う発掘調査—(1997年)

教職員宿舎建設部分において発掘調査が行われており、第1次発掘調査から西に約10mほど離れた地域である。遺構としては南北方向に伸びる3条の大溝や土坑、ピット状遺構などを多数検出している。大溝はいずれも弥生時代後期頃のものであり、集落の区画や用排水路としての機能が推察されている。土坑、ピット状遺構は大部分が奈良時代から平安時代にかけてのものと考えられている。また、第1次発掘調査でも指摘されていたように古墳時代の大部分が空白期となっていることが指摘されている。

(3) 第3次発掘調査 一市道四経30号外1線道路改良工事に伴う発掘調査—(2000年)

道路建設部分の幅約8m、長さ約90mの範囲について発掘調査が行われている。遺構としては溝や土坑、ピット状遺構のほか、柱列や掘立柱建物跡なども検出されている。溝状遺構の中には弥生時代中期後葉から後期前葉にかけて掘削されたSD23のように「環濠」と目されるものも検出されている。また、中世期の遺構であるSK01からは骨材を採取した牛馬の骨が出土しており、付近に骨材生産に携わった工人の存在が指摘されているほか、SK18は調査区で唯一の古墳時代後期の遺構とされている。ピット状遺構の中には奈良時代から平安時代にかけての柱列となるSA01や掘立柱建物跡であるSB01~03も検出されている。遺物としては第1次発掘調査でも出土した底部に「井」の文字がヘラ書きされた須恵器高台付壺が1点出土しているものの、郷庁関連施設に比定できるような遺構は検出されていない。



第1次調査 県立看護師大教員宿舎整備事業に伴う調査 (1994)
 第2次調査 県立看護師大教職員宿舎建設に伴う調査 (1997)
 第3次調査 市道四格30号外1線道路改貯工事に伴う調査 (2000)
 第4次調査 四格幼稚園改築事業に伴う調査 (2000)

第6図 小山遺跡第3地点発掘調査例位置図

(4) 第4次発掘調査 一四絡幼稚園改築事業に伴う発掘調査一 (2000年)

四絡幼稚園新園舎建設部分の約1200m²について発掘調査が行われている。遺構としては溝や土坑、ピット状遺構などのほか、井戸や掘立柱建物跡も多数検出されている。時期的には弥生時代中期後葉から中世末の遺構まで多岐にわたっているが、この調査においても古墳時代の大部分が空白期となっていることが指摘されている。主な遺構としては、弥生時代中期後葉から後期前葉に築かれた、溝内に土器が一括廃棄されたSD03があり、市内天神遺跡や古志本郷遺跡と同様に環濠の可能性が指摘されている。奈良時代から平安時代に築かれた遺構としては、SE04などの井戸や多量の上器が出土し、廃棄坑と考えられるSK10のほか、大形の掘立柱建物跡で倉庫跡と目されるSB02、「人口」と推察される墨書き土器が出土したSB03などが検出されている。中世末の遺構としては、溝状遺構や井戸跡などが検出されているが10世紀以降、14世紀までの遺構ではなく、この期間においても集落としての断絶があったことが指摘されている。

2. 小山遺跡第3地点の範囲

小山遺跡第3地点は出雲市小山村に所在し、矢野町及び大塚町との町境付近に位置している、遺跡の範囲は東西約300m、南北約450mのやや南北に長い広範囲において遺物の散布が確認されている。これまでの発掘調査によって、遺構や遺物が数多く検出され、弥生時代中期後葉から中世に至るまでの長期間にわたって集落が営まれていることが明らかとなっている。しかしながら、古墳時代前期後半から後期後半の遺構や遺物は少ないことから、この時期に遺跡としての断絶が認められている。

また、遺構や遺物の出土状況から考えると、第4次発掘調査が行われた地域が遺跡としての中心地と推定され、遺構や遺物の検出量も他の調査を圧倒している。

小山遺跡第3地点が所在する地域は、市内でもいち早く宅地化が進み、発掘調査についても部分的で面的な調査が少ないが、墨書き土器などの文字資料の出土や拠点集落とされる矢野遺跡と隣接していることから「八野郷庁」の関連施設の存在が指摘されており、市内でも特に注視していく必要のある遺跡である。

註

- (1) 「出雲市埋蔵文化財調査報告書第6集 一小山遺跡一」 出雲市教育委員会 1996年
- (2) 「小山遺跡発掘調査報告書」 出雲市教育委員会 1999年
- (3) 「小山遺跡第3地点発掘調査報告書(第3次発掘調査)」 出雲市教育委員会 2002年
- (4) 「小山遺跡第3地点発掘調査報告書(第4次発掘調査)」 出雲市教育委員会 2002年
- (5) 「天神遺跡第7次発掘調査報告書」 出雲市教育委員会 1997年
- (6) 「古志本郷遺跡II」 島根県教育委員会 2001年

IV. I 区の調査

1. 発掘調査の概要

I 区は調査地の中では唯一、水田として利用されていた地域にあたり、西側及び北側は既設道路が走り、東側には排水路が通っている。調査に入る前に、試掘調査によって確認されていた遺物包含層までの水田耕土を20cm程度重機によって取り除き、排土した。そして、東西に5m間隔、南北に3m間隔のグリッドを設定し、西から1Gr~3Grとした。調査面積は東西約15m、南北約4mの約60m²である。なお、水処理及び堆積土の状況を調査するために調査区の南側に約30cm幅の側溝を設定している。

層序（第8図）

調査区における基本的な層序は、水田耕作土を除くと上層から褐灰色土、灰色粘質土、暗褐色粘質土、灰褐色粘質土と堆積して基盤層である非常にしまりのある黄褐色シルト質土に達する。また、堆積土層すべてに褐色粒子を含んでいることが特徴である。このうち、暗褐色粘質土、灰褐色粘質土が比較的安定した遺物包含層となっている。また、この層序は、I 区全域にわたってほぼ一様であるが、基盤層における標高が西側で3.88mであるのに対し、東側では3.72mと16cmも低くなっていることが注意される。試掘調査においては I 区の東側には遺跡の存在は認められないことから、この地域が小山遺跡第3地点北東の縁辺部にあたり、これよりも低い地域では生活を営めなかつたのであろう。

遺構はすべて基盤層である黄褐色シルト質土上面で検出しているが、他の調査区における遺構検出レベルよりも約20~30cm程度低くなってしまっており、水田として利用されていたこととともに、後世にかなりの削平があったものと考えられる。

遺構（第8図）

遺構としては溝状遺構1、落ち込み状遺構2のほか、ピット状の遺構を多数検出している。遺構内からの出土遺物が少ないため、遺構が築かれた時期については断定できないが、包含層からわずかに出土している遺物には奈良・平安時代から中世期にかけてのものが多く、このいすれかの時期に築かれたものと推察される。

このうち、溝状遺構であるSD01は、西南西→東北東方向に伸びる丁寧に掘り込まれたものであり、水路として機能していたものと考えられるが、時期的には不明である。落ち込み状遺構は、いずれも部分的な検出であり機能については不明であるが、SX01からは底部に回転糸切り痕が認められる須恵器が出土し、SX02付近からは高台をもつ須恵器が出土していることから、奈良時代から平安時代にかけて築かれたものと考えられる。また、ピット状遺構を多数検出しているが柱根などは出土しておらず、掘立柱建物跡となるような配置は認められていない。しかしながら、部分的には直線上に配置されるものもあり、柱列や柵列などとして機能していた可能性もある。

遺物

遺物は調査区を通して少ないが、基盤層である黄褐色シルト質土の上層に堆積する暗褐色粘質土、灰褐色粘質土からの出土がほとんどで、土師器、須恵器、磁器などが出土している。これらの遺物はいずれも奈良時代以降のものであり、それよりも古い時期のものは皆無の状況であった。時期的には底部に回転糸切り痕が認められる土師器や須恵器、高台をもつ須恵器など奈良時代から平安時代にかけての遺物が比較的多く、I区における中心的な時期は当該期にあつたことが窺える。また、特徴のある遺物としては移動式竈や15世紀後半から16世紀頃にかけての白磁がそれぞれ1点づつの破片ではあるが出土している。

2. 遺構と遺物

S D 0 1 (第7図)

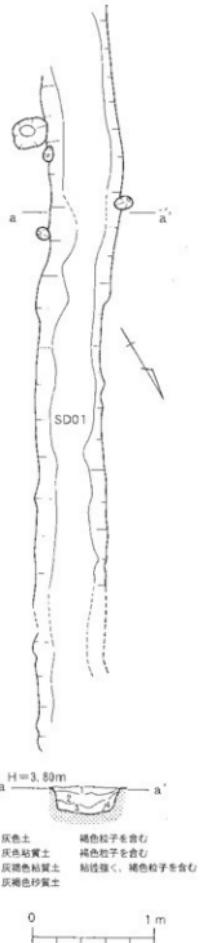
調査区のほぼ中央、2~3Grにかけての黄褐色シルト質土上面で検出した西南西一東北東方向に伸びる溝状遺構である。北側では試掘溝によって一部切られているが、南北ともに調査区外へとさらに伸びている。

検出した状況からは、検出長6.0m以上、最大幅62cm、狭いところで54cmを測り、遺構の肩部、底面ともに丁寧に作り出されていることが特徴である。また、上部はかなりの削平を受けているものと考えられることから、本来はかなりの規模を有する溝状遺構であったことが推察される。なお、検出高は標高3.82mである。

覆土には、上層に褐色粒子を含む灰色土、灰色粘質土が堆積し、下層には粘性の強い灰褐色粘質土や灰褐色砂質土が堆積して基盤層である黄褐色シルト質土へと達している。断面の形状は溝幅には関係なくほぼ一様で、両肩から鋭角に落ちて底面はほぼ平坦に作り出しており、最深部までは24cmを測る。また、底面におけるレベルは一様ではなく、南側で3.58mであるのに対し北側では3.64mと6cm程度低くなっている。北に向かって緩やかに傾斜していることが注意される。

遺構内からの遺物は皆無であり、遺構が築かれた時期について断定することはできないが、切合関係より周辺で多数検出されているピット群より古い時期に築かれたことは明らかで、I区の中でも古い遺構であると言える。

機能としては覆土下層に粘質土が堆積し、底面のレベルに傾斜が認められることなどから、水路として機能していたものと推察され、南方から北方に向かって流れていたものと考えられる。



第7図 SD01 実測図



第8図 I区遺構配置図

S X 0 1 (第9図)

調査区の西側、1Grの黄褐色シルト質土上面で検出した落ち込み状遺構である。北側及び西側は調査区外へと達しており、上部はかなりの削平を受けているものと考えられる。平面プランは現状からは判断できないが、南北長2.0m以上、東西長70cm以上を測る。なお、検出高は標高3.79mである。

覆土には上層に灰色粘土をブロック状に含む暗褐色粘質土、下層には粘性の強い黒褐色粘質土が堆積して基盤層である黄褐色シルト質土へと達している。断面の形状は一様ではなく、遺構内には大小のピット状の窪みが数ヶ所に認められる。しかし、南側では肩部から緩やかに落ちて平坦面を作り出し、そこから約45度の角度でさらに落ち、ほぼ中央部に位置する最深部へと達しており、最深部までは29cmを測る。

遺物には図示してはいないが、最深部で須恵器片が1点出土している。底部に回転糸切り痕が認められることから奈良時代頃の資料と考えられ、遺構が築かれたのも当該期である可能性が強い。なお、機能については部分的な検出であることから不明である。

S X 0 2 (第10図)

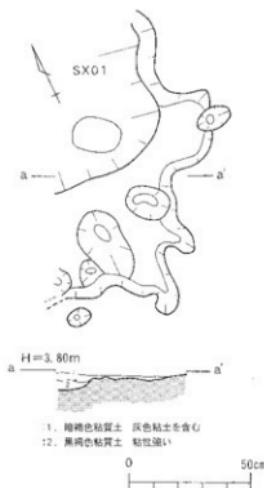
調査区の東端、3Grで検出した落ち込み状遺構である。東側及び南側は調査区外へと達しているとともに、上部はかなりの削平を受けているものと考えられる。平面プランは現状からは判断できないが、東西長3.0m以上、南北長2.0m以上を測り、かなり大規模な遺構であることが推察される。なお、検出高は標高3.84mである。

覆土には上層に褐色粒子を含む褐色土や黄褐色土が堆積し、1段深くなっている下層には灰褐色粘質土、粒子のやや粗い黄褐色粘質土が堆積して基盤層である黄褐色シルト質土へと達している。断面の形状は、肩部から緩やかに落ちて平坦面を作り出し、そこからさらに落ちて底面はほぼ平坦に作り出しており、最深部までは24cmを測る。なお、遺構底面及び肩部には大小のピット状遺構が築かれており、かなりの凹凸が認められている。

遺構内からの出土遺物は皆無であるが、上層に堆積する灰色粘質土や暗褐色粘質土からは奈良時代から平安時代にかけての遺物が多く出土していることから、当該期に築かれた遺構である可能性が強い。機能については、遺構内に掘り込まれた大小のピットが何らかの機能をもつものと考えられるものの、平面プランが明らかではなく、遺物も皆無であることから不明である。

P O 1 (第11図)

1Grの黄褐色シルト質土上面で検出した南西—北東方向に基軸をもつピット状遺構である。平面



第9図 SX01 実測図

プランは長軸長24cm、最大幅20cmを測る楕円形状を呈している。なお、検出高は標高3.81mである。

覆土には上層に黒褐色砂質土、下層に褐色砂質土が堆積して基盤層である黄褐色シルト質土へと達している。断面の形状は、肩部から鋸角に落ちて底面は平坦に作り出しており、最深部までは11cmを測る。なお、東側ではこのピットに接して小ピットが築かれている。

遺物は全く出土しておらず、遺構が築かれた時期について断定することはできないが、I区では奈良時代以前の遺物が皆無であることから、それ以降に築かれた遺構であろう。また、同様の覆土が認められる同規模のピットが数ヶ所に確認されているが、これらには掘立柱建物跡となるような配置は認められず、機能については不明である。

P02 (第12図)

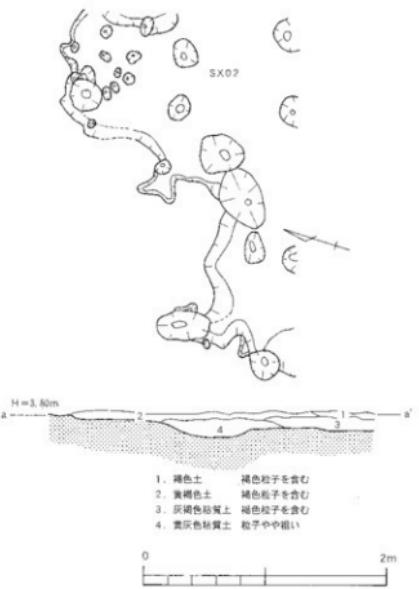
3Grの黄褐色シルト質土上面で検出した南南東—北北西方向に基軸をもつピット状遺構である。平面プランは、長軸長32cm、最大幅26cmを測り、やや北に偏った位置に最大幅をもつやいびつな楕円形状を呈している。なお、検出高は標高3.79mである。

覆土には上層から褐色土、褐色粘質土、最下層には粘性の強い暗褐色粘質土が堆積して基盤層である黄褐色シルト質土へと達している。断面の形状は、東肩部からは鋸角に、西肩部からは約45度の角度で落ちてやや東に偏った底面は丸く作り出しており、最深部までは19cmを測る。

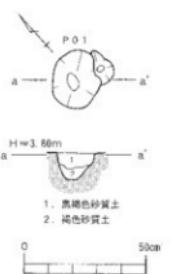
遺物は全く出土しておらず、遺構が築かれた時期について断定することはできないが、前述したP01と同様に奈良時代以降に築かれた遺構であろう。なお、同時期に築かれたと考えられ、同様の覆土が認められるピット状遺構が数ヶ所で確認されているものの、これらには掘立柱建物跡となるような配置は認められず、機能については不明である。

その他のピット状遺構について

I区では多数のピット状遺構を検出しているが、その多くは長軸10cm、深さ5~10cm程度の規模の



第10図 SX02 実測図



第11図 P01 実測図

ものである。これらの中には根跡と考えられるものも含まれているものと考えられるが、I 区は他の調査区と異なり、水田として利用されていたために上面の削平が大きく、単純に無視することはできない。また、小ビットの中には回転糸切り痕が認められる土師器や須恵器なども數点含まれており、これらのビット群も奈良・平安時代から中世期にかけて築かれた可能性が強いものである。また、20~40cm程度のビット状遺構も多数確認されており、1~2Grあるいは3Grでは部分的ではあるが直線上に配置されるものも確認されている。これらは掘立柱建物跡の配置とはならないが、柱列、あるいは柵列などとして機能していた可能性もある。

I 区の出土遺物（第13図）

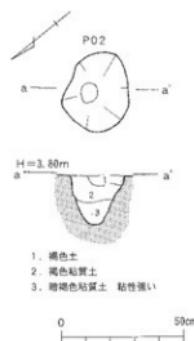
第13図—1は、土師器坏である。底部から体部にかけて直線的に逆「ハ」の字状に開き、底部と体部との境は明瞭である。なお、外面の一部にはススが付着している。内外面とも回転ナデ、底部は回転糸切りによって切り離されている。小片であるために時期を断定することはできないが、奈良時代から中世期にかけての資料であろう。

2は、須恵器坏あるいは塊である。底部から体部にかけて内湾しながら立ち上っている。外面は回転ナデ、底部は回転糸切りによって切り離されている。形状から高広編年IV-A期に相当する資料で、8世紀中葉から後半にかけてのものであろう。3も須恵器坏あるいは塊である。2と同様に内湾しながら立ち上がるものであるが、底部と体部との境は明瞭ではない。内外面とも回転ナデ、底部は回転糸切りによって切り離され、内面には淡緑灰色の自然釉がかかっている。2と同様に高広編年IV-A期に相当する資料であろう。4は、高台が付く須恵器杯である。高台は短く直立し、断面が正方形に近いもので、底部から体部にかけては直線的に立ち上がっている。内外面とも回転ナデ、底部は糸切り後、ナデ調整が行われている。高広編年IV-B期に相当し、8世紀末から9世紀前半代の資料であろう。

5は、移動式竈の焚口側面の破片と考えられる。小山遺跡第3地点においては、第3次・第4次^⑤発掘調査においても出土しており、市内でも三田谷Ⅰ遺跡や井原遺跡、老丁田遺跡などで良好な資料が出土している。なお、移動式竈は、出雲地方においては6世紀後半から8世紀初頭にかけての所産と考えられている。

6は、短く直立する高台を有す白磁碗である。外面底部を除いて乳白色に施釉されている。中世末頃の資料と考えられるものである。

以上のように I 区での遺物の出土量はわずかであるが、遺物の中には古墳時代後期以前のものは皆無あり、当該地においては奈良時代以降に人々の生活の様子を窺い知ることができる。なお、試掘調査の結果から、I 区の東側では遺跡が確認されていないことから、当該地は小山遺跡第3地点の北東縁辺部にあたるものと考えられる。



第12図 P02 実測図

註

(1)「高広遺跡発掘調査報告書」

島根県教育委員会 1984年

(2)「小山遺跡第3地点発掘調査報告書
(第3次発掘調査)」

出雲市教育委員会 2002年

(3)「小山遺跡第3地点発掘調査報告書
(第4次発掘調査)」

出雲市教育委員会 2002年

(4)「三田谷I遺跡 Vol. 1」

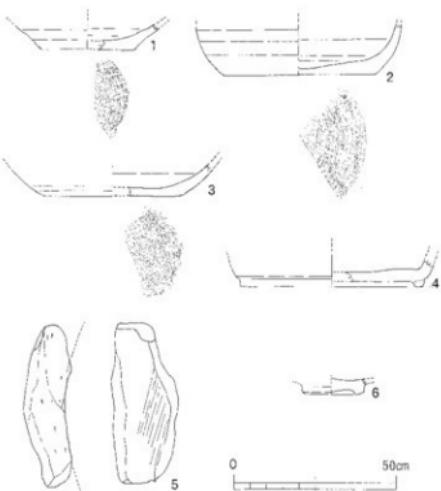
島根県教育委員会 1999年

(5)「井原遺跡発掘調査報告書」

出雲市教育委員会 2002年

(6)「若丁田遺跡発掘調査報告書」

出雲市教育委員会 1998年



第13図 I区出土遺物実測図

I区 出土遺物観察表

鉢岡番号	出土地点	器種	法墨 (cm)			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
			口径	底径	器高					
13-1	3Gr	土師器 環	-	3.6	-	外／山毛ナデ 内／回転ナデ 底／回転糸切り	褐色	密 1mm以下の白色砂粒・ 石片・雲母を含む	良好	外側にスス付着
-2	2Gr 無灰土	須恵器 環	-	9.7	-	外／山毛ナデ 内／回転ナデ 底／回転糸切り	青灰色	密 1mm以下の白色砂粒 を含む	良好	
-3	2Gr 無灰土	須恵器 環	-	10.0	-	外／山毛ナデ 内／回転ナデ 底／回転糸切り	灰色	密	良好	内面に淡緑灰色の 焦油がかかる
-4	3Gr	須恵器 高台付環	-	10.0	-	外／回転ナデ 内／山毛ナデ 底／糸切り後、ナデ	灰色	密	良好	
-5	1Gr 粘土質 粘土質	土師器 移動式輪	-	-	-	外／ハケ、ナデ 内／ケズリ	褐色	やや粗い	良好	
-6	1Gr 灰土粘質土	白磁 磁器碗	-	3.6	-	外／ナデ 内／ナデ	褐色	密	良好	外底底部を除き、乳 白色に施釉

V. II区の調査

1. 発掘調査の概要

II区は、以前は宅地として利用されており、平成11年度の第3次発掘調査を実施した地域の北側にあたる。調査に入る前に、試掘調査によって確認されていた遺物包含層までの造成土及び耕作土を重機によって取り除き、排土した。そして、調査区中央を基点として南北方向に5m間隔で杭を設定し、東側には4~4.5m、西側には2.5m~3m間隔で杭を設定し、西側をAGr、東をBGrとして南からそれぞれA1~A6Gr、B1~B6Grとした。調査面積は、東西約8m、南北約25mの約200m²である。なお、水処理のために調査区を開むように約30cm幅の側溝を設定している。

層序（第14図）

調査区における基本的な層序は、北側と南側では若干異なっている。南側での基本的な層序は、造成土を除くと耕作土である褐色土、灰褐色土、暗褐色砂質土、褐色砂質土と堆積して基盤層である黄褐色砂質土へと達する。なお、調査区北側では新しい時期の搅乱が特に大きく、黄褐色砂質土まで達している部分も認められる。

一方、北側における基本的な層序は、耕作土である褐色土の下面是橙褐色土、暗褐色砂質土、淡褐色土と堆積して基盤層である黄褐色砂質土へと達する。このうち、橙褐色土、淡褐色土は南側に堆積する灰褐色土、褐色砂質土とそれぞれ対応するものである。なお、基盤層におけるレベルは全体を通してほぼ一定で、標高4.10m付近にある。

遺構は全て黄褐色砂質土上面で検出しているが、溝状遺構であるSD02の底面は黄褐色砂質土の下面にあたる灰白色粗砂層にまで達していることが注意される。この灰白色粗砂層は、縄文時代後期頃に斐伊川の氾濫によって出雲平野一帯に厚く堆積するものと考えられている。

遺構（第14図）

遺構は、全てが黄褐色砂質土上面からの検出で、溝状遺構2のほか土坑状遺構やピット状遺構を多数検出している。溝状遺構のうちSD02は、東南東—西北西方向に基軸をもち、幅2m、深さ1mを測る大規模なもので、奈良時代から平安時代にかけての水路として利用されていたものと推察される。また、土坑状遺構やピット状遺構の中には、直線上に配置されるものや掘立柱建物跡と考えられるものがある。1~2GrにかけてのSK01やP03、SK16は南南東—北北西方向に基軸をもち、3~4GrにかけてのSK04、P01、P02は西南西—東北東方向に基軸を向けており、ほぼ等間隔で直線上に配置されるものである。これらは柵列あるいは柱列として機能していた可能性をもつもので、出土遺物から奈良時代から平安時代にかけて築かれたものと推察される。また、5Grで検出されたSK25を基点として東北東にSK13、西北西にSK08、SK35などが直交して配置されており、部分的ではあるが掘立柱建物跡と推察される。

他の土坑状遺構では、土壙墓としての機能が想定されるSK10、SK11、P01などがあり、遺構内からは古墳時代前期初頭の遺物が検出されている。II区での遺構配置は、前述したように西北西—東北東、

北北西—南南東方向に基軸をもつものが多いことが一つの特徴となっている。

遺物

遺物は、造成土を除くと基盤層である黄褐色砂質土上面に堆積する全ての層に包含しており、奈良時代から平安時代にかけての土師器、須恵器を中心として磁器、土製品、木製品もわずかに出土している。特に褐色土、灰色土は安定した遺物包含層となっており、小片が多いものの遺構内からも出土している。奈良時代から平安時代にかけての遺物は、5Gr以西に配置されるほとんどの遺構内から検出されており、これらの遺構は当該期に築かれたものである可能性が高い。また、北側の6Grに並列して築かれるSK10、SK11、P01からは古墳時代前期初頭頃の甕や高壺が出土しており、良好な資料となっている。遺物包含層からの出土遺物も5Grを境として南側には奈良・平安期、北側では古墳時代前期初頭頃の遺物が多く出土しており、このように出土地点によって時期が二極化していることは、各期における生活基盤を探るうえでも今後、注視していく必要がある。

中近世の遺物もわずかに認められるとともに、土製品では土錐、木製品ではSK13から柱根と考えられる杉材が出土している。

2. 遺構と遺物

SK01 (第15図)

調査区の南側、B1Grの黄褐色砂質土上面で検出した南南東—北北東方向に基軸をもつ土坑状遺構である。上部はかなりの削平を受けているものと考えられるが、平面プランは長軸長1.0m、最大幅50cmを測り、南側に張り出した部分をもつややいびつな形状を呈している。なお、検出高は標高4.21mである。

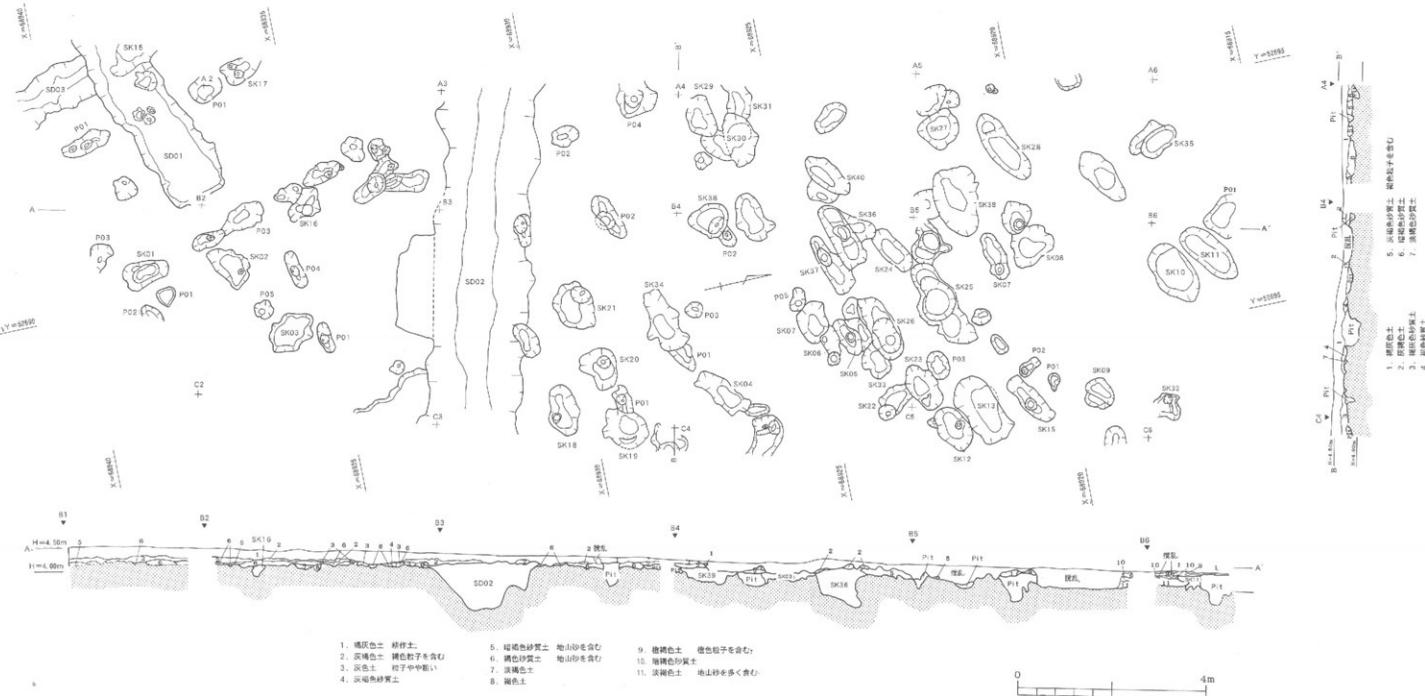
覆土には上層に褐色粒子を含む褐色土、下層には褐色土や灰褐色砂質土が堆積して基盤層である黄褐色砂質土へと達している。断面の形状は、基本的には肩部から鋭角に落ちるが、途中からはほぼ垂直に落ちている部分も認められる。底面はほぼ平坦に作り出しており、最深部までは18cmを測る。

遺物には土師器や須恵器小片がわずかに出土しているにすぎず、時期的な判断をすることは難しい。機能としては、北西に位置するP03、SK16などと基軸を同一にして直線上に配置されていることが注意される。掘立柱建物跡とはならないものの、柵列あるいは柱列などとして機能していた可能性もある。

SK02 (第16図)

B2Grの黄褐色砂質土上面で検出した南西—北東方向に基軸をもつ土坑状遺構である。平面プランは上部がかなり削平を受けているものと考えられるが、長軸長1.04m、最大幅60cmを測り、北東側で幅が広いややいびつな形状を呈している。なお、検出高は標高4.21mである。

覆土には上層に厚く褐色粒子を含む褐色土、下層には褐色粘質土が堆積して基盤層である黄褐色砂質土へと達している。断面の形状は、肩部から約45度の角度で落ちて底面は丸くレンズ状に作り出



第14図 II区遺構配置図

しており、最深部までは16cmを測る。

遺物は全く出土しておらず、築かれた時期について判断することはできない。機能についても直線上あるいは掘立柱建物跡となるような配置は認められず、不明である。

SK04 (第17図)

調査区のほぼ中央、B4Grの黄褐色砂質土上面で検出した南西—北東方向に基軸をもつ土坑状遺構である。平面プランは上部がかなり削平されているものと考えられるが、長軸長1.24m、最大幅48cmを測り、細長い隅丸長方形状を呈している。なお、検出高は標高4.18mである。

覆土には上層から灰褐色土、褐色土、淡褐色砂質土、褐色砂質土と堆積して基盤層である黄褐色砂質土へと達している。断面の形状は、肩部から鋭角に落ちてやや北側に偏った位置にある底面はほぼ平坦に作り出しており、最深部までは48cmを測る。

遺物には土師器や須恵器小片が出土しているにすぎず、遺構が築かれた時期について断定することは難しい。機能については、北西に位置するSK34、P02などと直線上に配置されており、掘立柱建物跡とはならないものの、柵列あるいは柱列のようなものとして機能していた可能性がある。

SK05・SK06 (第18図)

B5Grの黄褐色砂質土上面で重なり合うような状態で検出した土坑状遺構である。

SK06は、西側でSK07、北側でSK05と切合関係にあり、SK07よりも古く、SK05よりも新しい時期に築かれた遺構であることが明らかである。検出した状況では長軸長70cm以上、最大幅40cmを測り、東西に細長い形状を呈している。また、東側ではピット状にさらに掘り込まれた部分が認められる。なお、検出高は標高4.18mであり、基軸は東西方向を向いている。

覆土には上層から褐色土、黄褐色土、淡褐色砂質土、褐灰色土と堆積して基盤層である黄褐色砂質土へと達している。断面の形状は、南肩部からは鋭角に、北肩部からは約45度の角度で落ちて底面は丸く作り出しており、最深部までは30cmを測るが、東側でさらにピット状に深く掘り込まれた部分では深さ68cmを測る。

遺物は全く出土しておらず、遺構が築かれた時期について断定することはできないが、切合関係にあるSK07やSK05からは土師器や須恵器小片が出土していることから、これらの遺構と大きな時期的な差はないものと考えられる。機能については、北西に位置するSK29などが直線上に配置されることから、柵列あるいは柱列として機能していた可能性がある。



第15図 SK01 実測図



第16図 SK02 実測図

SK05は、西側がピット状遺構と切合関係にあり、このピットよりも新しい時期に築かれたことが明らかである。検出した状況では、平面プランは長軸長86cm、最大幅64cmを測るやや東西に長い隅丸長方形を呈している。なお、検出高は標高1.18mであり、基軸は西南西—東北東を向いている。

覆土には上層に淡褐色土や褐色土、下層には灰褐色土、褐色土が堆積して基盤層である黄褐色砂質土へと達している。また、ピット状に深く掘り込まれた部分では、上層から黄褐色土、灰褐色土、暗褐色砂質土の堆積が認められる。断面の形状は、南肩部からは鋭角に落ちてピット状に深く掘り込まれた最深部へと達し、深さは68cmを測る。北肩部からは鋭角に落ちて一度平坦面を作り出し、そこからさらに落ちて最深部へと達している。

遺物には、土師器小片が出土しているにすぎず、遺構が築かれた時期について断定することは難しい。機能については1段深くピット状に掘り込まれた部分が何らかの機能をもつものと考えられ、北側に位置し、基軸を同一にするSK25、SK07などと直線上に配置されることから、柵列あるいは柱列として機能していた可能性をもつものである。

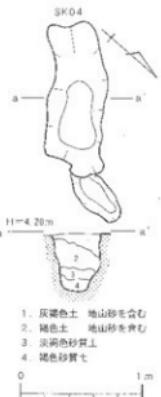
SK10・SK11（第19図）

調査区の北側、B6Grの黄褐色砂質土上面で検出した土坑状遺構で、基軸をほぼ同一にし、並列して配置されている。

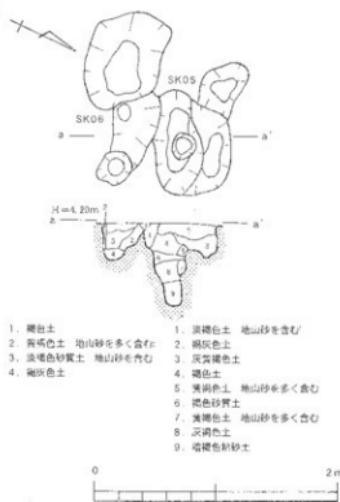
SK10は上部がかなり削平を受けているものと考えられるが、平面プランは長軸長1.38m、最大幅72cmを測る楕円形状を呈している。検出高は標高3.98mであり、基軸は南西—東北を向いている。

崩壊と造成土が深かったことから、堆積土の詳細な状況は確認できていないが、B6～C6杭に設定したトレンチでは上層に暗褐色砂質土、中層に褐色土や褐色粘土土、下層には暗褐色粘土土が堆積して基盤層である黄褐色砂質土へと達している。断面の形状は、肩部から約45度の角度で落ちて底面はほぼ平坦に作り出しており、最深部までは46cmを測る。なお、底面におけるレベルは、北東で標高3.56mであるのに対し南西では3.52mと緩やかに傾斜していることが注意される。

遺物には複合口縁をもつ古式土師器小片が出土していることから、遺構が築かれた時期については弥生時代終末期から古墳時代前期初頭頃と考えられる。機能については、他の土坑状遺構よりやや規



第17図 SK04 実測図



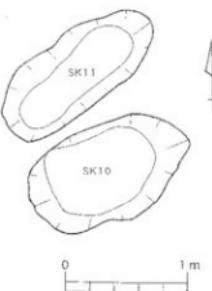
第18図 SK05・SK06 実測図

模が大きく、SK11と並列して配置されていることなどから、土壌墓としての可能性をもつものである。

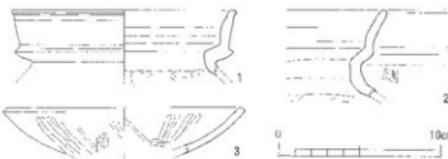
SK11は上部がかなり削平されているものと考えられるが、平面プランは長軸長1.46m、最大幅62cmを測る楕円形状を呈している。検出高は、標高4.04mであり、基軸は南西—北東方向を向いている。

崩壊により詳細な堆積土の状況は確認できていないが、B5～B8上のセクションからは上層には暗褐色砂質土、褐灰色土、褐色土の堆積が認められ、基盤層である黄褐色砂質土へと達している。断面の形状は、肩部から約45度の角度で落ちて底面はほぼ平坦に作り出しており、最深部までは52cmを測る。なお、底面におけるレベルは、北東側で標高3.56mであるのに対し、南西では3.54mと11cmも傾斜していることが注意される。

遺物には、古墳時代前期初頭の古式土師器甕や低脚壺が出土していることから、当該期に築かれた遺構と考えられる。機能としてはSK10と同様に土壌墓の可能性をもつもので、底面における傾斜から、頭位を北東にして埋葬されていたものと推察される。



第19図 SK10・SK11実測図



第20図 SK11出土遺物実測図

SK11の出土遺物（第20図）

第20図-1・2は、古式土師器甕である。1は複合口縁の稜は水平方向に突出し、口縁端部は外方に折り曲げて平坦におさめている。口縁部は内外面ともナデ、頭部下内面はケズリによる調整が行われている。2は複合口縁の稜は水平方向に向くが鋭さを欠き、口縁端部はやや外傾してほぼ平坦におさめている。口縁部は内外面ともナデ、頭部下内面はケズリによる調整が行われている。3は、高壺あるいは低脚壺の口縁部であろう。内外面ともに赤色塗彩され、口縁端部は平坦におさめている。内外面とも縦方向のミガキによる調整が行われている。以上のような古式土師器は、草田編年7期に相当し、古墳時代前期初頭の資料であろう。

SK12・SK13（第21図）

B5Gの黄褐色砂質土上面で検出した土坑状遺構で、基軸をほぼ同一に並列して配置されている。なお、いずれも上部はかなりの削平を受けているものと考えられる。

SK12の平面プランは、長軸長1.02m、最大幅64cmを測る楕円形状を呈している。検出高は標高4.16mであり、基軸は西南西—東北東を向いている。

覆土には上層に褐色粒子を含む褐灰色土や淡褐灰色土、中層には褐色土、淡褐色砂質土、下層には地山砂を多く含む灰色砂質土が堆積して基盤層である黄褐色砂質土へと達している。断面の形状は、肩部から鋭角に落ちて北側ではオーバーハングして掘り込まれ、底面はほぼ平坦に作り出しており、

最深部までは48cmを測る。なお、底面には径14cm、深さ8cmの小ビットが認められ、淡灰色砂質土が堆積している。

遺物には、奈良時代から平安時代にかけての土師器や須恵器小片が出土していることから、遺構が築かれたのも当該期であろう。機能については、基軸を同一にし、西南西に位置するSK23・SK26・SK37などと直線上に配置されていることから、掘立柱建物跡とはならないものの柵列あるいは柱列として機能していた可能性がある。

SK13の平面プランは、長軸長1.42m、最大幅82cmを測る隅丸長方形形状を呈している。検出高は標高4.16mであり、基軸はSK12と同様に西南西—東北東に向いている。

覆土には上層に褐色粒子を含む褐灰色土や淡灰褐色粘質土、中層には褐灰色砂質土、灰褐色砂質土、下層には灰色粘砂土、暗灰色粘砂土が堆積して基盤層である黄褐色砂質土へと達している。断面の形状は、南肩部からは約45度の角度で、北肩部からはほぼ垂直に落ちて一部ではオーバーハングして掘り込まれている。底面はほぼ平坦に作り出しており、最深部までは62cmを測る。

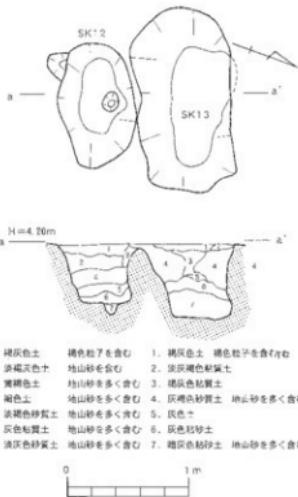
遺物には奈良時代から平安時代にかけての須恵器小片が出土していることから、遺構が築かれた時期については当該期であろう。また、機能については、遺構底面の北側に偏って柱根が1本検出されていることから、柱穴として機能していたものと考えられる。SK13の西南西には、同一の基軸をもつSK25があり、ここを基点としてSK08、SK35などと直交して配置されていることから、掘立柱建物跡と推察される。

SK13の出土遺物（第22図）

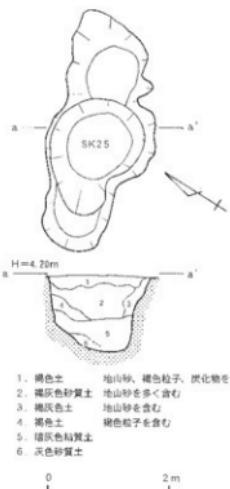
第22図-1は、柱根と考えられるものである。腐植によりかなりの部分が欠損しているが、現状では径16.5cm以上を測り、本来はかなり太い柱であったことが推察される。なお、樹種には杉材が用い



第22図 SK13出土木製品実測図



第21図 SK12・SK13実測図



第23図 SK25実測図

られている。

SK25 (第23図)

B5Grの黄褐色砂質土上面で検出した土坑状遺構である。上部はかなり削平を受けているものと考えられるが、長軸長1.96m、最大幅90cmを測り、中央部に円形状の1段深い穴を穿って膨らみを有したややいびつな形状を呈している。検出高は標高4.16mであり、基軸は西南西—東北東を向いている。

覆土には上層に褐色粒子や炭化物を含む褐色土、褐灰色砂質土、中層には褐灰色土、褐色土、下層には暗灰色粘質土、灰色砂質土と堆積して基盤層である黄褐色砂質土へと達している。断面の形状は、肩部から約45度の角度で落ちて一度平坦面を作り出し、ほぼ中央に位置する最深部へはほぼ垂直に落ちて最深部までは62cmを測る。

遺物には奈良時代から平安時代にかけての土師器や須恵器小片が出土していることから、遺構が築かれたのも当該期であろう。機能としては、前述したSK13あるいは北西に位置するSK08、SK35などと直交して配置されることから、掘立柱建物跡の柱穴として機能していたものと考えられる。



第24図 SD01 実測図

SD01 (第24図)

調査区の南側、A1～A2Grの黄褐色砂質土上面で検出した溝状遺構である。西側は調査区外へと達し、東側では上部がかなり削平を受けているためにBGr付近で途切れているが、本来はもう少し東側へ伸びていたものと考えられる。検出した状況では、検出長4.2m以上、最大幅1.3mを測り、溝幅はほぼ一定である。検出高は標高4.20mであり、基軸は西南西—東北東を向いている。

覆土には褐色粒子を含む褐灰色土、褐灰色砂質土と堆積して基盤層である黄褐色砂質土へと達している。断面の形状は、肩部から緩やかに落ちて底面はほぼ平坦に作り出しており、最深部までは12cmを測る。なお、底面におけるレベルは東側で標高4.10mであるのに対し、西側では3.99mと11cm程度低くなっていることが注意される。

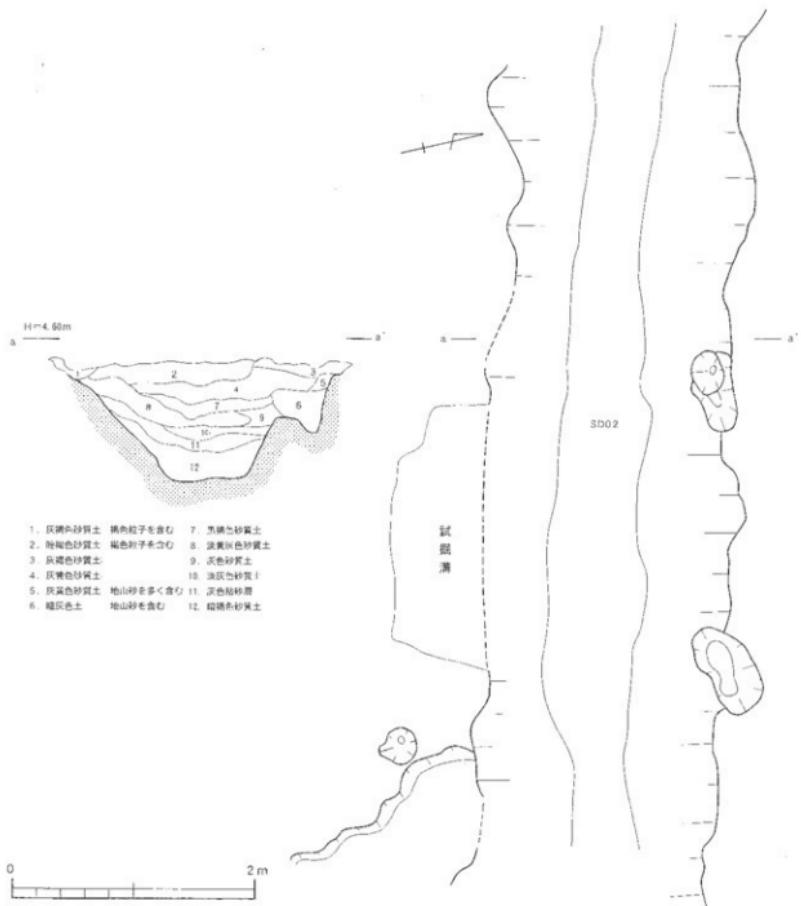
遺物には、奈良時代から平安時代にかけての土師器や須恵器小片が出土していることから、遺構が築かれたのも当該期であろう。機能については部分的な検出であることから、不明である。

SD02 (第25図)

調査区の南寄り、A・B2Gr～A・B3Grにかけての黄褐色砂質土上面で検出した溝状遺構である。B2Grでは試掘溝によって一部が切られているが、東西ともに調査区外へとさらに伸びている。検出した状況

では検出長7.4m以上、最大幅2.04mを測る。検出高は標高4.34mであり、基軸は東南東—西北西を向いている。

縦土には上層に褐色粒子を含む灰褐色砂質土や暗褐色砂質土、中層には灰黄色、黒褐色、淡黄灰色、灰色、淡灰色といった砂質土、下層には灰色粘砂層、暗褐色砂質土と堆積して灰白色粗砂層へと達する。この灰白色粗砂層は黄褐色砂質土の下層にあたり、この層位からはかなりの湧水が認められる。なお、底面におけるレベルは、西側で標高3.44mであるのに対し、東側では3.28mと24cm程度東側に向かって傾斜していることが注意される。断面の形状は、肩部から約45度の角度で落ちて底面はほぼ平坦に作り出しており、最深部までは1.0mを測る。



第25図 SD02 実測図

遺物には、奈良時代から平安時代にかけての土師器や須恵器小片が出土していることから、遺構が築かれたのも当該期であろう。機能としては、規模や形状から水路として利用されていたものと推察され、底面における傾斜から西から東に向かって流れていったものと考えられる。

B2Gr P01 (第26図)

B2Grの黄褐色砂質土上面で検出した東南東—西北西に基軸をもつピット状遺構である。平面プランは、長軸長62cm、最大幅28cmを測る楕円形状を呈している。なお、検出高は標高4.20mである。

覆土は上層から褐色粒子を含む灰褐色砂質土、褐色砂質土、淡褐色砂質土と堆積して基盤層である黄褐色砂質土へと達している。断面の形状は、東西の肩部からは約45度の角度で落ちて一度平坦面を有し、ほぼ中央に位置する最深部へは銳角に落ちて底面は丸く作り出しており、最深部までは40cmを測る。

遺物は全く出土しておらず、遺構が築かれた時期や機能については不明であるが、西南西に位置し、同一の基軸をもつP04と形状や覆土が類似していることから、同じ機能を有すものと考えられる。

A6Gr P01 (第27図)

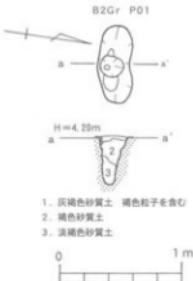
A・B6Grの黄褐色砂質土上面で検出したピット状遺構で、北側が調査区外へと達しているため、平面プランは明らかではない。なお、検出高は標高4.36mと他の遺構に比べると高い位置にあるが、これは上面の搅乱や削平が小さかったためと考えられる。

覆土には上層に暗橙褐色土、暗褐灰色土、中層に淡灰黄色土、褐灰色粘質土、下層には暗褐灰色土、暗褐色土が堆積して基盤層である黄褐色砂質土へと達している。断面の形状は、北側では不明であるが南肩部からはほぼ垂直に落ちて一度段を有し、そこからさらに銳角に落ちて底面はほぼ平坦に作り出しており、最深部までは64cmを測る。

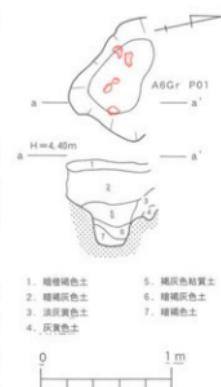
遺物には草田編年6~7期頃の特徴をもつ古式土師器壺や甕、高坏などが出土していることから、遺構が築かれたのは古墳時代前期初頭と考えられる。機能としては、北側が調査区外へと達しているために断定し難いが、SK10やSK11と並列して配置され、出土遺物も同時期にあたることから、土壤墓などが想定される。

A6Gr P01の出土遺物 (第28図)

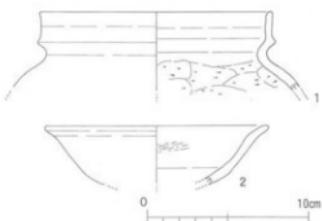
第28図-1は、古式土師器壺である。複合口縁の稜は水平方向に突出し、口縁端部はほぼ平坦におさめてい



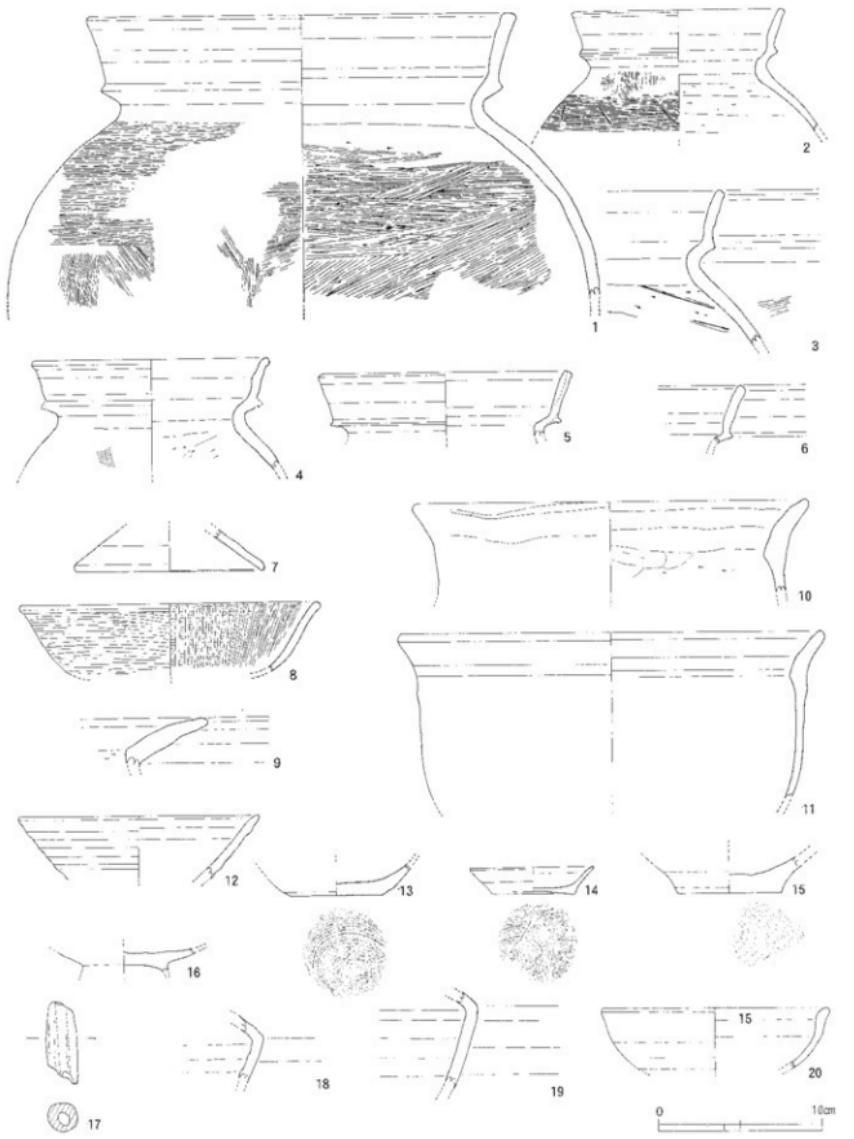
第26図 B2Gr P01実測図



第27図 A6Gr P01実測図



第28図 A6Gr P01出土遺物実測図



第29図 II区出土遺物実測図（1）

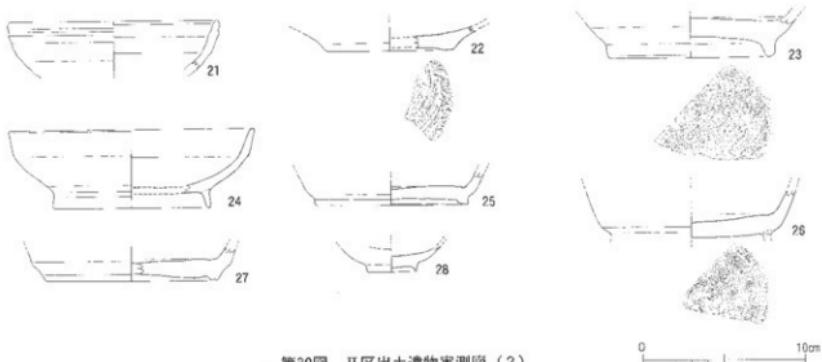
る。口縁部は内外面ともナデ、頸部下内面はケズリによる調整が行われている。2は、古式土師器高坏の坏部である。体部から口縁部にかけて内湾ぎみに立ち上がり、口縁端部は外反して丸くおさめている。風化が著しいが、内面は横方向のミガキによる調整が認められる。これらは草田編年6～7期頃に相当し、古墳時代前期初頭のものであろう。

II 区の出土遺物（第29図・第30図）

第29図—1～6は、古式土師器甕である。1は大形品で、複合口縁の稜は水平方向に突出し、口縁端部は折り曲げて平坦におさめている。口縁部は内外面ともナデ、頸部下外面はハケ、内面はケズリの後、ハケによる調整が行われ、外面胴部にはススが付着している。2は、複合口縁の稜は水平方向に突出し、口縁端部はほぼ平坦におさめている。口縁部は内外面ともナデ、頸部下外面はハケと貝殻腹縁による斜線文、内面はケズリによる調整が行われ、外面胴部にはススが付着している。3は、複合口縁の稜は水平方向に向くがやや鋭さを欠き、口縁端部はほぼ平坦におさめている。口縁部は内外面ともナデ、頸部下外面はハケ、内面はケズリによる調整が行われている。4はやや器壁が厚く、口縁端部は外方に折り曲げてほぼ平坦におさめている。口縁部は内外面ともナデ、頸部下外面はハケ、内面はケズリによる調整が行われ、外面にはススが付着している。5・6は複合口縁の稜が水平方向に鋭く突出し、口縁端部は平坦におさめている。口縁部は内外面ともナデによる調整が行われている。以上のような甕は、草田編年6期～7期に相当する資料と考えられ、古墳時代前期初頭のものであろう。なお、1～6は、全てが56r以北からの出土であることが注意される。

7は、古式土師器高杯の脚部であろうか。内外面ともナデによる調整が行われている。8は、古式土師器高杯の坏部であろう。坏部は内湾ぎみに立ち上がり、口縁端部は外反して折り曲げ、丸くおさめている。外面は横方向のミガキ、内面は縦方向のミガキによる調整が行われている。7・8は形態的特長から草田編年6～7期に相当し、古墳時代前期初頭のものであろう。9は、土師器甕であろう。頸部から口縁部にかけて強く屈折し、口縁端部は丸くおさめている。口縁部内外面はナデ、頸部下内面はケズリによる調整が行われ、外面にはススが付着している。10・11も土師器甕で、同一個体の可能性をもつものである。頸部から口縁部にかけて緩く屈曲し、口縁端部は丸くおさめている。口縁部は内外面ともナデ、頸部下外面はナデ、内面はケズリによる調整が行われ、外面全体にススが付着している。以上のような土器は、その形態的特長から9が古墳時代後期頃、10・11は奈良時代頃に相当する資料であろう。

12・13・15は、土師器坏である。12は体部から口縁部にかけて直線的に逆「ハ」の字状に開き、口縁端部は丸くおさめている。内外面とも回転ナデによる調整が行われ、外面及び内面口縁部にはススが付着している。13は底部の破片で、内外面は回転ナデ、底部は回転糸切りによって切り離されている。14は土師器小皿で、底部から口縁部にかけて直線的に開き、口縁端部は先細りとなって丸くおさめている。内外面は回転ナデ、底部は回転糸切りによって切り離されている。15は底部に厚みのある坏で、内外面とも回転ナデ、底部は回転糸切りによって切り離されている。16は足高台を有す土師器坏であろう。高台部は短く外傾するものと考えられる。17は土錘である。両端が欠損しているが、径6mmの孔を穿っている。以上のような土師器は小片であり、全体の形状が把握できないが、その形態



第30図 II区出土遺物実測図(2)

的特長から奈良時代から中世初期にかけての資料であろう。

18・19は、須恵器壺の肩部であろう。同一個体の可能性をもつもので、いずれも内外面は回転ナデによる調整が行われ、外面上位には自然糸がかかっている。奈良時代頃に相当する資料であろう。20は、須恵器壺である。底部から口縁部にかけて内湾しながら立ち上がり、口縁端部は外反して太くなり、丸くおさめている。内外面ともに回転ナデによる調整が行われている。高広編年IV-A期に相当する資料と考えられ、8世紀中葉から後半にかけてのものであろう。

第30図-21は、須恵器壺である。体部から口縁部にかけて内湾しながら立ち上がり、口縁端部は丸くおさめている。口縁端部の5mmほど下位には1条の沈線が施され、内外面とも回転ナデによる調整が行われている。22は、須恵器壺の底部と考えられ、底部には回転糸切り痕が認められる。23・24は高台を有す須恵器壺である。高台はやや外傾し、端部は丸くおさめている。内外面とも回転ナデ、底部には回転糸切り痕が認められる。24は、底部から口縁部にかけて内湾しながら立ち上がり、口縁端部は丸くおさめている。高台はやや外傾して端部は丸くおさめ、内外面とも回転ナデによる調整が行われている。25・27は短く直立する高台をもつ須恵器壺で、内外面とも回転ナデによる調整が行われている。高台部の特徴から、23・24は高広編年III-B～IV-A期、25・27についてはIV-B期に相当する資料と考えられる。

26は、瓦質土器壺であろう。高台をもつもので、内外面は回転ナデ、底部は回転糸切りによって切り離されている。中世期の資料であろうか。28は、高台付の磁器碗である。高台は短く直立し、端部は繩くなっている丸くおさめている。全面が灰白色に施釉され、体部には青淡色の文様が認められる。中世末から近世にかけての資料であろう。

註

- (1) 「小山遺跡第3地点発掘調査報告書(第3次発掘調査)」出雲市教育委員会 2002年
- (2) 「南講武草出遺跡」鹿島町教育委員会 1992年
- (3) 「高広遺跡発掘調査報告書」鳥取県教育委員会 1984年

II区 出土遺物観察表（土器）

件名番号	出土地点	器種	法規 (cm)			形態・手法の特徴	色調	施土	焼成	備考
			口径	底径	高さ					
20-1	B 6 Gr SK 11	古式土師器 甕	13.6	-	-	口縁部 内外面ナデ 頭部下 内/ケズリ	外/褐色 内/褐色 所/褐色	やや粗い 石英・雲母を含む	良好	
-2	B 6 Gr SK 11	古式土師器 甕	-	-	-	口縁部 内外面ナデ 頭部下 外/ハケ 内/ケズリ				
-3	B 6 Gr SK 11	古式土師器 甕	14.4	-	-	外/ミガキ 内/ミガキ	朱色	密 石英・雲母を含む	良好	内外面とも赤褐色
21-1	A 6 Gr P 0 1	古式土師器 甕	11.2	-	-	口縁部 内外面ナデ 外/風化者しく不明 内/ケズリ				
-2	A 6 Gr P 0 1	古式土師器 高环	13.6	-	-	外/ナデ 内/ミガキ	褐 褐色	密 1mm以下の白色砂粒・ 石英・雲母を含む	良好	
20-1	A 5 Gr 甕	古式土師器 甕	25.8	-	-	口縁部 内外面ナデ 頭部下 外/ナデ, ハケ 内/ケズリの後, ハケ				
-2	北側溝	古式土師器 甕	12.8	-	-	口縁部 内外面ナデ 頭部下 外/ハケ, 且鼓施文 内/ケズリ	淡褐色	やや粗い 石英・雲母を含む	良好	外面脚部にスス付着
-3	A 6 丸下	古式土師器 甕	-	-	-	口縁部 内外面ナデ 頭部下 外/ナデ, ハケ 内/ケズリ				
-4	A6~A7 SEC	古式土師器 甕	14.2	-	-	口縁部 内外面ナデ 頭部下 外/ハケ 内/ケズリ	褐色	やや粗い 1mmの砂粒・石英・ 雲母・金雲母を含む	良好	外面にスス付着
-5	B 6 Gr 淡黒褐色 土	古式土師器 甕	14.8	-	-	口縁部 内外面ナデ				
-6	暗褐色土	古式土師器 甕	-	-	-	口縁部 内外面ナデ	淡褐色	密 石英・雲母を含む	良好	
-7	西側溝	古式土師器 高环?	-	11.4	-	内外面ナデ				
8	B 6 Gr 淡褐色土上	古式土師器 高环	18.0	-	-	外/横方向ミガキ 内/縱方向ミガキ	淡褐色	密 1mm以下の白色砂粒・ 石英・雲母を含む	良好	外面にスス付着
9	A 3 Gr	土師器 甕	-	-	-	口縁部 内外面ナデ 頭部下 内/ケズリ				
-10	A 5 Gr	土師器 甕	23.8	-	-	口縁部 内外面ナデ 頭部下 外/ナデ 内/ケズリ	褐色	密 1mm以下の白色砂粒・ 石英・雲母を含む	良好	外面及び内面口縁部 にスス付着 29-11と同一個体の 可能性あり
-11	A 5 Gr	土師器 甕	27.8	-	-	口縁部 内外面ナデ 頭部下 外/ナデ 内/ケズリ				
-12	A 6 Gr	土師器 甕	14.6	-	-	外/回転ナデ 内/回転ナデ 底/回転ナデ 底/回転糸切り	淡褐色	密 石英を含む	良好	外面及び内面口縁部 にスス付着 回転水引模様が明瞭に 残る
-13	A 3 Gr	土師器 甕	-	5.6	-	外/回転ナデ 内/回転ナデ 底/回転糸切り				
-14	A 6 Gr 暗褐色土上	土師器 小瓶	7.5	5.0	1.7	外/回転ナデ 内/回転ナデ 底/回転糸切り	橙褐色	密 石英・雲母を含む	良好	

擇因番号	出土地点	器種	法儀 (cm)			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
			口径	底深	器高					
29 - 15	北側溝 土師器 环	—	—	6.4	—	外／回転ナデ 内／回転ナデ 底／回転糸切り	淡褐色	胎 1mm以下の白色砂粒・石英・雲母・金雲母を含む	良好	
- 16	A 5 Gr 足高台付 环	—	—	—	—	外／回転ナデ 内／回転ナデ	暗褐色	胎 石英・雲母・金雲母を含む	良好	
- 18	A 4 Gr 須恵器 壺	—	—	—	—	外／回転ナデ 内／回転ナデ	暗灰色	胎 1mm以下の白色砂粒・石英を含む	良好	外面に自然釉がかかる 29-19と同一個体の可能性あり
- 19	A 4 Gr 須恵器 壺	—	—	—	—	外／回転ナデ 内／回転ナデ	暗灰色	胎 1mm以下の白色砂粒・石英を含む	良好	外面に自然釉がかかる 29-18と同一個体の可能性あり
- 20	A 6 Gr 須恵器 壺	—	13.6	—	—	外／回転ナデ 内／回転ナデ	灰色	胎	良好	
30 - 21	1 G r S D O 1	須恵器 壺	—	12.8	—	外／回転ナデ 内／回転ナデ	灰色	胎	良好	外面口縁部下に凹線 又
- 22	A 5 Gr 須恵器 环	—	—	7.6	—	外／回転ナデ 内／回転ナデ 底／回転糸切り	灰色	胎	良好	外面底部と部体にスヌ 付着
- 23	A 4 Gr 須恵器 高台付 环?	—	—	9.8	—	外／回転ナデ 内／回転ナデ 底／回転糸切り後、ナデ	灰色	胎 石英を含む	良好	
- 24	A 6 Gr 暗褐色土 須恵器 高台付 壺	—	15.0	9.4	4.8	外／回転ナデ 内／回転ナデ	暗灰色	胎	良好	
- 25	A 4 Gr 須恵器 高台付 环	—	—	9.3	—	外／回転ナデ 内／回転ナデ 底／ヘラ切り後、ナデ	暗灰色	胎	良好	外面に自然釉がかかる
- 26	北側溝 瓦質土器 高台付 壺?	—	—	—	—	外／回転ナデ 内／回転ナデ 底／回転糸切り	黒褐色	胎 1mm以下の白色砂粒 を含む	良好	
- 27	A 2 G r 高台付 环	—	—	10.4	—	外／回転ナデ 内／回転ナデ 底／ヘラ切り後、ナデ	綠灰色	胎	良好	外面に自然釉がかかる
- 28	A 2 G r 褐灰色土 須恵器 高台付 壺	—	—	3.0	—	外／回転ナデ 内／回転ナデ	灰白色	胎	良好	全面が灰白色に施釉 部体に淡青色の文様 あり

II区 出土遺物観察表 (その他の遺物)

擇因番号	出土地点	遺存状況	製品名	材質	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備 考
22 - 1	B 5 Gr SK13	基底部のみ	柱根	杉	33.5	16.6	10.6	—	
29 - 17	A 6 Gr 暗褐色土	両端欠損	上鍤	土製	—	3.0	1.9	1.9	径6mmの穴を穿つ

IV. III区の調査

1. 発掘調査の概要

III区は旧四経幼稚園跡で、平成11年度の第4次発掘調査が行われた北側にあたる地域である。調査に入る前に、試掘調査によって確認されていた遺物包含層までの造成土を30cm程度取り除き、排土した。そして、東西方向に5m、南北に1m間隔のグリッドを設定し、西から1~2Grとした。調査面積は、東西約7.5m、南北約1.5mの約11m²である。なお、水処理のために調査区の南側に約20cm幅の側溝を設定している。

層序（第31図）

調査区における基本的な層序は、造成土を除くとその下面には灰色土、黄灰色土、褐灰色土と堆積して基盤層である灰白色粗砂層に達する。III区の基盤層は、I・II区で認められた粒子の細かい黄褐色砂質土ではなく、粗砂層であることが注意される。なお、調査区中央部では一部に褐色土、灰褐色土、灰褐色砂質土が認められるが、この層位は落ち込み状遺構であるSX01の覆土と考えられるものである。また、基盤層におけるレベルは東側で標高4.80mであるのに対し、西側では4.52mと28cmも東側で高くなっている。これは、III区が小山遺跡第3地点における西側縁辺部にあたることと関連するものと考えられる。

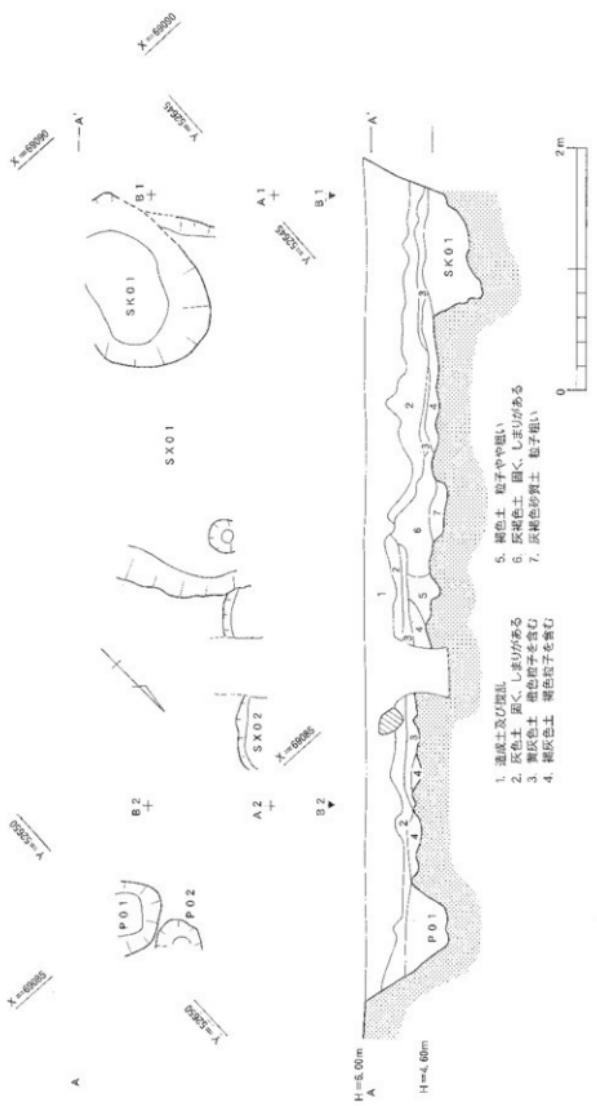
遺構（第31図）

遺構は全てが灰白色粗砂層上面で検出されており、土坑状遺構1、落ち込み状遺構2、ピット状遺構3を検出している。全体をとおしても遺物の出土量は少なく、遺構が築かれた時期について断定することはできないが、包含層からの出土遺物には奈良時代から平安時代にかけてのものが多く認められており、当該期の遺構である可能性が高い。このうち、SX01からは小片ではあるが奈良・平安期の遺物のほか、弥生時代終末期から古墳時代前期初頭にかけての遺物もわずかながら出土している。また、調査区が狭小なため、全ての遺構について規模や形状が明らかではなく、遺構の機能についても不明である。

遺物

遺物は、基盤層である灰白色粗砂層の上層に堆積する褐色粒子を含む黄灰色土、褐灰色土が比較的安定した遺物包含層となっており、古式土師器、土師器、須恵器などの小片が出土している。これらの遺物には朱塗り土師器が多く認められることから、遺跡としては奈良時代から平安時代に中心をもつものと考えられる。しかしながら、古式土師器の小片もわずかながら認められることから、付近には当該期の遺構も存在していたことが推察される。また、持ち運び用の製塩土器が出土しているが、これは他の調査区でも数点出土しており、日常的な土器として使用されたものであろう。その他、高広編年Ⅱ-B期に相当する須恵器長頸壺が出土しており、古墳時代後期の遺物もわずかながら認められる。

第31図 Ⅲ区地質配置図



2. 遺構と遺物

S K 0 1 (第32図)

調査区の西側、1Grの灰白色粗砂層上面で検出した土坑状遺構である。南側は調査区外へと達し、上部は削平を受けているものと考えられる。現状からは長軸長1.5m以上、最大幅1.06mを測り、平面プランは橢円形状を呈するものと考えられる。検出高は標高4.60mであり、基軸は南北に向いている。

覆土は複雑な堆積を示している。上層には褐色粒子を含む褐色土、淡褐色土、褐色土、中層には粒子がやや粗い淡褐色土や淡灰褐色土、下層には粒子の粗い褐色砂質土や淡灰色土が堆積して基盤層である灰白色粗砂層へと達している。断面の形状は、肩部から約45度の角度で落ちて底面はほぼ平坦に作り出しており、最深部までは52cmを測る。なお、SK01はSX01と切合関係にあり、SX01よりも新しい時期に築かれた遺構であることが明らかである。

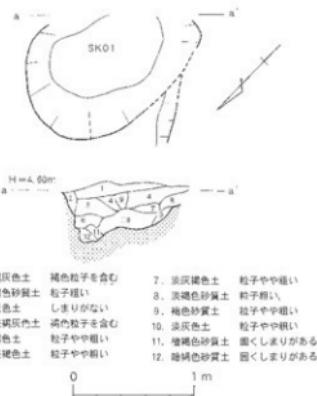
遺物は全く出土しておらず、築かれた時期や機能については不明であるが、かなり規模が大きいことから、土壤壘などが想定される。

P 0 1・P 0 2 (第33図)

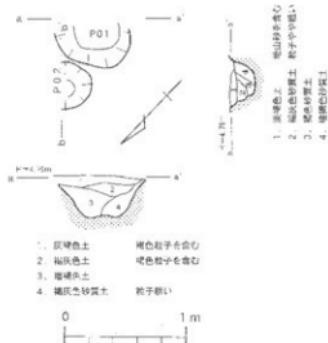
調査区の東端、2Grの灰白色粗砂層上面で隣接した状況で検出したピット状遺構である。P01は南側、P02は東側が調査区外へと達しているために平面プランは明らかではない。

P01は、現状からは最大幅62cmを測り、平面プランは円形状を呈するものと考えられる。なお、検出高は標高4.72mである。覆土には上層に褐色粒子を含む灰褐色土、褐色土、下層には暗褐色土、褐色砂質土が堆積して基盤層である灰白色粗砂層へと達している。断面の形状は、肩部から約45度の角度で落ちて底面はほぼ平坦に作り出しており、最深部までは34cmを測る。遺物は全く出土しておらず、遺構が築かれた時期や機能については不明である。

P02は、現状では最大幅40cmを測り、平面プランは円形状を呈するものと考えられる。なお、検出高は標高4.52mである。覆土には上層から淡褐色土、褐色砂質土、褐色砂質土、橙褐色砂質土と堆積して基盤層である灰白色粗砂層へと達している。断面の形状は、肩部から約45度の角度で落ちて底面は丸く作り出しており、最深部までは22cmを測る。遺物には奈良時代か



第32図 SK01実測図



第33図 P01・P02実測図

ら平安時代にかけての朱塗り土師器が1点出土しているにすぎず、築かれた時期や機能については不明である。

III区の出土遺物（第34図）

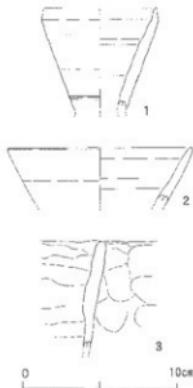
第34図-1は、須恵器直口壺の口縁部であろう。頭部から口縁部にかけて直線的に外傾し、口縁端部はやや内傾して明確な稜を作り出し、先細りとなって丸くおさめている。内外面とも回転ナデによる調整が行われている。外面頭部付近には1条の沈線が認められ、内面にはごま塩状の自然釉がかかっている。SX01からの出土で、高広編年II-B～III期に相当する資料と考えられ、古墳時代終末期頃のものであろう。

2は、須恵器環である。底部から体部にかけて直線的に外傾し、口縁端部は丸くおさめている。内外面ともナデによる調整が行われている。高広編年IV-A期に相当する資料と考えられ、8世紀中葉から後半にかけてのものであろう。

3は、土師器製塩土器である。砲弾状を呈する六連式と呼ばれるもので、内外面の至るところに指頭圧痕が認められる。製塩土器は小山遺跡第3地点第3次・第4次発掘調査でも出土しており、地域的な特色として内面に布目痕が認められないことがあげられる。

註

- (1)「小山遺跡第3地点発掘調査報告書（第4次発掘調査）」出雲市教育委員会 2002年
- (2)「高広遺跡発掘調査報告書」島根県教育委員会 1981年
- (3)「小山遺跡第3地点発掘調査報告書（第3次発掘調査）」出雲市教育委員会 2002年



第34図 III区出土遺物実測図

III区 出土遺物観察表（土器）

排団番号	出土地点	器種	法量 (cm)			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
			口径	底径	器高					
34-1	I Gr SX01	須恵器 直口壺	7.2	-	-	外／回転ナデ 内／回転ナデ	灰色	密	良好	外表面頭部付近に1条の凹痕文
-2	I Gr 褐色土	須恵器 環	11.6	-	-	外／回転ナデ 内／回転ナデ	灰色	密 1mm以下の白色砂粒・ 石英を含む	良好	
-3	IVR	土師器 製塩土器	-	-	-	外／ナデ、指頭圧痕残る 内／ナデ、指頭圧痕残る	暗褐色	密 1mm以下の白色砂粒・ 石英を含む	良好	内面に淡褐色の自然釉がかかる

VII. IV区の調査

1. 発掘調査の概要

IV区は旧四絡幼稚園跡で、平成11年度の第4次発掘調査が行われた北側にあたる地域である。調査に入る前に、試掘調査によって確認されていた遺物包含層までの造成土を約30cm取り除き、排土した。そして、III区から続く位置に東西に5m、南北に1m間隔のグリッドを設定し、西側からそれぞれ4～9Grとした。また、III区とIV区との間は幼稚園への進入路として欠かせないとともにスクールゾーンでもあることから北側に幅1.5mの仮歩道を設置し、この部分は調査対象外としている。調査面積は、東西約36m、南北約2mの約72m²である。なお、水処理のために南側に約20cm幅の側溝を設定している。

層序（第37図）

調査区は狭小であるとともに細長いことから、西側と東側では若干層序が異なっている。また、調査区の中でも特に埋め立て場など搅乱の部分が大きく、遺構の検出は部分的で不明確なものが多く認められる。

西側における基本的な層序は、造成土を除くと上層から粒子のやや粗い褐色土、灰色土と堆積して基盤層である黄褐色砂質土へと達する。しかし、5～7Grにかけては黄褐色砂質土が灰白色粗砂層へと変化している。なお、黄褐色砂質土上面には部分的に灰色土、褐色砂質土などの堆積が認められているが、これは本来、遺構の覆土としての堆積と考えられ、上部はかなりの削平を受けているものと考えられる。

一方、東側における基本的な層序は、造成土を除くと上層から灰褐色土、灰橙褐色土、褐色土、灰褐色土などが堆積して7Gr以西では灰白色粗砂層、7Gr以東では黄褐色砂質土へと達している。この基盤層の変化から、地盤の安定した黄褐色砂質土は、遺跡内で波状に堆積していたことが推察される。また、基盤層における標高は約4.50mであり、調査区内においてはほぼ一定である。

遺構（第37図）

遺構は全て基盤層である黄褐色砂質土、灰白色粗砂層上面で検出しており、溝状遺構2、土坑状遺構6のほか、ピット状遺構や落ち込み状遺構を検出している。搅乱や上部の削平が大きいため、全体をとおしても出土遺物は少なく、これらの遺構が築かれた時期については断定することができないものが多い。しかし、SK05からは奈良時代から平安時代にかけての朱塗り土師器、SD02からは弥生時代終末期から古墳時代前期初頭にかけての遺物が出土しており、それぞれ当該期に築かれた可能性の高いものである。

遺物

全体をとおしても遺物の出土量は少ないが、6杭を境にして西側では奈良時代から平安時代にかけての遺物が多く、6杭以東では弥生時代終末期から古墳時代前期初頭にかけての遺物が多く認められ

る傾向にある。このように二極化していることは、各期における生活基盤が異なっていたことが考えられ、隣接するⅢ区、V区においてもこの傾向が認められる。

遺物には弥生土器、古式土師器、土師器などが出土している。このうち最も古いものとしては、頸部に凹線文を施した弥生土器甕が出土している。また、古式土師器も6杭以東を中心に甕や器台などが出でている。

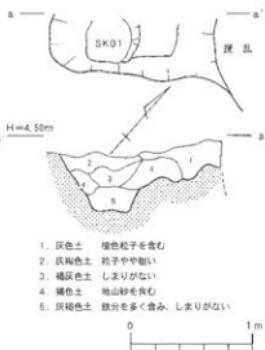
2. 遺構と遺物

SK01 (第35図)

5Grの灰白色粗砂層上面で検出した土坑状遺構である。東側は新しい時期の搅乱によって切られ、北側は調査区外へと達しているため、平面プランは明らかではない。なお、検出高は標高4.45mである。

覆土には上層に灰色土や灰褐色土、中層に褐灰色土、褐色土、下層に鉄分を多く含む灰褐色土が堆積して基盤層である灰白色粗砂層へと達している。東西方向における断面の形状は、東側は搅乱のために明らかではないが、西肩部からは約45度の角度で落ちて底面はほぼ平坦に作り出しており、最深部までは56cmを測る。なお、東肩部からは一度平坦面を作り出してさらに底面へと落ちている。

遺構内からは奈良時代から平安時代にかけてのものと考えられる土師器や須恵器小片が出土していることから、当該期に築かれた遺構である可能性が強い。機能については、形状が明らかではないことから不明である。



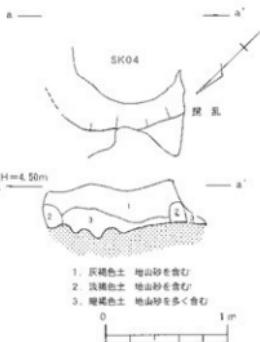
第35図 SK01実測図

SK04 (第36図)

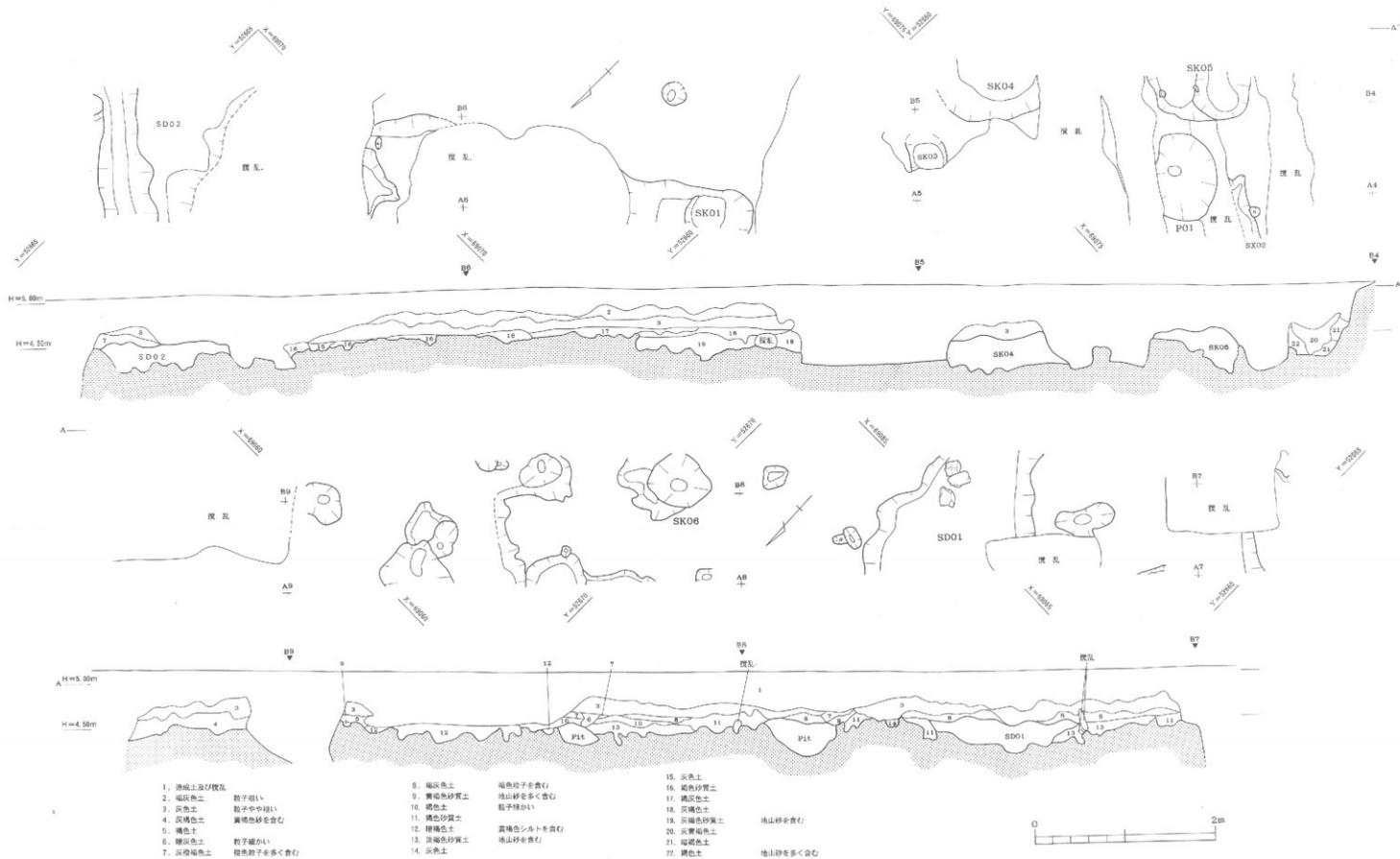
4Grの黄褐色砂質土上面で検出した土坑状遺構である。西側は新しい時期の搅乱によって切られ、南側は調査区外へと達しているため、平面プランは明らかではない。なお、検出高は標高4.54mである。

覆土には上層から灰褐色土、淡褐色土、暗褐色土と堆積して基盤層である黄褐色砂質土へと達している。断面の形状は搅乱を受けているために明らかではないが、底面は凹凸が認められるもののほぼ平坦に作り出しており、最深部までは56cmを測る。

遺物には小片が多いが、古式土師器と奈良時代から平安時代にかけての土師器が出土している。遺構が築かれた時期について断定することは難しく、機能についても部分的な検出であることから不明である。



第36図 SK04実測図



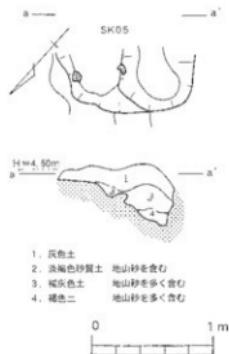
第37図 IV区遺構配置図

SK05 (第38図)

調査区の西側、4Grの黄褐色砂質土上面で検出した土坑状造構である。南側は調査区外へと達しているため、平面プランは明らかではない。なお、検出高は標高4.56mである。

覆土には上層から灰色土、淡褐色砂質土、褐灰色土、褐色土と堆積して基盤層である黄褐色砂質土へと達している。断面の形状は、西肩部は擾乱のために明らかではないが、東肩部からは緩やかに落ちて一度平坦面を有し、そこからさらに落ちて底面は丸く作り出しており、最深部までは50cmを測る。

遺物には小片が多いが、SK04と同様に古式土師器と奈良時代から平安時代にかけての土師器が出土している。造構が築かれた時期について断定することは難しく、機能についても部分的な検出であることから不明である。



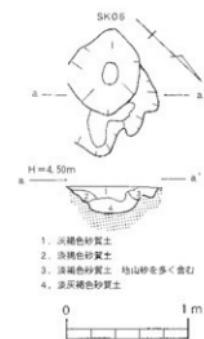
第38図 SK05実測図

SK06 (第39図)

調査区の東側、8Grの黄褐色砂質土上面で検出した土坑状造構である。南側は調査区外へと達しているため、平面プランは明らかではない。なお、検出高は標高4.41mである。

覆土には上層から灰褐色、淡褐色、淡灰褐色の砂質土が堆積して基盤層である黄褐色砂質土へと達している。断面の形状は、肩部から約45度の角度で落ちて底面は丸くレンズ状に作り出しており、最深部までは22cmを測る。しかしながら、東側では一度平坦面を有してさらに最深部へと落ちている。

遺物には奈良時代から平安時代にかけての土師器や須恵器小片が出土していることから、造構が築かれたのも当該期であろう。機能については調査区が狭小で他の造構との配置関係が明らかではないことから、不明である。



第39図 SK06実測図

SD01 (第40図)

調査区のほぼ中央、7Grの灰白色粗砂層上面で検出した溝状造構である。南北ともに調査区外へと達し、北側では新しい時期の擾乱によって切られているため、形状は明らかではない。検出した状況からは、北側では幅1.9mであるのに対し、南側では1.18mと南側の溝幅が極端に狭くなっているが、西肩部の検出状況から、基軸は南東—北東に向くものと推察される。なお、検出高は標高4.66mである。

覆土には上層から褐色砂質土、淡褐色砂質土、淡褐色砂質土、灰褐色砂質土と堆積して基盤層である灰白色粗砂層へと達している。断面の形状は、肩部から比較的緩やかに落ちて底面には若干の凹

凸が認められるもののほぼ平坦に作り出しており、最深部までは42cmを測る。なお、底面におけるレベルは南北ともほぼ一定である。

遺物には古式土師器小片が出土していることから、弥生時代終末期から古墳時代前期初頭に築かれた溝と考えられる。また、遺構の東寄りにはやや浮いた状態で人頭大の割石が3個検出されている。他の遺構や包含層では認められないため、遺構に関するものと考えられるが、遺構の機能については規模や形状が把握できることから不明である。

SD02 (第41図)

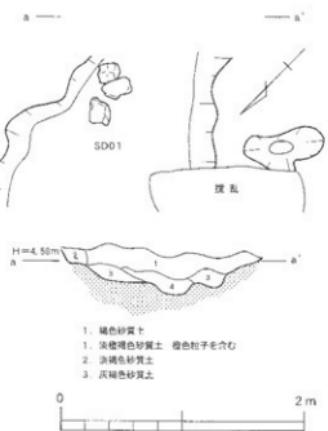
調査区のほぼ中央、66gの灰白色粗砂層上面で検出した溝状遺構である。南北ともに調査区外へと達し、西側も新しい時期の搅乱によって大きく切られれているために規模や形状は明らかではないが、検出した状況では南東—北西に基軸をもつものと考えられる。なお、検出高は標高4.62mである。

覆土には上層に灰褐色土、下層に褐灰色土が堆積して基盤層である灰白色粗砂層へと達している。断面の形状は、西側では搅乱が大きいために角度は不明であるが南側で幅が広く、北側では狭い平坦面を有してさらに最深部へと落ちている。東肩部からは約45度の角度で落ちて底面はほぼ平坦に作り出しており、最深部までは34cmを測る。なお、底面におけるレベルは北側で標高4.12mであるのに対し、南側で4.20mと北に向かって傾斜していることが注意される。

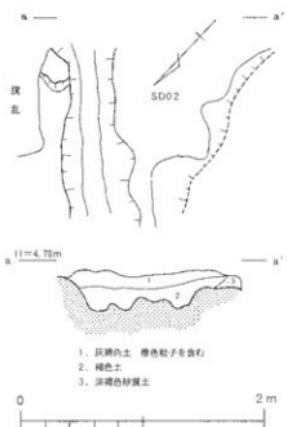
遺物には土師器小片がわずかに出土しているにすぎず、これらの遺物から遺構が築かれた時期について判断することは難しい。機能についても規模や形状が把握できないことから不明である。

IV区の出土遺物 (第42図)

第42図—1は、弥生土器壺の頸部であろう。大形品で外面は突帯を貼付けている。外面はナデ、内面はケズリによる調整が行われている。このように頸部内面がケズリによって調整される事はあまり類例がなく、時期的には判断しがたいが、弥生時代後期から終末期にかけての資料と考えられる。2は、弥生土器甕である。頸部から口縁部にか



第40図 SD01実測図

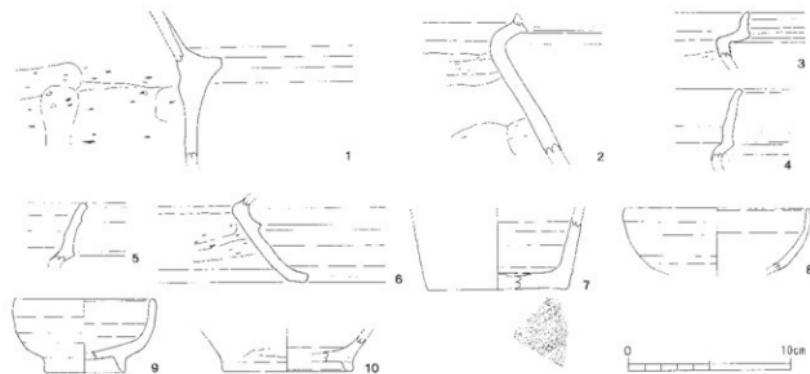


第41図 SD02実測図

けて「く」の字状に屈曲し、口縁端部は上下に拡張して外面には1条以上からなる凹線文を施している。口縁部、頸部下外縫ともにナデによる調整が行われている。松本編年V-1~2様式に相当する資料であろう。3も弥生土器裏で、頸部から口縁部にかけて強く屈折し、口縁端部に向かって上下に拡張し、ほぼ垂直に立ち上がって外面に2条の凹線文を施している。口縁部は外縫ともナデ、頸部下内縫はケズリによる調整が行われている。このような瓈は、松本編年V-2様式に相当する資料と考えられる。

4・5は、古式土器である。4は複合口縁の稜は水平方向に向くが鋭さを欠いている。口縁端部はやや外反して先細りとなって丸くおさめ、内外縫ともナデによる調整が行われている。5は、複合口縁の稜は水平方向に突出し、口縁端部はほぼ平坦におさめている。内外縫ともにナデによる調整が行われている。4は草田編年5期、5は6期に相当する資料と考えられる。6は、古式土器師形器台の脚部である。器壁はやや厚く、脚端部は外方に折り曲げてほぼ平坦におさめている。外面はナデ、内縫はケズリによる調整が行われている。弥生時代終末期から古墳時代前期初頭にかけて盛行する器種である。

7は焼成不良であるが、須恵器壺の底部である。底部から体部にかけて直線的に立ち上がり、内外縫とも回転ナデ、底部は回転糸切りによって切り離されている。奈良時代頃の資料であろう。8は須恵器壺である。体部から口縁部にかけて内湾しながら立ち上がり、口縁端部は丸くおさめている。内外縫とも回転ナデによる調整が行われ、やや軟質な作りである。高広編年IV-A期頃に相当する資料と考えられ、8世紀中葉から後半にかけてのものであろう。9は、小形の須恵器高台付壺である。高台部はやや外傾して端部は丸くおさめている。底部から口縁部にかけて内湾しながら立ち上がり、口縁端部は丸くおさめている。内外縫とも回転ナデによる調整が行われている。9と同様に高広編年IV-A期頃に相当する資料であろう。10は焼成が不良であるが、須恵器高台付壺である。高台部は短く直立し、



第42図 IV区出土遺物実測図

端部は平坦におさめている。内外面とも回転ナデ、底部には回転糸切り痕が認められる。高広編年Ⅴ期に相当する資料と考えられ、9世紀中葉から後半にかけてのものであろう。

註

- (1)「小山遺跡第3地点発掘調査報告書（第4次発掘調査）」出雲市教育委員会 2002年
- (2)「弥生土器の様式と編年 山陽・山陰編」木耳社 正岡睦夫 松木岩雄 1992年
- (3)「南講武草田遺跡」鹿島町教育委員会 1992年
- (4)「高広遺跡発掘調査報告書」島根県教育委員会 1984年

IV区 出土遺物観察表（土器）

探査番号	出土地点	器種	法恩(cm)			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
			口径	底径	高さ					
t2-1	9 Gr 上層	弥生土器 甕	-	-	-	外/ナデ 内/ケズリ	やや粗い 石英・雲母・金雲母 含む 淡褐色	胎土	良好	
-2	7 Gr	弥生土器 甕	-	-	-	口縁部 内外面ナデ 外/ナデ 内/ケズリの後、ナデ	密 1mm以下の白色砂粒・ 石英・雲母・金雲母を 含む 褐色	胎土	良好	口縁部に1条以上の 凹線文
-3	7 Gr	弥生土器 甕	-	-	-	口縁部 内外面ナデ 腹部下 内/ケズリ	外/褐色 内/淡褐色 断/褐色	胎土	良好	口縁部に2条の凹線 文 外面にスス付着
-4	4 Gr 擾乱土	古式土器 甕	-	-	-	口縁部 内外面ナデ	淡褐色	胎土	良好	
-5	6 Gr SD 0.2	古式土器 甕	-	-	-	口縁部 内外面ナデ	淡褐色	胎土	良好	
-6	8 Gr 上層	古式土器 甕	-	-	-	外/ナデ 内/ケズリ	やや粗い 1mmの大砂粒・石英・ 雲母を含む 淡褐色	胎土	良好	
-7	5 Gr 擾乱土	須恵器 盃	-	8.6	-	外/回転ナデ 内/回転ナデ 底/回転糸切り	外/暗褐色 内/黒褐色 断/暗褐色	胎土	不良	
-8	6 Gr 暗灰色土	須恵器 碗	11.2	-	-	外/回転ナデ 内/回転ナデ	灰色	胎土	良好	
-9	側溝	須恵器 高台付 甕	8.2	4.8	4.55	外/回転ナデ 内/回転ナデ	灰色	胎土	良好	
-10	4 Gr 褐色土	須恵器 高台付 甕	-	7.8	-	外/回転ナデ 内/回転ナデ 底/回転糸切り痕ある	橙褐色	胎土	不良	

VIII. V区の調査

1. 発掘調査の概要

V区は旧四絡幼稚園跡で、平成11年度の第4次発掘調査が実施された北側にあたる地域である。なお、IV区とV区の間は、幼稚園玄関への出入口として確保する必要があり、スクールゾーンとしても南側幅1.5mの歩道を確保する必要があったことから、この部分は発掘調査対象外としている。調査に入る前に、試掘調査によって確認されていた遺物包含層までの造成土を取り除き、排土した。そして、東西に5m、南北に1m間隔のグリッドを設定し、西側からそれぞれ1～5Grとした。調査面積は東西約25m、南北約1.5mの約37.5m²である。なお、水処理のために1～3Grにかけては約20cm幅の側溝を設定している。

層序（第44図）

調査区は狭小であるとともに東西に細長いことから、西側と東側では若干層序が異なっている。4杭以西における基本的な層序は、造成土を除くと上層から褐色土、灰褐色土、褐灰色土、淡褐色土と堆積してIV区から続く基盤層である黄褐色シルト質土へと達している。1～2Grにかけての黄褐色砂質土の上層に堆積する15層から21層は、本来、遺構の覆土と考えられるものである。なお、3Gr以東では基盤層である黄褐色シルト質土はしだいに粗くなり、灰白色砂質土へと変化している。

一方、4杭以東における基本的な層序は、造成土を除くと上層には褐色土、灰褐色土、棕褐色土、中層には褐色土、明褐色土、下層には褐色土、淡褐色土と堆積して基盤層であるやや粒子の粗い灰白色砂質土へと達している。また、基盤層におけるレベルは、調査区全体をとおして標高4.10m～4.20mとほぼ一定である。

遺構（第44図）

遺構は全て基盤層である黄褐色砂質土、灰白色砂質土上面で検出しており、溝状遺構6、落ち込み状遺構1、井戸1のほかピット状遺構を多數検出している。このうちSX01は部分的な検出であるため機能については不明であるが、古墳時代前期初頭頃の土器が多量に出土しており、良好な資料となっている。また、溝状遺構であるSD01～SD04はそれぞれ直交するように配置されていることが注意され、関連した機能をもつものと推察される。そして、素掘りの井戸と考えられるSE01からは12～13世紀頃と考えられる土師器が多く出土しており、当該期にも小山遺跡第3地点に生活基盤があったことが窺える。

遺物

調査区が狭小であるが、遺物には弥生土器、古式土師器、須恵器が多量に出土している。特に1～3Grにかけての出土がほとんどであり、SX01、SE01からの出土量が圧倒的に多い。SX01からは古式土師器を中心として多量の土器が出土しているとともに形状が把握できるものが多く、良好な資料となっている。器種には甕や壺、低脚壺などがあるとともに布留系の遺物も検出されており、人的交流

があったことが窺える。また、SE01からは土師器壙や小皿が多く出土しており、井戸を廃棄する際の祭祀として供献されたものと考えられる。4Gr以東からの出土遺物は、極端に少なく、東に位置するVII区・VIII区においてもこの傾向は認められる。

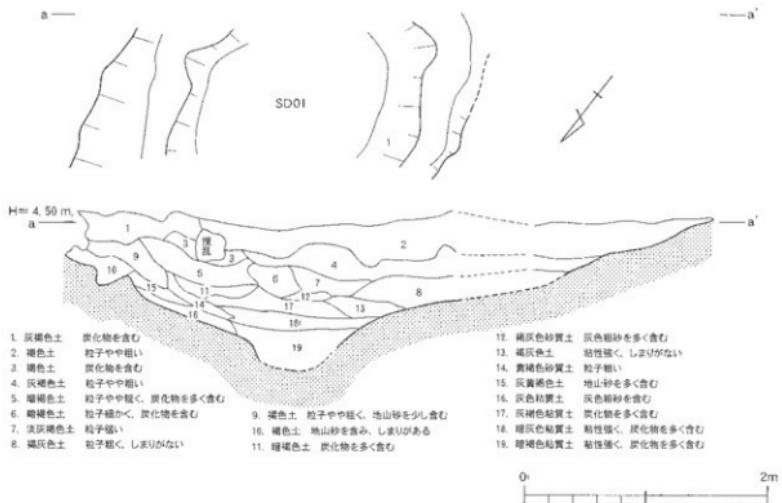
2. 遺構と遺物

SE01 (第43図)

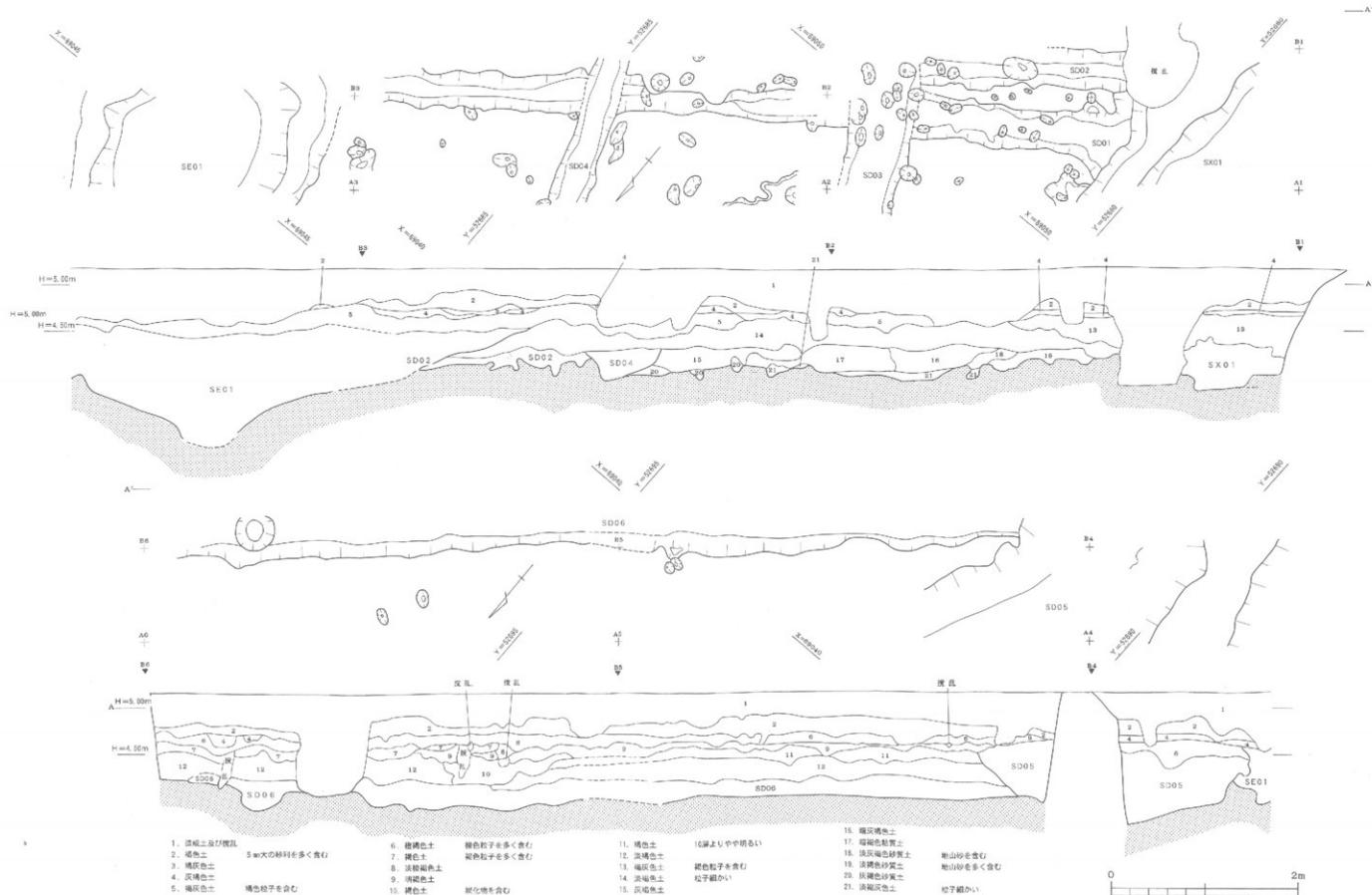
調査区のほぼ中央、3Grの基盤層上面で検出した素掘りの井戸である。なお、基盤層は西肩部では黄褐色シルト質土、東肩部ではやや粗い灰白色砂質土となっている。南北ともに調査区外へと達しており、東側は新しい時期に築かれたSD05によって切られているために平面プランは明らかではない。しかし、南側セクションからは径5m以上を測る円形状の井戸となるものと推察される。なお、検出高は標高4.58mである。

覆土は複雑な堆積を示している。上層には肩部を除くと灰褐色土、粒子がやや粗く炭化物を含む褐色土、灰褐色土が堆積し、中層には炭化物を多く含む暗褐色土、灰褐色粘質土のほか淡褐色土、褐灰色土、下層には炭化物を多く含む暗灰色粘質土、暗褐色粘質土が堆積して灰白色粗砂層にまで達している。断面の形状は、東側ではSD05によって切られているために明らかではないが、西肩部からは緩やかに落ちて一度平坦面を作り出し、そこからは約30度の角度で落ちて底面は丸く作り出しており、最深部までは1.26mを測る。

遺物の出土状況（第45図）は、中央部からやや東側に偏った位置で石や土師器が出土している。遺物の検出高は標高3.7m～3.8mに集中し、層位では下層の炭化物を含む暗灰色粘質土、暗褐色粘質土



第43図 SE01実測図



第44図 V区遺構配置図

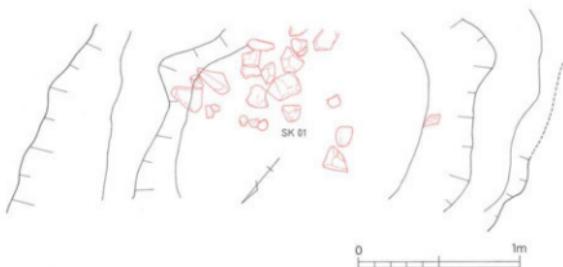
に集中して検出されている。土師器は、その形態的特徴から12～13世紀頃の資料と考えられ、遺構が築かれたのも当該期であろう。また、10cmから人頭大の石が検出されていることが注意される。機能としては、素掘りの井戸であったと考えられ、土師器は井戸を廃棄する際に供献されたものであろう。

SE01の出土遺物（第46図）

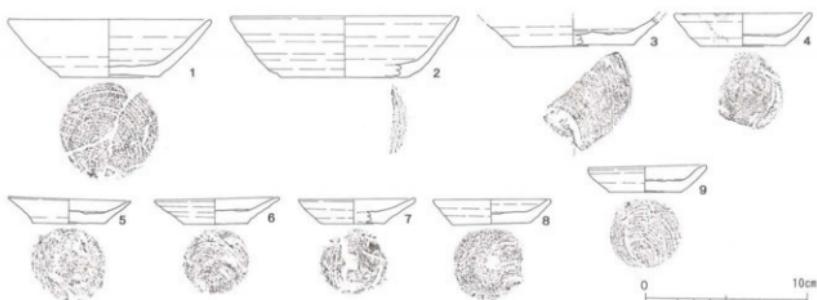
第46図—1～3は、土師器壺である。1は、底部から口縁部にかけて内湾ぎみに立ち上がり、口縁端部は外反して丸くおさめている。内外面とも回転ナデ、底部は回転糸切りによって切り離されている。2は、底部から口縁部にかけて内湾ぎみに立ち上がり、口縁端部は丸くおさめている。内外面とも回転ナデ、底部は回転切りによって切り離され、内面にはススが付着している。また、回転糸切り痕が明瞭に残り、底径と口径の差が小さいことが特徴である。3は底部の小片で、内外面は回転ナデ、底部は回転糸切りによって切り離されている。以上のような土師器壺は在地性が強く、須恵器や磁器などの供伴遺物も認められないことから時期的な判断は難しいが、12～13世紀の範疇に入る資料であろう。

4から9は、土師器小皿である。4は、底部から口縁部にかけて内湾ぎみに立ち上がり、口縁端部は丸くおさめている。内外面とも回転ナデ、底部は回転糸切りによって切り離されている。また、外

面体部から内面にかけて黒色の液体の付着が認められる。分析に出していないため不明であるが、漆や墨書とは違うものである。5～7は、底部から口縁部にかけて直線的に開き、口縁端部は丸くおさめている。内外面とも回転ナデ、底部は回転糸切りによって切り離されている。なお、外



第45図 SE01遺物出土状況実測図



第46図 SE01出土遺物実測図

部にはススが付着している。6は、底部から口縁部にかけて大きく直線的に開き、口縁端部には平坦面を作り出している。内外面とも回転ナデ、底部は回転糸切りによって切り離されている。7も同様の特徴をもつものである。8は、底部から口縁部にかけて直線的に開き、口縁端部は丸くおさめている。内外面とも回転ナデ、底部は回転糸切りによって切り離され、外面体部にはススが付着している。9は、底部から口縁部にかけて内湾ぎみに立ち上がり、口縁端部は丸くおさめている。内外面とも回転ナデ、底部は回転糸切りによって切り離されている。以上のような土師器小皿は、10世紀後半以降の所産とされており、前述した土師器とのセット関係から12~13世紀頃の資料と考えられる。

SD01 (第47図)

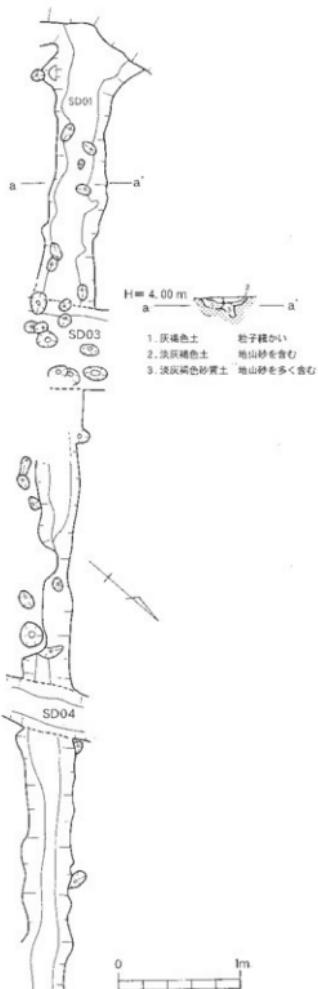
1~2Grにかけての黄褐色ミルト質土上面で検出した溝状遺構である。検出長8.0m以上、最大幅70cm以上を測り、基軸は南西→北東に向いている。また、SX01、SD03、SD04と切合関係にあり、これらより古い時期の遺構であることが明らかである。なお、検出高は標高4.07mである。

覆土には上層に粒子の細かい灰褐色土、下層に淡灰褐色土が堆積して基盤層である黄褐色シルト質土へと達している。断面の形状は、肩部から約45度の角度で落ちて底面にはピット状に掘り込まれた部分も認められるもののほぼ平坦に作り出しており、最深部までは10cmを測る。なお、底面におけるレベルは、東西ともほぼ一定である。

遺物には小片であるが古式土師器甕が1点出土している。この遺物や切合関係から、弥生時代終末期に築かれた遺構と考えられる。同一の基軸をもつSD02と並列して配置されるとともにSD03、SD04と直交することなどから、関連する遺構であると考えられる。しかし、調査区が狭小で部分的な検出であることから、機能については不明である。

SD01の出土遺物 (第48図)

第48図-1は、古式土師器甕である。複合口縁の稜は水平方向に鋭く突出し、口縁端部は外反して先細りとなっている。口縁部は内外面ともナデによる調整が行われている。このような甕は、草田編年5~6期頃に相当する資料と考えられる。SX01からは草田編年7期頃の資料が出土しており、切合関係からもSX01よりも前とする遺構であること



第47図 SD01 実測図

が裏付けられる。

SD04 (第49図)

2 Grの黄褐色シルト質土上面において検出した南東一北西方向に基軸をもつ溝状遺構である。南北ともに調査区外へと達しているが、検出した状況では検出長1.6m以上、最大幅48cmを測り、溝幅はほぼ一定である。また、SD04はSD01と切合関係にあり、これよりも新しい時期の遺構であることが明らかである。なお、検出高は標高4.30mである。

覆土には上層から褐色土、灰褐色土、黄褐色土と堆積して基盤層である黄褐色シルト質土へと達している。断面の形状は、肩部から約45度の角度で落ちて底面はほぼ平坦に作り出しており、最深部までは35cmを測る。なお、底面におけるレベルは、南北でほぼ一定である。

遺物は全く出土しておらず、遺構が築かれた時期について断定することはできないが、同一の基軸をもつSD03や直交するSD01、SD02と関連するものと考えられ、弥生時代終末期頃に築かれた遺構である可能性が強い。機能については部分的な検出であることから、不明である。

SD05 (第50図)

3～4 Grの灰白色砂質土上面で検出した南北方向に基軸をもつ溝状遺構である。南北ともに調査区外へと達しているため形状は明らかではないが、検出した状況では検出長2.4m以上、最大幅1.86mを測るかなり大規模なものであることが推察される。また、SD06、SE01と切合関係にあり、これらより新しい時期に築かれたことが明らかである。なお、検出高は標高4.50mである。

覆土には上層から褐色土、明褐色土、灰褐色土と堆積して基盤層である灰白色砂質土下面の灰白色粗砂層にまで達している。このうち、褐色土、明褐色土は地山砂を多く含むとともに搅乱された堆積であることから、人為的埋められた可能性をもつものである。断面の形状は、肩部から約45度の角度で落ちて底面はほぼ平坦に作り出しており、最深部までは82cmを測る。なお、底面におけるレベルは、南北ともにほぼ一定である。

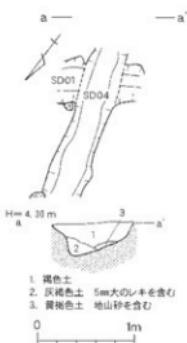
遺物は出土しておらず、遺構が築かれた時期について断定することはできないが、平安時代から中世初期にかけての遺構であるSE01よりも新しい時期の遺構であることが明らかである。機能としては、規模がかなり大きいことから、水路などが想定される。

SD06 (第51図)

4～5 Grの南端、灰白色砂質土上面で検出した西南西一東北東方向に基軸をもつ溝状遺構である。南側と東側は調査区外へと達しているため形状は明らかではないが、検出した状況では検出長9.0m以



第48図 SD01出土遺物実測図



第49図 SD04実測図

上を測る。また、西側ではSD05と切合関係にあり、これよりも古い遺構であることが明らかである。なお、検出高は標高4.24mである。

覆土には上層から褐色砂質土、淡褐色砂質土、灰褐色土、淡灰褐色土、褐色土と堆積して基盤層である灰白色砂質土へと達している。断面の形状は、肩部から鋭角に落ちて底面は丸みを帯びて作り出しており、最深部までは30cmを測る。なお、底面におけるレベルは東側で標高3.95mであるのに対し、西側では4.05mと東に向かって10cm程度傾斜していることが注意される。

遺物は出土しておらず、遺構が築かれた時期については断定できないが、SD05よりも古いくことから平安時代以前の遺構であることが明らかである。機能については、部分的な検出であることから不明である。

S X 01 (第52図)

調査区の西端、1Grの黄褐色シルト質土上面で検出した落ち込み状遺構である。南北及び西側は調査区外へと達しているために形状は明らかではない。また、東側ではSD01、SD02と切合関係にあり、これらより新しい時期に築かれたことが明らかである。なお、南側セクションにおける検出高は、標高4.36mである。

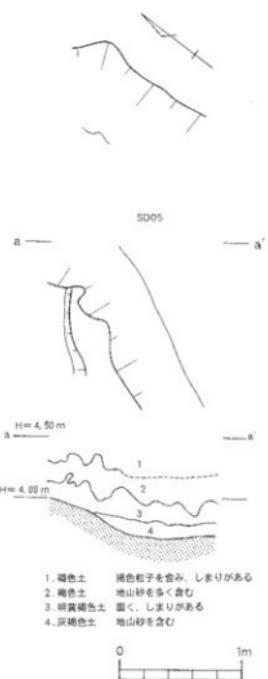
覆土は搅乱のために一部でしか確認できていないが、上層には淡褐色砂質土、淡灰黄褐色砂質土と堆積して黄褐色シルト質土下面の灰白色粗砂層にまで達している。断面の形状は、東肩部から約45度の角度で落ちて一度平坦面を作り出し、そこからさらに落ちて底面はほぼ平坦に作り出しており、最深部までは69cmを測る。なお、底面におけるレベルは、南北ではほぼ一定である。

遺物の出土状況(第53図)を見ると、最深部を有す一段低くなつた位置に遺物が集中して検出されている。層位では淡褐色砂質土、淡灰褐色砂質土からの出土がほとんどで、底面からは20~30cm浮いた状況で検出されている。

遺物は、古墳時代前期初頭の古式土師器を中心として多量に出土している。これらの中には布留系の甕も出土していることから、人的な交流があったことが窺える。また、少量ながら弥生時代後期の遺物も数点出土している。これらの遺物から、遺構が築かれた時期は古墳時代前期初頭と考えられる。機能については、部分的な検出であるため不明であるが、かなり大規模な遺構となる可能性をもつものである。また、第4次発掘調査時に検出されたSD03と方向や遺物の出土状況が類似していることから、同一の溝である可能性もある。

S X 01 の出土遺物 (第54図)

第54図-1・2は、弥生土器甕である。1は、頸部から口縁部



第50図 SD05実測図

にかけて緩く屈曲し、口縁部は上下に大きく拡張して凹線文が施されている。口縁部は内外面ともナデ、頸部下外面は縦方向のハケ、内面はケズリによる調整が行われている。2は、頸部から口縁部にかけて「く」の字状に屈曲し、口縁部は上下に拡張して3条の凹線文を施している。口縁部は内外面ともナデ、頸部下外面はケズリによる調整が行われている。いずれも松本編年V-1様式に相当する資料と考えられ、弥生時代後期のものであろう。3は、弥生土器甕の底部である。外面は縦方向のミガキ、内面底部には指頭圧痕が認められる。底径が小さいことから、弥生時代後期の資料と考えられる。

4~12は、古式土器甕である。4は、複合口縁の稜は水平方向に突出し、口縁端部はほぼ平坦におさめている。口縁部は内外面ともナデ、頸部下内面はケズリによる調整が行われている。5は、大形の甕の胴部である。外面は縦、横方向のハケ、内面はケズリによる調整が行われている。6は、複合口縁の稜は水平方向に鋭く突出し、口縁端部は平坦におさめている。口縁部は内外面ともナデ、頸部下外面は貝殻腹縫による直線文、内面はケズリによる調整が行われている。7は、複合口縁の稜は水平方向に突出し、口縁端部を外方に折り曲げてほぼ平坦におさめている。外面にはススが付着し、口縁部は内外面ともナデによる調整が行われている。8はやや器壁が厚く、複合口縁の稜はやや下方に向いて突出し、口縁端部はほぼ平坦におさめている。口縁部は内外面ともナデ、頸部下外面は直線文、内面はケズリによる調整が認められる。9も同様の形態的特徴をもつもので、同一個体の可能性がある。10はやや厚手の甕で、複合口縁の稲は水平方向に鋭く突出し、口縁端部は外方に折り曲げて平坦におさめている。口縁部は内外面ともナデ、頸部下外面は直線文、内面はケズリによる調整が認められる。なお、外面にはススが付着している。11は複合口縁の稜は水平方向に向くがやや鋭さを欠き、口縁端部は外方に折り曲げて丸くおさめている。口縁部は内外面ともナデによる調整が行われている。12は、複合口縁の稜は水平方向に突出し、口縁端部は丸くおさめている。口縁部は内外面ともナデによる調整が行われてい



第51図 SD06実測図

る。以上のような古式土師器は、4～10が草田編年7期頃に相当する資料と考えられ、古墳時代前期初頭のものであろう。なお、11・12については草田編年6期頃のやや古い様相を示すものであるが、出土量から考えると7期の範疇に入るものであろう。

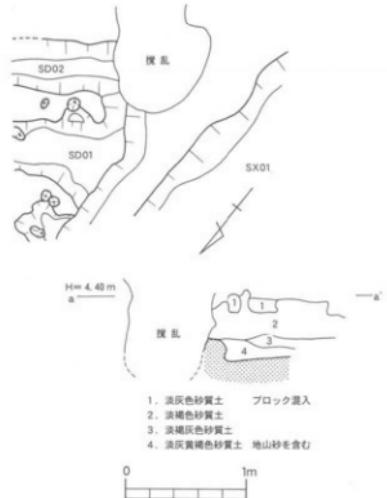
13・14は、布留系の単純口縁をもつ甕である。13は頸部から口縁部にかけて「く」の字状に屈曲し、口縁部中位に膨らみを有して口縁端部は丸くおさめている。口縁部は内外面ともナデ、頸部下外面は継、横方向の細かなハケ、内面はケズリによる調整が行われている。胴部はかなり張り出して底部は丸底であり、下半位にはススが付着している。胎土は在地のものと相違ないことから、布留系の土器を模倣したものと考えられ、人的交流が窺える資料である。14は頸部から口縁部にかけて「く」の字状に屈曲し、口縁端部は外傾して平坦面を作り出している。口縁部は内外面ともナデ、頸部下外面は継、横方向のハケ、内面はケズリによる調整が行われ、外面にはススが付着している。胎土が在地のものと若干異なることから、搬入品の可能性をもつものである。

15は、古式土師器低脚壺である。壺部は深さがあり、底部から口縁部にかけて内湾しながら立ち上がり、口縁端部は丸くおさめている。内外面とも細かなハケによる調整が行われている。脚部は外傾し、脚端部は丸くおさめている。内外面ともナデによる調整が行われている。このように壺部が深く、器高の高い低脚壺は出雲平野ではよく見られるもので、天神遺跡⁽⁴⁾や井原遺跡⁽⁵⁾などからも出土している。時期的には遺構から出土している甕と同時期のものであろう。

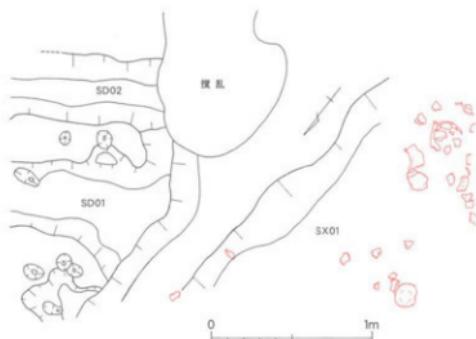
16は、土師器高壺の壺部であろう。内外面とも赤色塗彩され、外面は横向きのミガキによる調整が認められる。他の遺物より後出するもので、混入品と考えられる。

V区の出土遺物（第55図）

第55図—1は、古式土師器壺であ



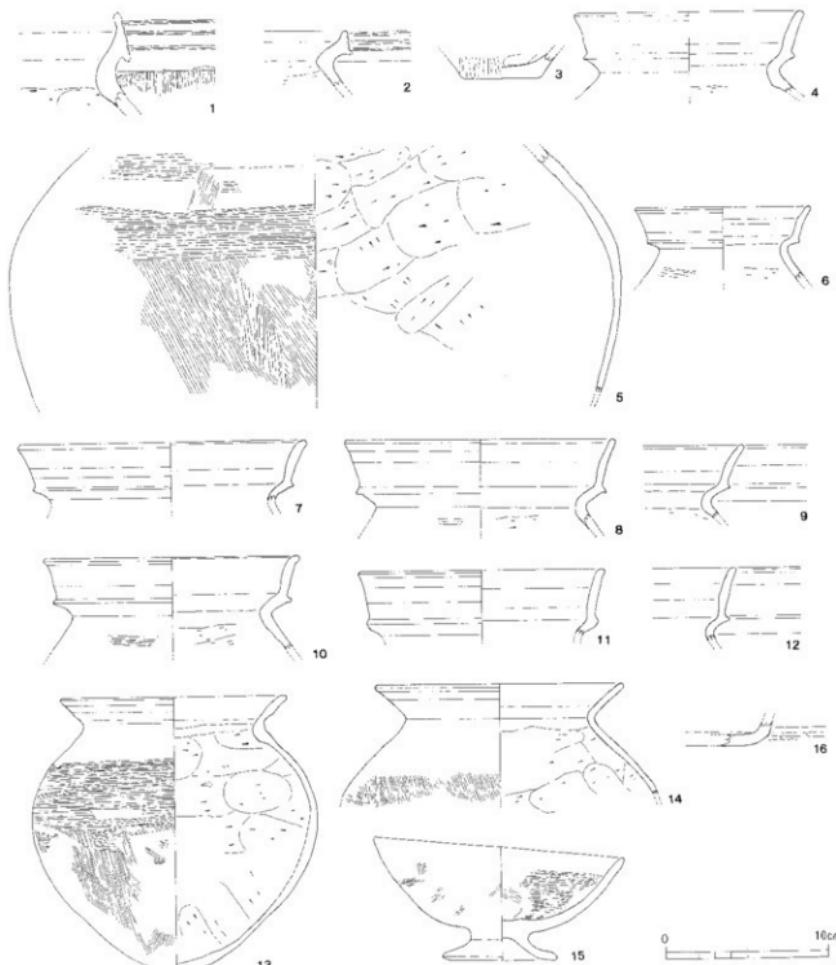
第52図 SX01 実測図



第53図 SX01 遺物出土状況実測図

る。複合口縁の稜は水平方向に鋭く突出し、口縁端部は外方に折り曲げてほぼ平坦におさめている。口縁部は内外面ともナデ、頸部外面には1条の直線文の上下に貝殻腹縁によって綾杉文を施している。頸部内面には指頭圧痕が認められる。16rからの出土で、SX01から出土している遺物と同時期のものであろう。

2～4は、古式土師器甕である。2はSD03から出土したもので、複合口縁の稜は水平方向に突出し、口縁端部は先細りとなって丸くおさめている。口縁部は内外面ともナデによる調整が行われている。



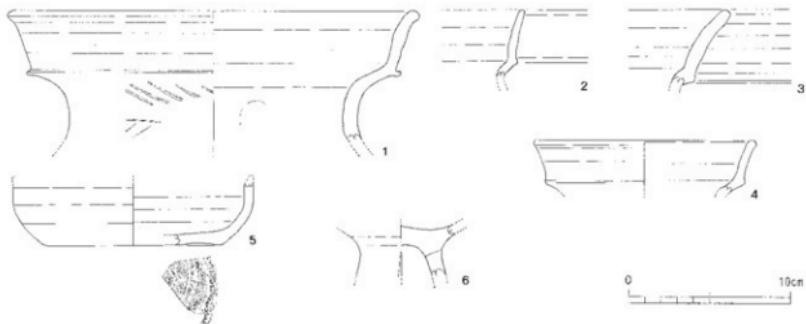
第54図 SX01出土遺物実測図

草田編年5期頃に相当する資料と考えられ、弥生時代終末期のものであろう。3は器壁がやや厚く、複合口縁の稜はやや下方に向くが鋭さを欠き、口縁端部は平坦におさめている。内外面ともナデによる調整が行われている。4は複合口縁の稜は水平方向に向くがやや鋭さを欠き、口縁端部は外方に折り曲げてほぼ平坦におさめている。口縁部は内外面ともナデによる調整が行われている。3・4は草田編年7期に相当する資料と考えられ、古墳時代前期初頭のものであろう。

5は、須恵器塊である。底部から体部にかけて内湾しながら立ち上がっている。内外面とも回転ナデ、底部は回転糸切りによって切り離されている。高広編年IV-A期頃に相当する資料と考えられ、8世紀中葉から後半にかけてのものであろう。6は、須恵器高坏である。2ヶ所に透かし孔が認められ、坏部は内外面とも回転ナデによる調整が行われている。

註

- (1)「小山遺跡第3地点発掘調査報告書（第4次発掘調査）」出雲市教育委員会 2002年
- (2)「南講武草田遺跡」鹿島町教育委員会 1992年
- (3)「弥生土器の様式と編年 山陽・山陰編」木耳社 正岡睦夫・松本岩雄 1992年
- (4)「天神遺跡第7次発掘調査報告書」出雲市教育委員会 1997年
- (5)「井原遺跡発掘調査報告書」出雲市教育委員会 2002年
- (6)「高広遺跡発掘調査報告書」島根県教育委員会 1984年



第55図 V区出土遺物実測図

V区 出土遺物観察表（土器）

件番号	出土地点	器種	法量 (cm)			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
			口径	底径	高さ					
46-1	3 Gr SE 01	土師器 壺	12.2	6.0	3.35	外／回転ナデ 内／回転ナデ 底／回転糸切り	淡褐色	密 1mm以下の白色砂粒・ 石英・雲母を含む	やや 不良	
-2	3 Gr SE 01	土師器 壺	13.8	7.8	3.75	外／回転ナデ 内／回転ナデ 底／回転糸切り	淡褐色	密 石英・雲母を含む	やや 不良	内面にスス付着 回転水引き痕明顯に 残る
-3	3 Gr SE 01	土師器 壺	-	7.4	-	外／回転ナデ 内／回転ナデ 底／回転糸切り	淡褐色	密 1mmの大砂粒・石英・ 雲母を含む	良好	回転水引き痕明顯に 残る
-4	3 Gr SE 01	土師器 小皿	8.2	5.2	2.0	外／回転ナデ 内／回転ナデ 底／回転糸切り	淡褐色	密 1mm以下の白色砂粒・ 石英・雲母を含む	良好	外面上黒色の液体付 着
-5	3 Gr SE 01	土師器 小皿	7.3	4.4	1.5	外／回転ナデ 内／回転ナデ 底／回転糸切り	淡褐色	密 石英を含む	良好	外面上スス付着
-6	3 Gr SE 01	土師器 小皿	7.5	4.0	1.6	外／回転ナデ 内／回転ナデ 底／回転糸切り	淡褐色	密 石英を含む	良好	
-7	3 Gr SE 01	土師器 小皿	7.7	3.9	1.5	外／回転ナデ 内／回転ナデ 底／回転糸切り	淡褐色	密 石英・雲母を含む	良好	
8	3 Gr SE 01	土師器 小皿	6.9	4.7	1.6	外／回転ナデ 内／回転ナデ 底／回転糸切り	外／淡褐色 内／淡褐色 底／淡褐色	やや粗い 1mm以下の白色砂粒・ 石英・雲母・金雲母を 含む	やや 不良	
-9	3 Gr SE 01	土師器 小皿	7.1	4.4	1.7	外／回転ナデ 内／回転ナデ 底／回転糸切り	淡褐色	密 1mm以下の白色砂粒・ 石英を含む	やや 不良	
48-1	1 Gr SD 01	古式土器 壺	-	-	-	口縁部 内外面ナデ	淡褐色	密 石英・雲母・金雲母を 含む	良好	
54-1	1 Gr SX 01	弥生土器 壺	-	-	-	口縁部 内外面ナデ 底部下 外／縦方向ハケ 内／ケズリ	茶褐色	やや粗い 1mmの大砂粒・石英・ 雲母を含む	良好	口縁部に3条以上の 凹痕文
-2	1 Gr SX 01	弥生土器 壺	-	-	-	口縁部 内外面ナデ 底部下 内／ケズリ	淡褐色	密 1mmの大砂粒・石英・ 雲母を含む	良好	口縁部に3条の凹 痕文
-3	1 Gr SX 01	弥生土器 壺 or 壺	-	6.6	-	外／縦方向ミガキ 内／ナデ 指痕付痕残る 底／ナデ	外／褐色 内／淡褐色 底／淡褐色	密 1mm以下の白色砂粒・ 石英・雲母を含む	良好	
-4	1 Gr SX 01	古式土器 壺	13.4	-	-	口縁部 内外面ナデ 底部下 内／ケズリ	淡褐色	やや粗い 1mmの大砂粒・石英・ 雲母を含む	良好	
-5	1 Gr SX 01	古式土器 壺	-	-	-	外／クシ彫直線文、ハケ 内／ケズリ	外／淡褐色 内／淡褐色 底／淡褐色	やや粗い 1mmの大砂粒・石英・ 雲母を含む	良好	

種図番号	出土地点	層種	法線 (cm)			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
			口径	底深	器高					
54-6	1 Gr SX 01	古式土師器 甕	10.6	-	-	口縁部 内外面ナデ 頸部下 外/ハケ 内/ケズリ	淡褐色	やや粗い 石英・雲母・金雲母を 含む	良好	
-7	1 Gr SX 01	古式土師器 甕	16.4	-	-	口縁部 内外面ナデ	淡褐色	密 石英・金雲母を含む	良好	外面にスス付着
-8	1 Gr SX 01	古式土師器 甕	16.4	-	-	口縁部 内外面ナデ 頸部下 外/ハケ 内/ケズリ	淡褐色	やや粗い 石英・雲母・金雲母を 含む	良好	54-9と同一個体の可 能性あり
-9	1 Gr SX 01	古式土師器 甕	-	-	-	口縁部 内外面ナデ 頸部下 内/ケズリ	淡褐色	やや粗い 石英・雲母・金雲母を 含む	良好	54-8と同一個体の可 能性あり
-10	1 Gr SX 01	古式土師器 甕	15.4	-	-	口縁部 内外面ナデ 頸部下 外/ハケ 内/ケズリ	橙褐色	密 1mm以下白色砂粒・ 石英・雲母・金雲母を 含む	良好	外面にスス付着
-11	1 Gr SX 01	古式土師器 甕	14.8	-	-	口縁部 内外面ナデ	淡褐色	密 石英・雲母・金雲母を 含む	良好	
-12	1 Gr SX 01	古式土師器 甕	-	-	-	口縁部 内外面ナデ	淡褐色	やや粗い 石英・雲母・金雲母を 含む	良好	
-13	1 Gr SX 01	古式土師器 甕	13.6	-	16.85	口縁部 内外面ナデ 頸部下 外/ハケ 内/ケズリ	淡褐色	密 1mm以下白色砂粒・ 石英・雲母・金雲母を 含む	良好	布面系 外面にスス付着
-14	1 Gr SX 01	古式土師器 甕	15	-	-	口縁部 内外面ナデ 頸部下 外/ハケ 内/ケズリ	橙褐色	密 石英・雲母を含む	良好	外面にスス付着 布面系
-15	1 Gr SX 01	古式土師器 底脚坏	15.2	6.4	6.95	外/ナデ、ハケ 内/ナデ、ハケ	橙褐色	密 石英・雲母・金雲母を 含む	良好	
-16	1 Gr SX 01	土師器 高坏	-	-	-	外/ミガキ 内/ミガキ?	外/赤褐色 内/赤褐色 新/淡褐色	密 石英・雲母を含む	良好	外表面とも赤色塗彩
55-1	1 Gr 褐色土	古式土師器 甕	24.6	-	-	口縁部 内外面ナデ 頸部下 外/絞杉文 内/ナデ、指捺压痕 残る	淡褐色	密 1mm以下白色砂粒・ 石英・雲母・金雲母を 含む	良好	
-2	SD 03	古式土師器 甕	-	-	-	口縁部 内外面ナデ	淡褐色	密 石英・雲母・金雲母を 含む	良好	
-3	5 Gr 褐色土	古式土師器 甕	-	-	-	口縁部 内外面ナデ	淡褐色	密 石英・雲母・金雲母を 含む	良好	
-4	1 Gr	古式土師器 甕	13.4	-	-	口縁部 内外面ナデ	淡褐色	密 石英・雲母・金雲母を 含む	良好	
-5	1 Gr	須恵器 甕	-	10.6	-	外/回転ナデ 内/回転ナデ 底/回転分切り	灰色	密	良好	
-6	4 Gr	須恵器 甕	-	-	-	外/回転ナデ 内/回転ナデ	灰色	密 1mm以下白色砂粒・ 石英を含む	良好	切れ込み状の透し孔 2箇所にあり

IX. VI区の調査

1. 発掘調査の概要

VI区は以前は宅地として利用されていた地域で、東側に市道を挟んでI区と隣接している。スクールゾーンとなっているために調査区の南側には幅1.5mの歩道を確保する必要があったことから、この部分は発掘調査対象外としている。調査に入る前に、試掘調査によって確認されていた遺物包含層までの造成土を取り除き、堆積土を設定し、東西に5m、南北に4~5m間隔のグリッドを設定し、西側からそれぞれ1~5Grとした。調査面積は、東西約20m、南北約5mの約100m²である。なお、水処理のために南側に約20cm幅の側溝を設定している。

層序（第57図）

調査区における基本的な層序は、造成土を除くと上層に灰褐色土、褐色土、中層に褐灰色土、褐灰色粘質土、下層に灰色土、暗褐色粘質土、灰色粘質土が堆積して基盤層である粒子の細かい淡黄褐色砂質土へと達している。なお、東側では造成土や搅乱が深いため、堆積土を確認することはできない。基盤層におけるレベルは、西側で標高4.00mであるのに対し、東側では3.84mと16cm程度も低くなっている。東に向かって緩やかに傾斜していることが注意される。これは、東側に位置するI区が小山遺跡第3地点の北東端に位置することと関連するものであろう。また、遺構の中にはSK01やSK02、SK03のように基盤層である淡黄褐色砂質土の下面にあたる灰白色粗砂層まで掘り込んだものも認められている。

遺構（第57図）

遺構は、調査区西端で検出されたSD01を除くと全て基盤層である淡黄褐色砂質土上面で検出しており、溝状遺構5、土坑状遺構8、落ち込み状遺構2のほかピット状の遺構を多数検出している。褐灰色土上面で検出されたSD01からは、土師器や須恵器小片が出土しており、VI区の中では最も新しい時期に築かれた遺構と考えられる。その他の溝状遺構からの出土遺物も多く、時期について断定することは難しいが、奈良時代から平安時代と考えられる土師器や須恵器片が出土していることから、当該期に築かれた遺構である可能性が強い。このうち、SD03とSD05は南西→北東方向に基軸をもち、並列して築かれていることが注目される。また、土坑状遺構のうちSK02、SK03は井戸跡と考えられるものである。SK02からは8~9世紀頃、SK03からは11~12世紀代の遺物が出土している。その他、SX02からは奈良時代から平安時代にかけての須恵器が多く認められている。ピット状遺構には小規模なものが多く、掘立柱建物跡や柱列となるような配置は認められない。

遺物

遺物の出土量は、遺構の検出状況から考えると少量であるが、SK02、SK03では良好な資料が出土している。SK02からは土師器甕や朱塗り土師器壺、須恵器壺や塊、移動式竈などが出土しているとともに、底面からは井戸柱と考えられる板が検出されている。これらの資料は、形態的特徴から8~9

世紀頃と考えられるものである。また、SK03からは11～12世紀頃と考えられる土師器壺とともに土留めと考えられる杭が打ち込まれた状態で検出されている。その他の遺物としては弥生土器の台付壺や製塙土器なども出土している。全体的にはVI区での出土遺物には弥生時代の遺物が若干認められるものの、その中心時期は奈良時代から中世初期にかけての時期と言える。

2. 遺構と遺物

SK01 (第56図)

3～4Grの基盤層である淡黄褐色砂質土上面で検出した西南西一東北東方向に基軸をもつ土坑状遺構である。平面プランは、長軸長2.36m、最大幅1.84mを測る楕円形状を呈している。また、遺構の南側ではP01、東側ではSK05と切合関係にあり、P01よりも古くSK05よりも新しい時期に築かれたことが明らかである。なお、検出高は標高3.94mである。

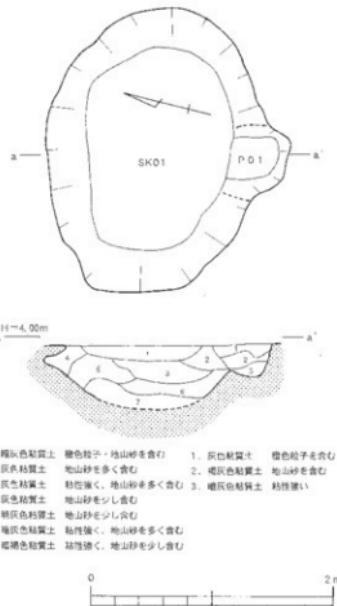
覆土には上層に暗灰色粘質土、灰色粘質土、中層に灰色粘質土、下層には粘性の強い暗灰色粘質土や暗褐色粘質土が堆積して灰白色粗砂層へと達している。断面の形状は、肩部から約45度の角度で落ちて底面は丸く作り出しており、最深部までは52cmを測る。なお、北肩部ではオーバーハングして掘り込まれた箇所が認められる。

遺物には奈良時代から平安時代にかけてのものと考えられる上師器や須恵器小片が出土していることから、遺構が築かれたのも当該期であろう。機能については不明であるが、規模が大きく深さもあることなどから、土塹墓などが想定される。また、南肩部にはP01が築かれている。覆土には上層から灰色粘質土、褐色粘質土、暗灰色粘質土と堆積して灰白色粗砂層へと達しており、最深部までは26cmを測る。出土遺物はなく、遺構が築かれた時期や機能については不明であるが、SK01よりも新しいことが明らかである。

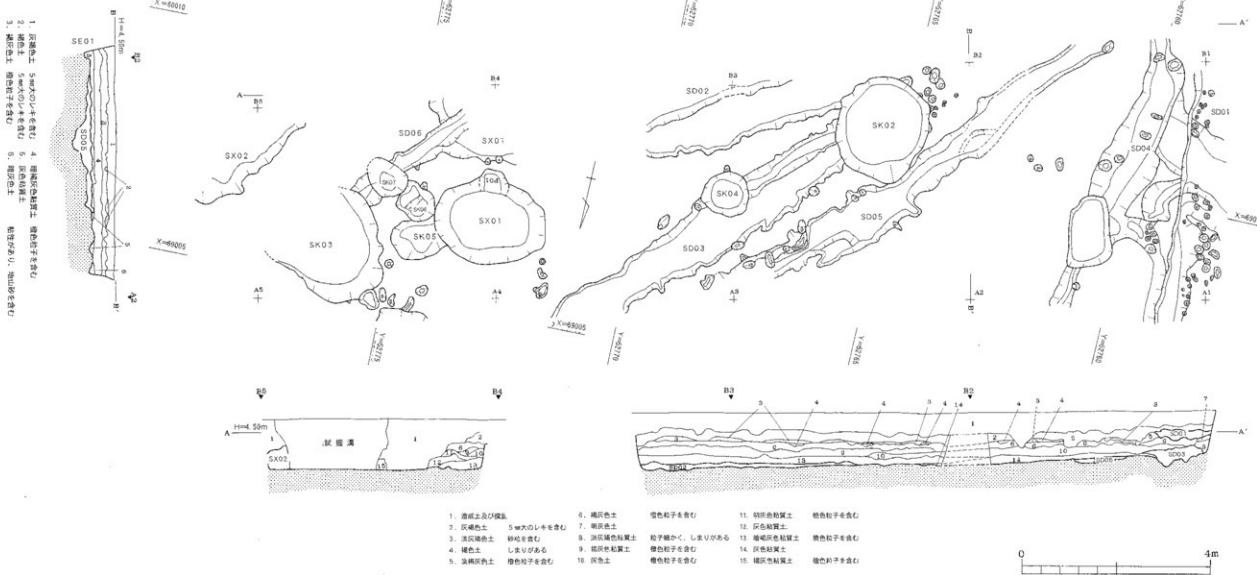
SK02 (第58図)

2Grの淡黄褐色砂質土上面で検出した土坑状遺構である。平面プランは、径約2.10mを測る円形状を呈し、北西に張り出し部を有している。なお、検出高は標高3.98mである。

セクションの崩壊により詳細な覆土の状況は明らかではないが、上層には灰色粘質土や黄褐色土、下層には粘性の強い暗褐色粘質土や暗灰色粘質土が堆積して灰白色粗砂層へと達している。なお、この層位



第56図 SK01実測図



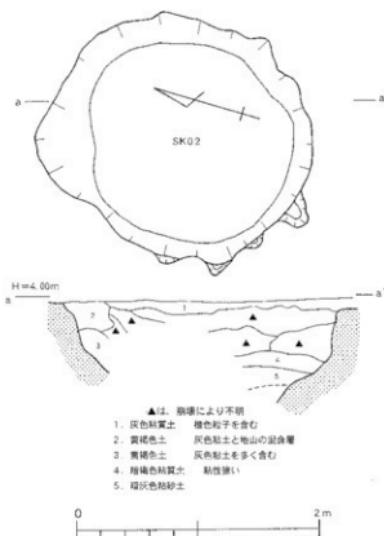
第57図 VI区透構配置図

からはかなりの湧水があることが注意される。断面の形状は、肩部から鋭角に落ちて遺構のほぼ中央に位置する底面はほぼ平坦に作り出しており、最深部までは93cmを測る。

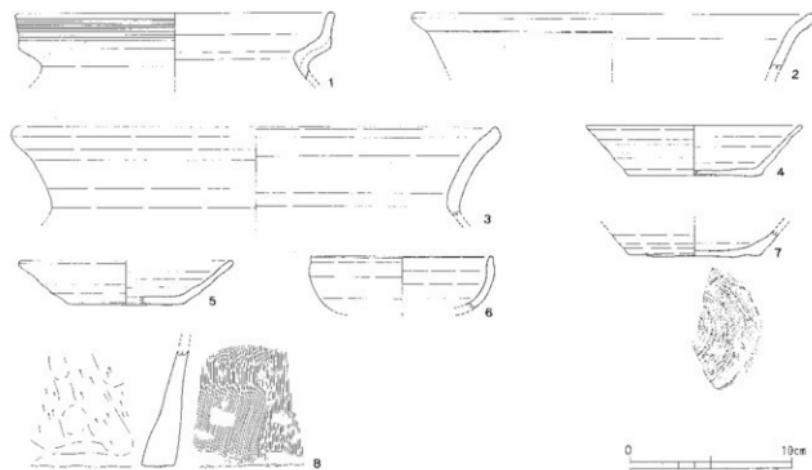
遺物には奈良時代から平安時代にかけての資料と考えられる土師器や須恵器が多量に出土していることから、遺構が築かれたのも当該期であろう。中でも朱塗り土師器が多く認められている。また、井戸枠と考えられる板材が遺構底面から出土している。以上のことから、木枠をもつ素掘りの井戸として利用されていたものと考えられ、多量の土器は井戸を廃棄する際に供獻されたものであろう。なお、覆土の状況からは人為的に埋め戻したと考えられる堆積は認められない。

SK02の出土遺物（第59図・第60図）

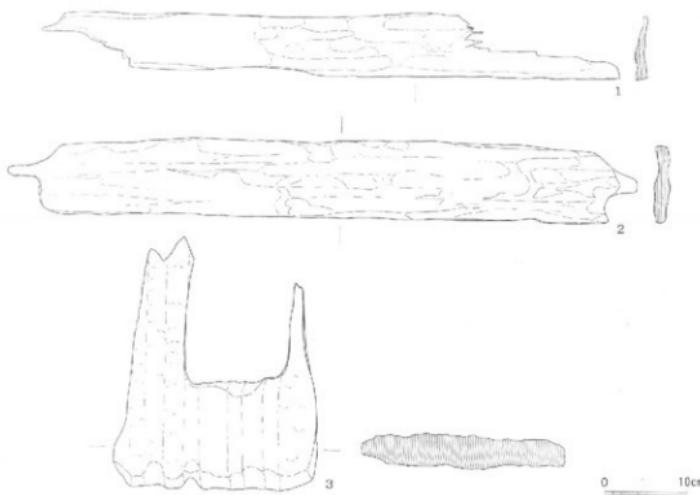
第59図-1は、弥生土器甕である。頸部から口縁部にかけて「く」の字状に屈曲し、口縁部は上方に拡張して口縁端部は丸くおさめている。口縁部外面には6条の凹線文を施し、口縁部は内外面ともナデによる調整が行われている。松



第58図 SK02実測図



第59図 SK02出土遺物実測図（1）



第60図 SK02出土遺物実測図(2)

本編年V-2様式に相当する資料と考えられ、弥生時代終末期のものであろう。

2・3は、土師器壺であろう。2は、口縁端部は外反して丸くおさめ、外面には明確な稜を作り出している。内外面ともナデによる調整が行われている。3は、口縁端部は外傾して平坦面を作り出している。内外面ともナデによる調整が行われている。このような土師器壺は、8～9世紀に相当する資料と考えられるものである。

4・5は、朱塗りの土師器壺である。4は、底部から口縁部にかけて直線的に逆「ハ」の字状に開き、口縁端部は丸くおさめている。内外面とも回転ナデ、底部は糸切り後、ハケとナデによる調整が行われている。5もほぼ同様の形態的特徴をもつものであるが、4に比べると器高が低くなっている。以上のような土師器壺は、9～10世紀頃に相当する資料と考えられる。

6は、須恵器壺である。体部から口縁部にかけて内湾しながら立ち上がり、口縁端部は外反して丸くおさめている。内外面ともナデによる調整が行われている。7は底部片で、底部は回転糸切りによつて切り離されている。6・7は、高広編年IV-A期～IV-B期にかけての資料と考えられる。

8は、移動式壺の脚部である。外面は縦方向のハケ、内面は強いケズリによる調整が行われ、スヌが付着している。出雲平野における移動式壺は6世紀後半から8世紀代の所産と考えられており、I区からも出土している。

第60図1・2は、遺構底面から出土した板材である。1は両端を欠損しているが、現存長71.2cm、厚さ0.4～1.5cmを測り、両面とも平滑に加工されている。2は現存長77.5cm、厚さ1.1～2.0cmを測り、両面とも平滑に加工されている。いずれも樹種には杉材を用いている。これらの板材は井戸枠の一部

として利用されていたものと考えられる。3は井戸枠の側板と考えられ、中央に抉りを有している。片側は欠損しているが、側面及び両面とも平滑に加工され、基底部には加工痕が顕著に認められる。厚さは約4cmを測り、樹種には杉材が用いられている。

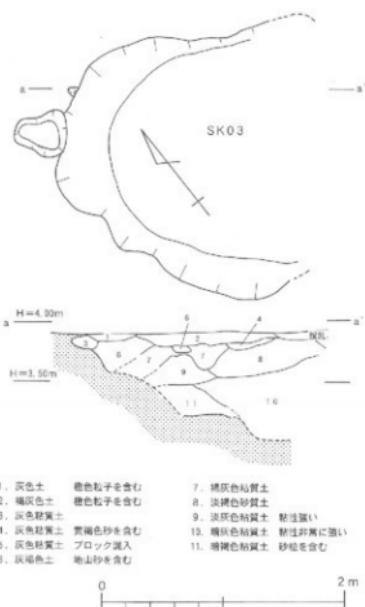
SK03 (第61図)

調査区の東側、4Grの淡黄褐色砂質土上面で検出した土坑状遺構である。東側が新しい時期の搅乱によって大きく切られているために平面プランは明らかではないが、検出した状況では検出長2.0m以上、最大幅1.2mを測り、南東—北西方向に基軸をもつ梢円形状を呈するものと考えられる。なお、検出高は標高3.92mである。

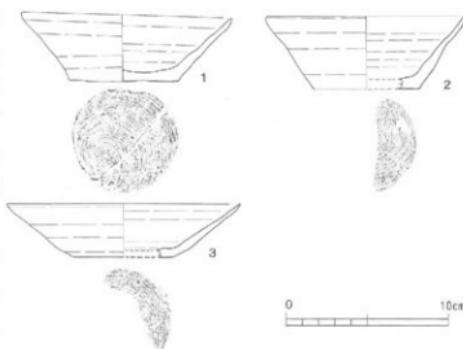
覆土には上層に灰色土、褐灰色土、中層に褐灰色粘質土、淡褐色砂質土、淡灰色粘質土、下層には粘性の強い暗灰色粘質土、暗褐色粘質土が堆積して灰白色粗砂層へと達しており、この層位からはかなりの湧水があることが注意される。断面の形狀は、東側では確認できていないが西側からは約45度の角度で落ちて一度平坦面を作り出し、そこからさらに落ちて底面はほぼ平坦に作り出しており、最深部までは72cmを測る。

遺物には、器形から11～12世紀頃と考えられる土師器や須恵器が出土しており、遺構が築かれたのも当該期であろう。また、遺構のほぼ中央に南北方向に4本の杭が打ち込まれた状態で検出されている。これらの杭は、SK03あるいは東側搅乱の土留めとして機能していたものであろう。

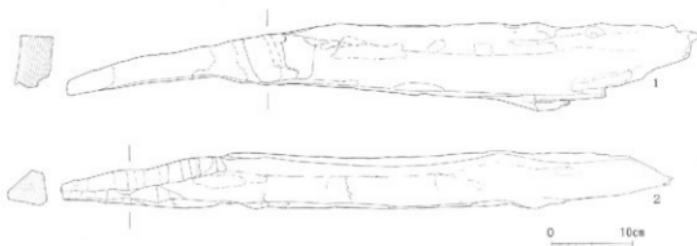
機能については、遺構の規模や形状などから素掘りの井戸と考えられ、井戸を廃棄する際に土器を供献したものと考えられる。なお、上層の堆積土はかなり淡黄褐色砂を含むものであり、人為的に埋



第61図 SK03実測図



第62図 SK03出土遺物実測図(1)



第63図 SK03出土遺物実測図（2）

められた可能性もある。

SK03の出土遺物（第62図・第63図）

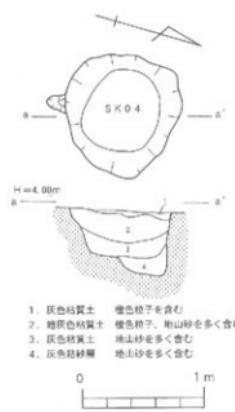
第62図—1～3は、土師器环である。1は、底部から口縁部にかけて直線的に逆「ハ」の字状に開き、口縁端部は先細りとなって丸くおさめている。内外面とも回転ナデ、底部は回転糸切りによって切り離されている。2もほぼ同様の形態的特徴をもつものであるが、1と比べると器高が高くなっている。3は器高が低く、底部から口縁部にかけて大きく開き、口縁端部は先細りとなって丸くおさめている。内外面とも回転ナデ、底部は回転糸切りによって切り離されている。また、底部と体部との境は明瞭ではなく、内外面にはススが付着している。以上のような土師器については在地性が強く、明確な時期を断定することはできないが、形状から10世紀前後の資料と考えられる。

第63図—1・2は、SK03のほぼ中央から出土した杭である。1は上端が欠損しているものの現存長78.5cmを測り、先端を削り出して尖らせている。また、両面とも平滑に加工されている。2はほぼ完成形で、長さ75.5cmを測り、両面ともに平滑に加工されている。片端は4面を削り出して尖らせ、加工痕が顕著に認められている。1・2とも樹種には杉材が用いられている。これらの杭は、井戸の土留めとして機能していたものと考えられる。

SK04（第64図）

2～3Grの淡黄褐色砂質土上面で検出した土坑状遺構である。北側ではSD03と切合関係にあり、これよりも新しい遺構であることが明らかである。平面プランは、径約50cmを測る円形状を呈している。なお、検出高は標高3.96mである。

覆土には上層に橙色粒子を含む灰色粘質土、暗灰色粘質土、下層には灰色粘質土、灰色粘砂層と堆積して灰白色粗砂層へと達している。断面の形状は、肩部から鋭角に落ちて南側に一度平坦面を作り出し、北に偏って位置する底面へとさらに落ちている。底面はほぼ平坦に作り出しており、最深部までは54cmを測る。



第64図 SK04実測図

遺物は全く出土しておらず、遺構が築かれた時期については不明である。また、機能についても他の遺構との間に掘立柱建物跡となるような配置は認められることから不明である。

S D 0 2 (第65図)

2~3Grにかけての淡黄褐色砂質土上面で検出した溝状遺構である。南側は調査区外へと達し、東側も既設電柱の支線が入っているために調査できず、西側はSK02によって切られているため、規模や形状については明らかではない。4Grでは覆土に同様の特徴をもつSX01が検出されており、これらの遺構は同一のものである可能性がある。検出した状況では検出長4.3m以上、検出幅1.4m以上を測り、基軸は南西—北東に向くものと推察される。なお、検出高は標高3.90mである。

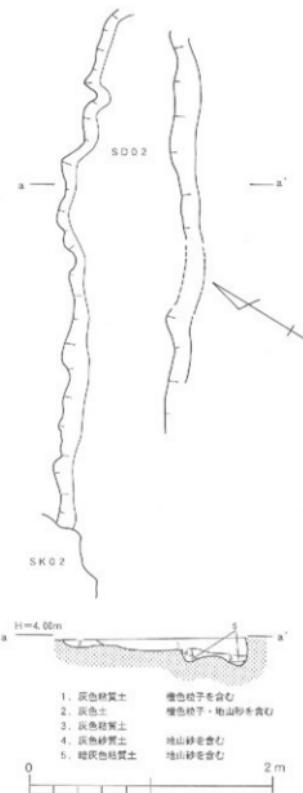
覆土には上層に橙色粒子を含む灰色粘質土、灰色土、下層には灰色粘質土、灰色砂質土、暗灰色粘質土と堆積して基盤層である淡黄褐色砂質土へと達している。断面の形状は、南側では明らかではないが北肩部からは約45度の角度で落ちて幅1m程度の広い平坦面を有し、そこから鋭角に落ちて底面はほぼ平坦に作り出しており、最深部までは23cmを測る。なお、底面におけるレベルは、東側に向かって緩やかに傾斜していることが注意される。

遺物には、奈良時代から平安時代にかけての土師器や須恵器小片が出土していることから、遺構が築かれたのも当該期であろう。なお、切合関係よりSK02よりも古い時期の遺構であることが明らかである。機能については、規模や形状が明らかではなく不明である。

S D 0 3 (第66図)

2~3Grにかけての淡黄褐色砂質土上面で検出した南西—北東方向に基軸をもつ溝状遺構である。北側は調査区外へと達し、南側はSK02、途中SK04と切合関係にあり、これらより古い時期に築かれたことが明らかである。検出した状況では検出長7.0m以上、最大幅1.32mを測る。なお、検出高は標高3.94mである。

覆土には上層に橙色粒子を含む灰色粘質土や褐灰色土が堆積し、下層には地山砂を含む淡灰色、淡褐色といった砂質土が堆積して基盤層である淡黄褐色砂質土へと達している。断面の形状は一定ではないが、基本的には肩部から緩やかに落ちてやや東に偏った底部は丸くレンズ状に作り出しており、最深部までは20cmを測る。なお、遺構の南側では一度平坦面を



第65図 SD02実測図

有してから底面に落ちている箇所も認められる。なお、底面におけるレベルは、東側に向かって緩やかに傾斜していることが注意される。

遺物には古式土師器や土師器小片が数点出土しているにすぎず、遺構が築かれた時期については不明である。また、機能についても不明であるが、西側のSD05と並列して築かれていることから、関連があるものと推察される。

SD05 (第67図)

1~2Grの淡黄褐色砂質土上面で検出した南西—北東方向に基軸をもつ溝状遺構である。南北ともに調査区外へと達し、途中攪乱やSK02とも切合関係にあり、SK02よりも古い時期の遺構であることが明らかである。検出した状況では検出長9.4m以上、最大幅1.24mを測る。なお、検出高は標高3.94mである。

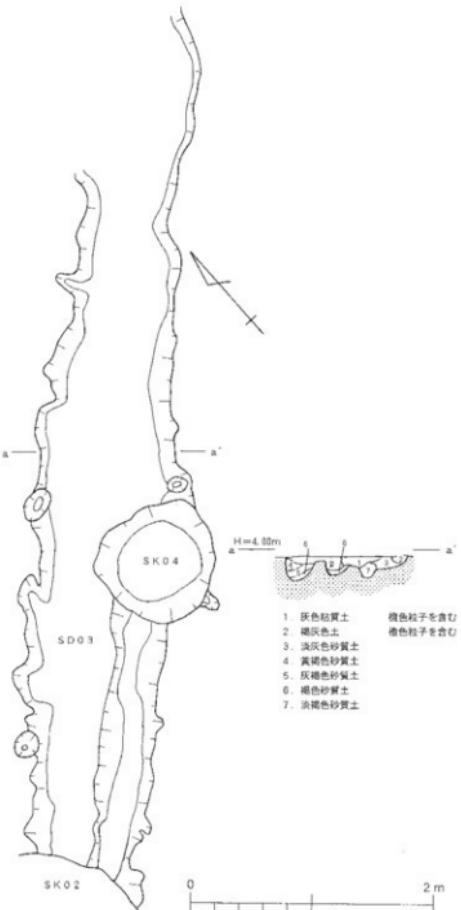
覆土には上層に橙色粒子を含む淡灰色土や灰褐色砂質土、下層には淡灰褐色砂質土や灰色砂質土が堆積して基盤層である淡黄褐色砂質土へと達している。断面の形状は一定ではないが、基本的には肩部から比較的緩やかに落ちて底面はほぼ平坦に作り出し、最深部までは34cmを測る。

SD05の出土遺物 (第68図)

第68図—1は、土師器壺あるいは甕の底部である。胎土は粗く底部の器壁が薄いことが特徴で、内外面ともナデによる調整が行われている。特徴から、平安時代頃の資料と考えられる。

SD06 (第69図)

4Grの淡黄褐色砂質土上面で検出した南西—北東方向に基軸をもつ溝状遺構である。SK03、SK07、SX01と切



第66図 SD03実測図

合関係にあり、SK03、SK07よりも古く、SX01よりも新しい時期に築かれた遺構であることが明らかである。検出した状況では検出長2.74m以上、最大幅68cmを測る。なお、検出高は標高3.94mである。

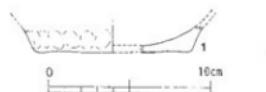
覆土には上層から褐灰色粘質土、明灰色粘質土、灰色粘砂土と堆積して基盤層である淡黄褐色砂質土へと達している。断面の形状は、肩部からほぼ垂直に落ちて底面は丸く作り出しており、最深部までは27cmを測る。なお、底面におけるレベルはほぼ一定である。

遺物は全く出土しておらず、遺構の規模も明確ではないことから、築かれた時期や機能については不明である。

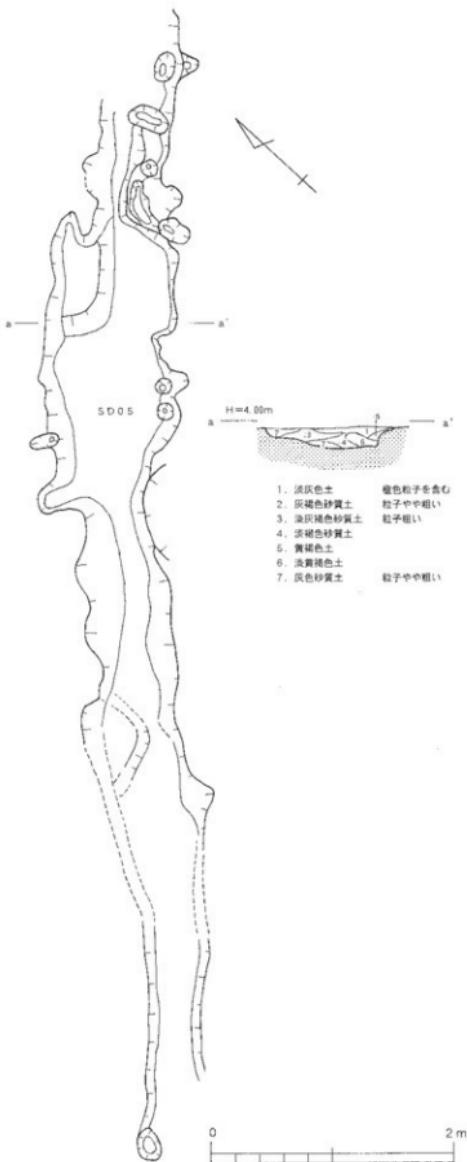
VI区の出土遺物（第70図）

第70図-1は、弥生土器の小形壺である。胴部は球形状に大きく張り出しており、内外面とも細かなハケによる調整が行われ、非常に丁寧に仕上げられている。口縁部が欠損しているため時期的な判断はできないが、他の出土遺物から推察すれば、弥生時代後期の範疇に入る資料であろう。

2は、須恵器壺の胴部であろう。胴部には3条単位からなる沈線が平行して4ヶ所に認められる。内外面とも回転ナデによる調整が行われている。古墳時代後期以降の資料であろう。



第68図 SD05出土遺物実測図

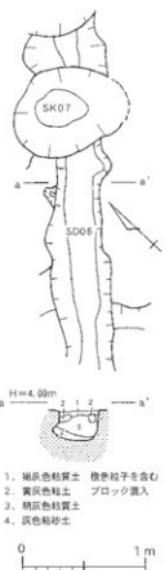


第67図 SD05実測図

3～5は、須恵器壺である。3は底部から口縁部にかけて内湾ぎみに立ち上がり、口縁端部はやや外反して丸くおさめている。内外面とも回転ナデ、底部は回転糸切りによって切り離されている。4は体部から口縁部にかけて内湾ぎみに立ち上がり、口縁端部は丸くおさめている。内外面ともナデによる調整が行われている。5は、3とよく似た形態的特徴を有している。以上のような須恵器壺は、高広編年IV-A期頃の資料と考えられ、8世紀中葉から後半にかけてのものであろう。

6～8は、須恵器壺あるいは壺の底部である。6は、底部から体部にかけて内湾ぎみに立ち上がっている。内外面とも回転ナデ、底部は回転糸切りによって切り離されている。また、底部と体部との境はあまり明瞭ではない。7は、6と同様の形態的特徴を有している。8は焼成不良であるが、底部から体部にかけて内湾ぎみに立ち上がっている。内外面とも回転ナデ、底部は回転糸切りによって切り離されている。6・7と同様に底部と体部との境は明瞭ではない。以上のような須恵器についても高広編年IV-A期に相当する資料と考えられ、8世紀中葉から後半にかけてのものであろう。

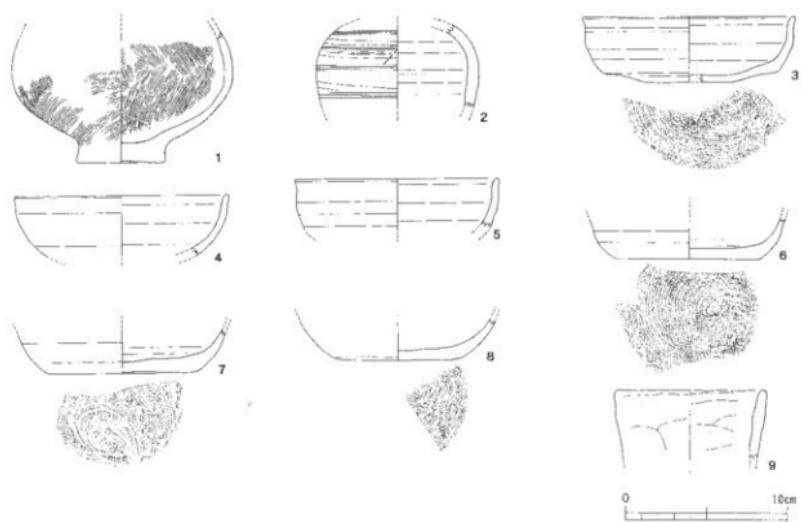
9は、土師器製塙土器である。砲弾状を呈す六連式と呼ばれるもので、外面には顕著に指頭圧痕が認められる。調査区ではⅢ区からも同様の製塙土器が出土しており、地城的な特色として内面に布目痕が認められないことがあげられる。



第69図 SD06実測図

註

- (1)「弥生土器の様式と編年 山陽・山陰編」木耳社 正岡睦夫・松本岩雄 1992年
- (2)「高広遺跡発掘調査報告書」島根県教育委員会 1984年



第70図 VI区 出土遺物実測図

VI区 出土遺物観察表（土器）

掲図番号	出土地点	器種	法量 (cm)			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
			口径	底径	高					
59-1 SK02	2Gr 弥生土器 甕	甕	19.2	-	-	口縁部 内外面ナデ 頭部下 内ノケズリ	褐色	密 1mmの大白色砂粒・石英・雲母を含む	良好	6条の凹線又あり
-2 SK02	2Gr 土師器 甕	甕	21.5	-	-	口縁部 内外面ナデ	褐色	やや粗い 1mmの大白色砂粒・石英・雲母を含む	良好	外面上スス付着
-3 SK02	2Gr 土師器 甕	甕	29.4	-	-	口縁部 内外面ナデ 頭部下 内ノケズリ	淡橙褐色	やや粗い 石英・雲母を含む	良好	
-4 SK02	2Gr 土師器 甕	甕	13.1	8.2	3.1	外/回転ナデ 内/回転ナデ 底/ナデ	外/朱色 内/朱色 底/淡褐色	密 1mm以下の白色砂粒・ 石英を含む	良好	外底部を除き朱塗り
-5 SK02	2Gr 土師器 甕	甕	12.8	6.8	2.7	外/回転ナデ 内/回転ナデ 底/ナデ	外/朱色 内/朱色 底/淡褐色	密 石英を含む	良好	外底部を除き朱塗り
-6 SK02	2Gr 須恵器 甕	甕	11.0	-	-	外/回転ナデ 内/回転ナデ	灰色	密	良好	
-7 SK02	2Gr 須恵器 甕	甕	-	8.3	-	外/回転ナデ 内/回転ナデ 底/回転糸切り	淡灰色	密	良好	
-8 SK02	2Gr 土師器 甕	甕	-	-	-	外/ハケ 内/ケズリ	褐色	やや粗い 1mmの大白色砂粒・石英・雲母を含む	良好	

排岡番号	出土地点	器種	法規 (cm)			形態・手法の特徴	色調	断面	構成	備考
			口径	底径	高さ					
62-1	4 Gr SK 0 3	土師器 杯	12.8	6.8	4.1	外/回転ナデ 内/回転ナデ 底/回転糸切り	淡黄褐色	密 石英を含む	良好	
-2	4 Gr SK 0 3	土師器 杯	12.2	6.5	4.5	外/回転ナデ 内/回転ナデ 底/回転糸切り	淡黄褐色	密 石英を含む	良好	
-3	4 Gr SK 0 3	土師器 皿	14.2	6.1	3.3	外/回転ナデ 内/回転ナデ 底/回転糸切り	淡褐色	密 石英を含む	良好	内面にスス付着
68-1	1 Gr SD 0 5	土師器 蓋 or 瓶	-	9.4	-	外/ナデ 内/ナデ 底/ナデ	淡褐色	粗い 1mmの大白色砂粒・石 英・當母を含む	不良	
70-1	1 Gr 褐色粘土 胎質土	弥生土器 蓋	-	5.4	-	外/ハケ 内/ハケ 底/ナデ	褐色	密 1mm以下の白色砂粒・ 石英・當母を含む	良好	
-2	5 Gr 灰色粘土質土	須恵器 蓋	-	-	-	外/回転ナデ 内/回転ナデ	灰色	密	良好	外面に自然縞がかかる
-3	5 Gr 灰色粘土質土	須恵器 杯	13.0	10.8	4.1	外/回転ナデ 内/回転ナデ 底/回転糸切り	暗灰色	密	良好	
-4	5 Gr 灰色粘土質土	須恵器 杯	13.0	-	-	外/回転ナデ 内/回転ナデ	灰色	密 1mm以下の白色砂粒・ 石英を含む	良好	
-5	5 Gr 灰色粘土質土	須恵器 杯	12.4	-	-	外/回転ナデ 内/回転ナデ	暗灰色	密 1mm以下の白色砂粒・ 石英を含む	良好	
-6	3 Gr 灰色粘土質土	須恵器 杯	-	9.0	-	外/回転ナデ 内/回転ナデ 底/回転糸切り	暗灰色	密 1mmの大白色砂粒・石 英を含む	良好	
-7	2 Gr 灰色粘土質土	須恵器 杯	-	8.8	-	外/回転ナデ 内/回転ナデ 底/回転糸切り	灰色	密 1mmの大白色砂粒・石 英を含む	良好	
-8	2 Gr 灰色粘土質土	須恵器 杯	-	6.4	-	外/回転ナデ 内/回転ナデ 底/回転糸切り	淡褐色	密	不良	
9	側溝 土師器 製壺土器	9.1	-	-	-	外/ナデ、指痕压痕残る 内/ナデ、指痕压痕残る	淡褐色	密 石英・當母を含む	良好	

VI区 出土遺物観察表 (その他の遺物)

排岡番号	出土地点	遺存状況	製品名	材質	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備 考
60-1	2 Gr SK 0 2	両端欠損	井戸枠	杉	71.2	7.8	1.4	-	両面が平滑に加工
-2	2 Gr SK 0 2	両端欠損	井戸枠	杉	77.5	9.6	2.0	-	両面が平滑に加工
-3	2 Gr SK 0 2	片端欠損	井戸枠	杉	31.0	25.0	1.8	-	4面が平滑に加工 基底部に加工痕が明瞭に残る
63-1	4 Gr SK 0 3	上端欠損	杭	杉	78.5	10.9	4.7	-	先端を削り出す
-2	4 Gr SK 0 3	完形	杭	杉	75.3	6.7	4.8	-	4面を削り出す 加工痕明瞭に残る

X. VII区の調査

1. 発掘調査の概要

VII区はVI区と道路を挟んで東側に隣接しており、以前は宅地として利用されていた地域にある。この調査区もスクールゾーンとなっているために南側に1.5m幅の仮歩道を設定する必要があったため、この部分は発掘調査対象外としている。調査に入る前に、試掘調査によって確認されていた遺物包含層までの造成土を取り除き、排土した。そして、東西に5m、南北に1m間隔の杭を設定し、西側からそれぞれ1～3Grとした。調査面積は、東西約11.6m、南北約1.4mの約16.24m²である。

層序（第73図）

調査区には造成土が厚く堆積しているため、基盤層である灰白色砂質土上面には堆積土はほとんど認められていない。したがって、上部はかなりの削平を受けているものと考えられる。わずかながら橙褐色土、灰褐色砂質土が一部で認められている。基盤層である灰白色砂質土は西側のV区から続くものであるが、東側に向かって粒子が粗くなる傾向にある。また、基盤層におけるレベルは標高3.96mと東西を通してほぼ一定である。

遺構（第73図）

遺構は全て基盤層である灰白色砂質土上面で検出しておらず、上部はかなりの削平を受けているものと考えられる。また、調査区が狭小なために規模や形状も不明確なものが多い。遺構には、溝状遺構2、落ち込み状遺構1、土坑状遺構1のほかピット状遺構を数穴検出している。このうち、SK01からは古式土師器が出土しており、機能としては不明であるが弥生時代終末期から古墳時代前期初頭に築かれた可能性が強いものである。その他の遺構からは出土遺物もなく、築かれた時期や機能については不明である。

遺物

遺構内、遺物包含層からも遺物の出土量は極端に少なく、わずかに古式土師器や土師器小片が数点出土しているにすぎない。そのなかにあって、時期が判断できるものはとしてはSK01からは複合口縁を有す古式土師器壺が出土している。隣接するV区西側のSX01からは多量の古式土師器が出土しており、VII区付近まで当該期における生活基盤があったことが推察される。

2. 遺構と遺物

S K O 1 (第71図)

調査区の西端、1Grの灰白色砂質土上面で検出した土坑状遺構である。北側及び西側は調査区外へと達しているため、形状は明らかではない。現状からは検出長74cm以上、最大幅94cmを測り、ほぼ東西方向に基軸をもつ橢円形状を呈するものと推察される。なお、検出高は標高4.54mである。

覆土には上層から灰褐色土、褐色砂質土、暗褐色土、暗褐色砂質土、灰色砂質土と堆積して基盤層である灰白色砂質土へと達している。断面の形状は、南肩部からはほぼ垂直に、北肩部からは約45度の角度で落ちて底面は丸く作り出しており、最深部までは30cmを測る。

遺物には、複合口縁をもつ古式土器器型の口縁部や胴部が数点検出されていることから、弥生時代終末期から古墳時代前期初頭にかけて築かれた遺構と考えられる。機能については、部分的な検出であることから不明である。

S D O 1 (第72図)

1Grの灰白色砂質土上面で検出した西南西—東北東方向に基軸をもつ溝状遺構で、南北ともに調査区外へとさらに伸びている。検出した状況では検出長1.8m以上、最大幅84cmを測る。なお、検出高は標高4.52mである。

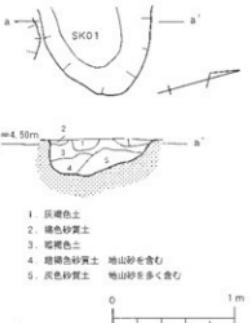
覆土には上層中央にしまりのある褐灰色土、肩部には淡褐色土、灰褐色砂質土が堆積し、下層には灰褐色土が堆積して基盤層である灰白色砂質土へと達している。断面の形状は、肩部から鋭角に落ちて底面はほぼ平坦に作り出しており、最深部までは30cmを測る。なお、底面におけるレベルは北側に向かって緩やかに傾斜していることが注意される。

遺物が全く出土しておらず、部分的な検出であることから、築かれた時期や機能については不明である。

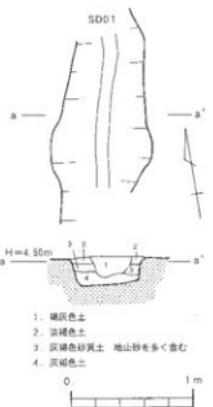
S D O 2 (第74図)

3～4Grの灰白色粗砂層上面で検出した東南東—西南西方向に基軸をもつ溝状遺構である。基盤層である灰白色砂質土は2Gr付近からしだいに粗くなり、灰白色粗砂層へと変化している。途中SX01によって一部が切られているが、南北ともに調査区外へとさらに伸びている。検出した状況では検出長2.7m以上、最大幅80cmを測り、北側にやや張り出した部分が認められる。なお、検出高は標高4.50mである。

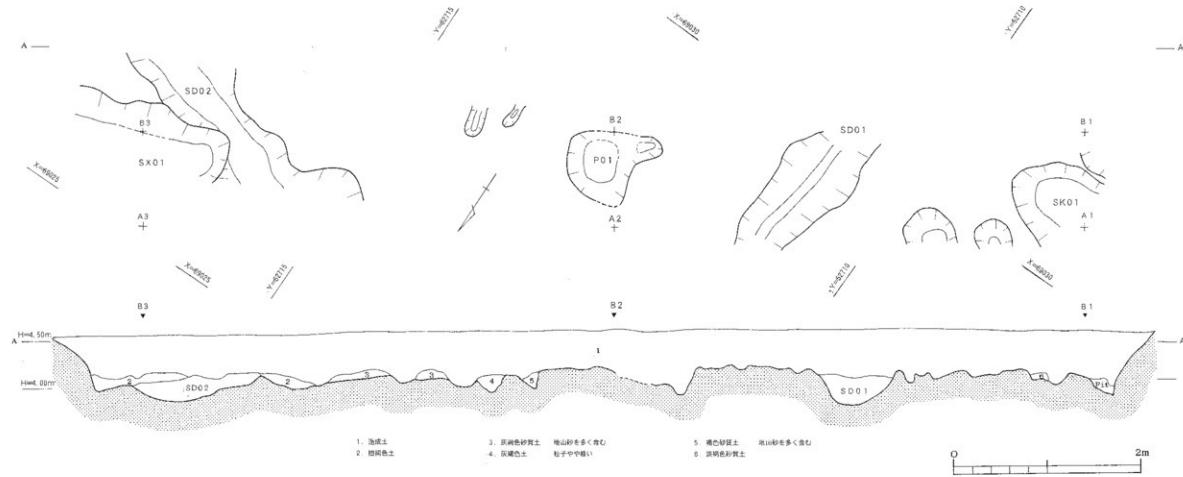
覆土には上層から褐色土、褐色砂質土と堆積して基盤層である灰白色粗砂層へと達している。断面の形状は、肩部から約45度の



第71図 SK01 実測図



第72図 SD01 実測図



第73図 VII区造構配置図

角度で落ちて底面はほぼ平坦に作り出しており、最深部までは15cmを測る。なお、南北における底面のレベルはほぼ一定である。

遺物は全く出土しておらず、遺構が築かれた時期については不明であるが、切合関係からSX01よりも古いことが明らかである。機能については部分的な検出であることから、不明である。

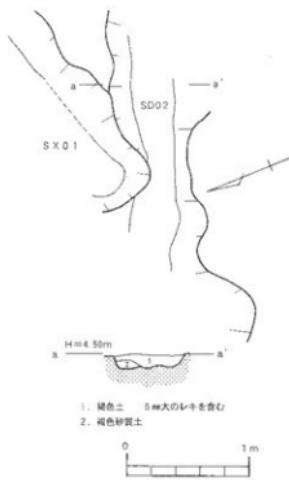
SD02と切合関係にあるSX01は、北側及び東側が調査区外へと達しており、規模や形状は明らかではない。肩部からは比較的緩やかに落ちて底面はほぼ平坦に作り出し、最深部までは22cmを測る。遺物は全く出土しておらず、築かれた時期や機能については不明である。

P 01 (第75図)

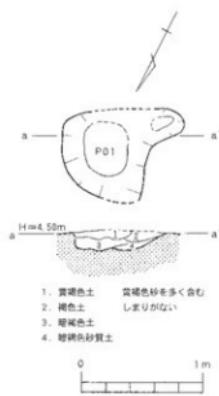
調査区のほぼ中央、1~2Grの灰白色砂質土上面で検出したピット状遺構である。平面プランは測量杭の設置により明らかではないが、南西側に張り出し部をもった径約64cmを測る円形状を呈するものと推察される。なお、検出高は標高4.52mである。

覆土には上層から黄褐色土、褐色土、暗褐色土、暗褐色砂質土と堆積して基盤層である灰白色粗砂層へと達している。断面の形状は、肩部から鋭角に落ちて底面はほぼ平坦に作り出しており、最深部までは21cmを測る。

遺物は全く出土しておらず、他の遺構との間にも直線上あるいは掘立柱建物跡となるような配置は認められないことから、遺構が築かれた時期や機能については不明である。



第74図 SD02実測図



第75図 P01実測図

X I. VIII区の調査

1. 発掘調査の概要

VIII区はVII区の東側で、以前は宅地として利用されていた地域にある。なお、スクールゾーンとなっているため、南側に幅1.5mの仮歩道を設定する必要があった。また、VII区との間は民家への進入路となっているためにこの部分は発掘調査対象外としている。調査に入る前に、試掘調査によって確認されていた遺物包含層までの造成土を取り除き、排土した。そして、VII区から続く位置に東西5m、南北に3m間隔のグリッドを設定し、西側からそれぞれ4~5Grとした。なお、VII区以東は既設道路の拡幅部分が大きいため、VII区よりやや南北に広い調査区となっている。調査面積は、東西約6m、南北約5mの約30m²である。

層序（第76図）

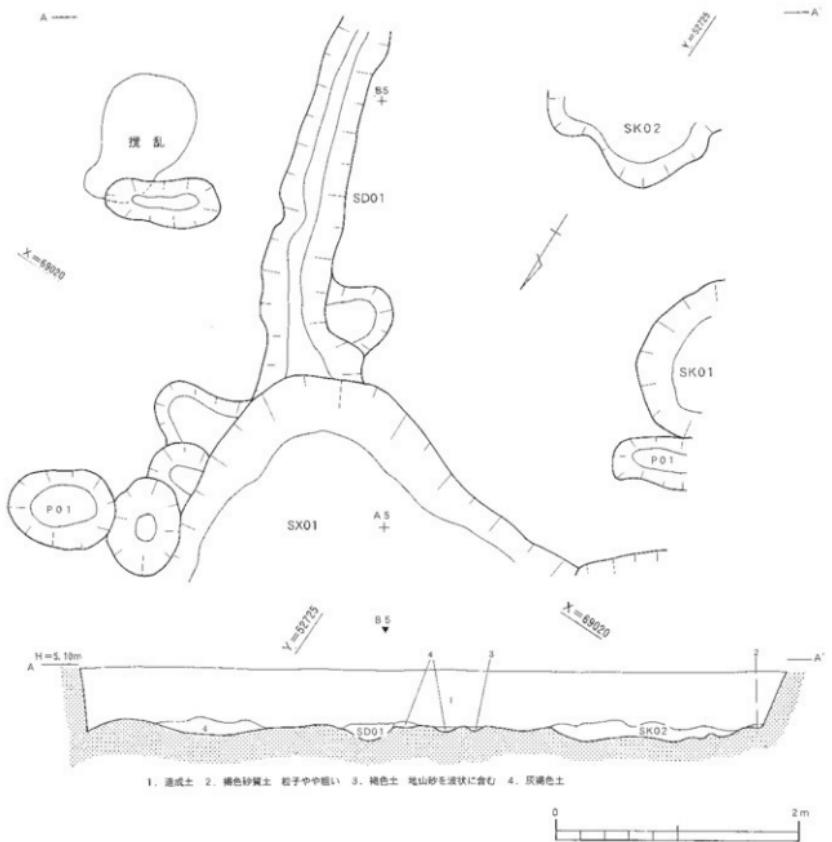
VIII区では造成土が厚く、基盤層である灰白色粗砂層にまで達しており、その上面にはわずかに褐色上、褐色砂質土が認められるのみである。したがって、上面はかなりの削平を受けているものと考えられる。基盤層である灰白色粗砂層はVII区から続くものであるが、VII区で標高3.96mであったのに対し、VIII区では4.04mとやや高くなっていることが注意される。なお、調査区における基盤層のレベルはほぼ一定である。

遺構（第76図）

遺構は全て灰白色粗砂層上面で検出しており、溝状遺構1、落ち込み状遺構1、土坑状遺構2のほかピット状遺構を数穴検出している。遺構のほとんどは部分的な検出であり、規模や形状を把握できないものが多い。その中にあってSD01は、南西—北東方向に基軸をもつもので、SX01はかなり大規模なものと推察されるものである。しかし、これらの遺構内からの出土遺物は極端に少ないことから、遺構が築かれた時期や機能については不明である。また、土坑状遺構やピット状遺構についても、掘立柱建物跡となるような配置は認められないことから、築かれた時期や機能については不明である。

遺物

遺物には弥生土器、土師器、須恵器小片がわずかながら出土しているものの、時期的な判断に耐えないものが多い。このような状況は、造成土が厚く遺構の上面がかなり削平されていることに起因するものと考えられる。その中にあって、内面がナデ調整される弥生時代後期前半の甕片が1点出土している。この遺物は遺構に伴うものではないが、東に隣接するIX区では、当該期の溝状遺構が検出されている。



第76図 VIII区遺構配置図

2. 遺構と遺物

S K 01・P 01 (第77図)

4Grの灰白色粗砂層上面で隣接して検出した遺構である。いずれも西側は調査区外へと達しているため、規模や形状は明らかではない。なお、検出高は標高4.68mである。

SK01は、現状では検出長60cm以上、最大幅1.32mを測る。

覆土には上層に5mm大のレキを含む褐灰色土、灰褐色土、下層には褐色土、灰褐色土などが堆積して基盤層である灰白色砂質土へと達している。断面の形状は、肩部から約45度の角度で落ちて底面は丸くレンズ状に作り出しており、最深部までは38cmを測る。

遺物は全く出土しておらず、形状も明らかではないことから、遺構が築かれた時期や機能については不明である。

P01は、検出した状況では長軸長62cm、最大幅42cmを測り、基軸は西南西—東北東に向いている。

覆土には灰褐色土、褐色砂質土と堆積して基盤層である灰白色粗砂層へと達している。断面の形状は、肩部から約45度の角度で落ちて底面は丸くレンズ状に作り出しており、最深部までは12cmを測る。

遺物は全く出土しておらず、形状も明らかではないことから、遺構が築かれた時期や機能については不明である。

S K 02 (第78図)

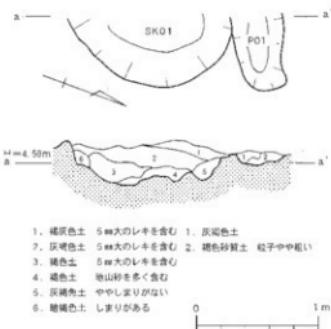
4Grの灰白色粗砂層上面で検出した土坑状遺構である。南側は調査区外へと達しているため、規模や形状については明らかではない。現状では検出長62cm、最大幅1.48mを測る。なお、検出高は標高4.60mである。

覆土には、砂を波状に含む褐色土が堆積して基盤層である灰白色粗砂層へと達している。断面の形状は、肩部から比較的緩やかに落ちて底面はほぼ平坦に作り出しており、最深部までは14cmを測る。

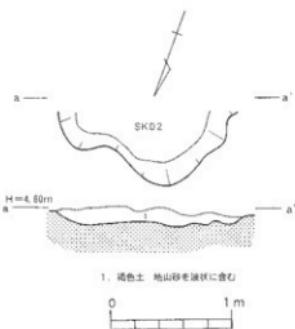
遺物は出土しておらず、部分的な検出であることから遺構が築かれた時期や機能については不明である。

S D 0 1 (第79図)

5Grの灰白色粗砂層上面で検出した南西—北東方向に基軸をもつ溝状遺構である。南側は調査区外へと達し、さらに伸びている。また、北側ではSK01、途中ピッ



第77図 SK01・P01実測図



第78図 SK02実測図

ト状遺構とも切合関係にあり、SX01よりも古く、ピット状遺構よりも新しく築かれたことが明らかである。検出した状況では、検出長3.2m以上、溝幅は北側に向かってしだいに広くなり、最大幅94cmを測る。なお、検出高は標高4.54mである。

覆土には上層のほぼ中央に褐色土がレンズ状に堆積し、肩部には灰褐色砂質土、下層には褐色砂質土が堆積して基盤層である灰白色粗砂層へと達している。断面の形状は、肩部から約45度の角度で落ちて底面は丸くレンズ状に作り出しており、最深部までは20cmを測る。なお、底面におけるレベルは南側で標高4.40mであるのに対し、北側では4.25mと15cm程度北へ向かって傾斜していることが注意される。

遺物は全く出土しておらず、規模や形状についても明らかではないことから築かれた時期や機能については不明である。

S X 0 1 (第76図)

4～5Grの灰白色粗砂層上面で検出した落ち込み状遺構である。北側及び西側は調査区外へと達している。また、南側ではSD01、東側では複数のピット状遺構と切合関係にあり、SD01よりも新しい時期に築かれたことが明らかである。検出した状況では、南北長1.7m以上、東西長1.2m以上を測り、かなり大規模な遺構であると推察される。なお、検出高は標高4.52mである。

覆土は西側では褐色砂質土、淡橙褐色砂質土がレンズ状に堆積し、東側では上層からレキを含む灰褐色土、褐色土が堆積して基盤層である灰白色粗砂層へと達している。断面の形状は、肩部から比較的緩やかに落ちて底面はほぼ平坦に作り出しており、最深部までは39cmを測る。なお、底面におけるレベルは、北側に向かって傾斜している。

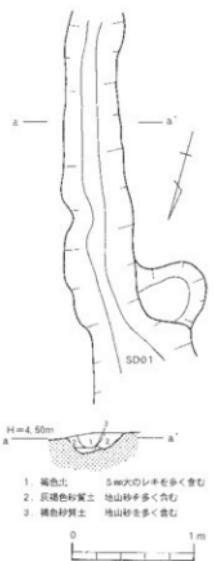
遺物には、奈良時代から平安時代にかけてのものと考えられる土師器や須恵器などが出土していることから、遺構が築かれたのも当該期であろう。機能については、部分的な検出であることから不明である。

S X 0 1 の出土遺物 (第81図)

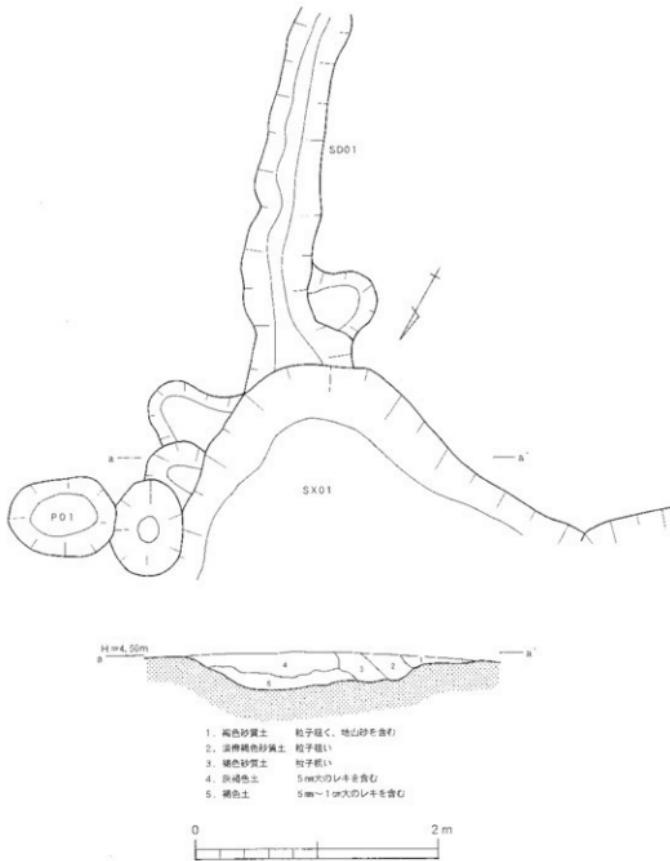
第81図-1は、土師器小皿である。底部から口縁部にかけて直線的に大きく開き、口縁端部は平坦におさめている。内外面とも回転ナデ、底部は回転糸切りによって切り離されている。このような小皿については、10世紀後半以降の所産と考えられている。

P O 1 (第82図)

5Grの灰白色粗砂層上面で検出したピット状遺構である。西側で同規模のピット状遺構と切合関係



第79図 SD01実測図

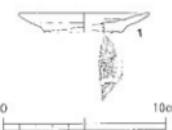


第80図 SX01実測図

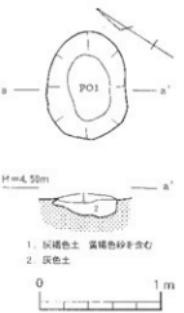
にあり、これより新しい時期に築かれたことが明らかである。平面プランは長軸長88cm、最大幅66cmを測り、南西一北東方向に基軸をもつ橢円形状を呈している。なお、検出高は標高4.46mである。

覆土には上層に灰褐色土、下層に灰色土が堆積して基盤層である灰白色粗砂層へと達している。断面の形状は、北肩部からは比較的緩やかに、南肩部からはほぼ垂直に落ちて底面は丸く作り出しており、最深部までは20cmを測る。

遺物は全く出土しておらず、遺構が築かれた時期については不明である。機能については、規模や形状などから柱穴などが想定されるものの、現状では調査区が狭小なために掘立柱建物跡となるような配置は認められない。



第81図 SX01出土遺物実測図



第82図 P01実測図

VIII区 出土遺物観察表（土器）

辨別番号	出土地点	器種	法量 (cm)			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
			口径	底径	器高					
81-1 S X 01	3 G + S X 01	土器 小皿	8.0	4.8	1.2	外／回転ナデ 内／回転ナデ 底／回転糸切り	褐	胎土	良好	

X II. IX区の調査

1. 発掘調査の概要

IX区は、VI区とVII区との間に位置し、以前は宅地として利用されていた地域にある。この調査区もスクールゾーンとなっているために南側に幅1.5mの仮歩道を設定するとともにVI区及びVII区との間は民家への進入路となっているため、この部分は発掘調査対象外としている。調査に入る前に、試掘調査によって確認されていた遺物包含層までの造成土を取り除き、排土した。そして、東西に5m、南北に6m間隔のグリッドを設定し、西側から0~3Grとした。なお、IX区では既設道路の拡幅部分が広いために他の調査区に比べると南北に幅広い調査区となっている。調査面積は東西約13m、南北約7mの約71m²である。

層序（第85図）

調査区における基本的な層序は、造成土及び搅乱土を除くと上層から灰褐色土、暗灰褐色土、暗褐色砂質土と堆積して基盤層へと達している。このうち、灰褐色土は広く堆積し、5mm大のレキを含んでいる。また、造成土が厚いため、検出された遺構は上部がかなり削平を受けているものと考えられる。IX区西側における基盤層は、VII区から続く灰白色粗砂層であるが、2Gr以東の南側では粒子が細かくなり、淡黄褐色砂質土へと変化している。なお、基盤層におけるレベルは標高4.50mとほぼ一定である。

遺構（第85図）

遺構は全て基盤層上面で検出しており、溝状遺構1、落ち込み状遺構4、土坑状遺構3のほかピット状遺構を多数検出している。SD01は、南西一北東方向に基軸をもつもので、遺構内からは弥生時代後期頃の遺物が出土している。規模や形状などから、水路として利用されていたものと推察される。SX01は機能については不明であるが、かなり大規模な遺構であると推察され、弥生時代後期頃の遺物が出土している。SK02は、南側のピット状遺構と直線上に配置されることから、掘立柱建物跡としての可能性をもつものである。その他、ピット状遺構の中には南北あるいは東西方向に直線上に配置されるものが確認されており、それぞれ掘立柱建物跡の可能性をもつものである。

遺物

遺物には、弥生土器、古式土師器、上師器、須恵器などが出土している。小片が多いが、SD01、SX01からは口縁部に凹線文を施す弥生時代後期の甕や外面底部と外面胴部がハケ調整される甕あるいは壺の底部が出土している。古式土師器は、SX01などでわずかに小片が出土しているにすぎない。土師器、須恵器には奈良時代から平安時代にかけてのものが多く、SK02などから遺物が出土している。

2. 遺構と遺物

SK01 (第83図)

1Grの灰白色粗砂層上面で検出した土坑状遺構である。上部はかなりの削平を受けているものと考えられるが、平面プランは径約1.7mを測る円形状を呈している。なお、検出高は標高4.54mである。

覆土には上層から暗褐色砂質土、褐色砂質土、淡褐色砂質土と堆積して基盤層である灰白色粗砂層へと達している。断面の形状は、肩部から約45度の角度で落ちて底面には凹凸が認められるものの、ほぼ平坦に作り出しており、最深部までは19cmを測る。

遺物には、奈良時代から平安時代にかけてのものと考えられる土師器や須恵器が出土していることから、遺構が築かれたのも当該期であろう。機能については、他の遺構との間に掘立柱建物跡となるような配置は認められないことから、不明である。

SK02 (第84図)

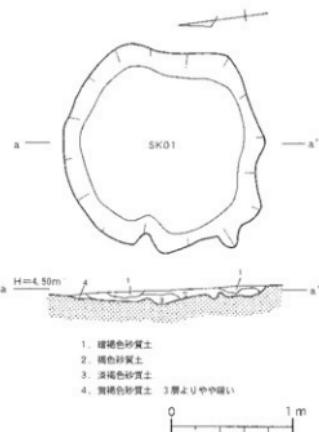
前述したSK01の南に位置し、1Grの灰白色粗砂層上面で検出した土坑状遺構である。平面プランは長軸長94cm、最大幅82cmを測り、南北方向に基軸をもつ梢円形状を呈している。なお、検出高は標高4.54mである。

覆土には上層中央部に淡褐色土、肩部に淡褐色砂質土、淡黄褐色砂質土が堆積し、下層には褐色土、淡褐色砂質土が堆積して基盤層である灰白色粗砂層へと達している。断面の形状は、肩部から約15度の角度で落ちて狭くやや南に偏って位置する底面は丸く作り出しており、最深部までは約32cmを測る。

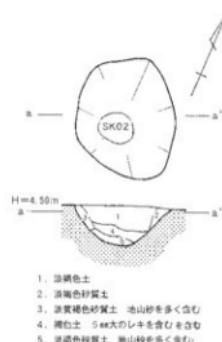
遺物には、土師器や底部が回転糸切りによって切り離される須恵器などが出でていることから、奈良時代から平安時代にかけて築かれた遺構と考えられる。そして南に位置するピット状遺構とはほぼ等間隔で直線上に配置されていることが注意される。また、調査区の北側ではこれと直交するように東西方向にもピット状遺構が配置されている。このことから機能としては、掘立柱建物の柱穴の可能性をもつものである。

SD01 (第86図)

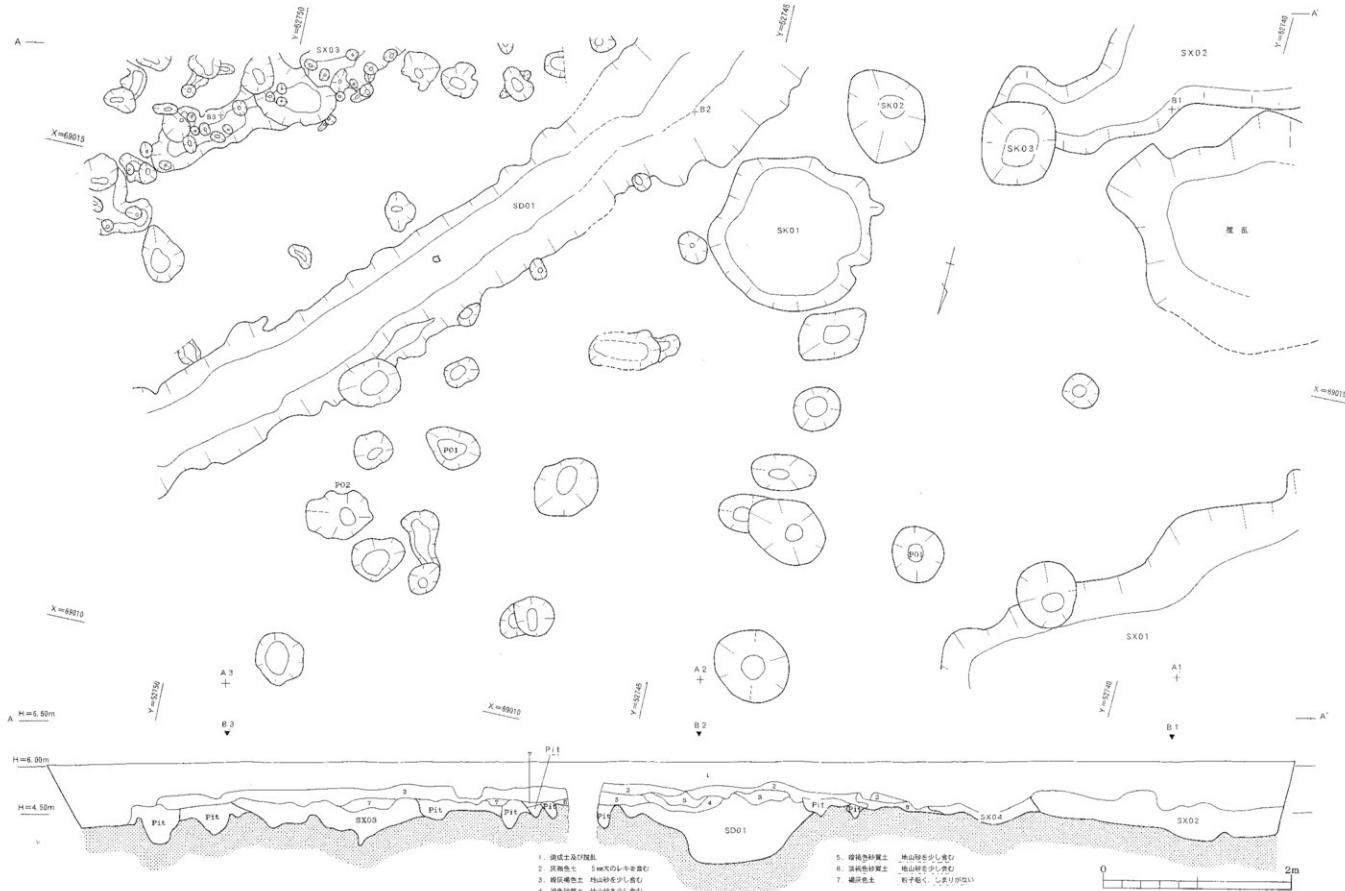
1～3Grにかけての基盤層上面で検出した溝状遺構である。な



第83図 SK01 実測図



第84図 SK02 実測図



第85図 IV区遺構配置図

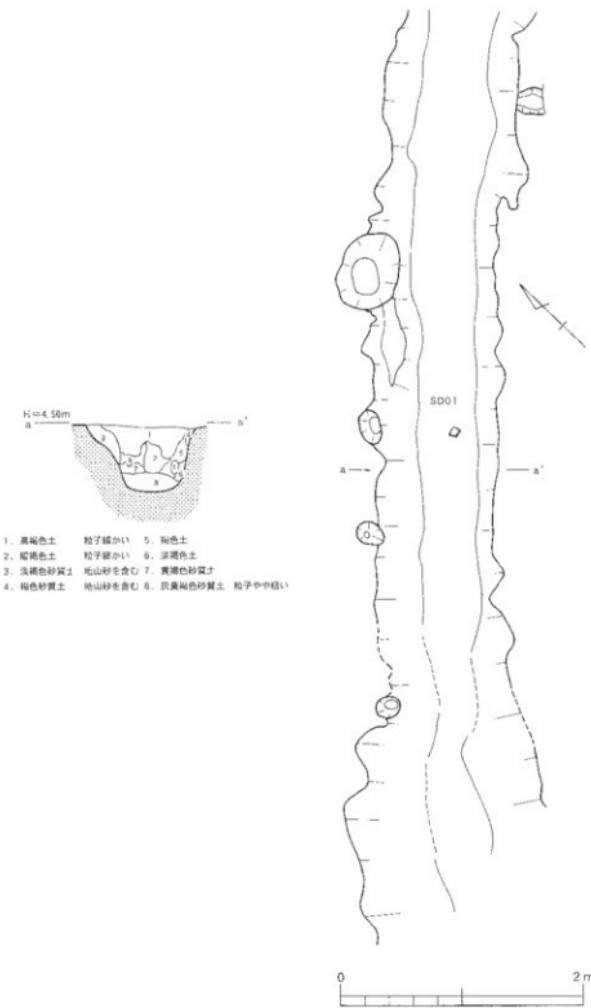
お、検出面の基盤層は南側では淡黄褐色砂質土、北側では灰白色粗砂層と変化している。途中、SD01よりも新しい時期に築かれたピット状遺構によって一部が切られているが、南北一北東方向に基軸をもち、調査区外へとさらに伸びている。検出した状況では検出長7.6m以上、最大幅1.6m、狭いところでも92cmを測る。な

お、検出高は標高4.48mである。

覆土は、複雑な堆積を示している。上層中央部には黒褐色土、肩部には淡褐色砂質土や褐色砂質土、中層には暗褐色土、褐色土、淡褐色土、黄褐色砂質土、下層には灰黄褐色砂質土が堆積して灰白色粗砂層へと達している。

断面の形状は、肩部から鋭角に落ちて底面はほぼ平坦に作り出しており、最深部までは72cmを測る。なお、底面におけるレベルは、北側に向かつて緩やかに傾斜していることが注意される。

遺物には、拡張した口縁部に凹線文を施す弥生時代後期の甕や壺の底部が出土していることから、遺構が築かれたのも当該期であろう。機能については、規模や形状などから水路として利用されていたものと考えられ、底面における傾斜から、南から北へ向かつて流れていったものと考えられる。



第86図 SD01 実測図

S D O 1 の出土遺物 (第87図)

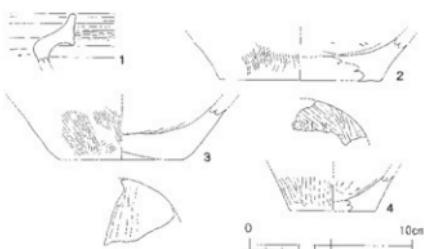
第87図—1は、弥生土器壺である。頭部から口縁部にかけて「く」の字状に屈曲し、口縁部は拡張して外面に4条の凹線文を施している。口縁部は内外面ともナデ、頭部下内面はケズリによる調整が行われている。このような壺は、松本編年IV-2~V-1様式に相当する資料と考えられる。

2~4は、弥生土器壺あるいは甕の底部である。2は外面がハケ、内面はケズリ、底部外側にもハケによる調整が行われている。このように底部外側がハケによって調整されるものは珍しい。3は外面がハケ、内面はミガキ、底部外側はミガキによる調整が行われている。このように底部外側がミガキによって調整されるものは珍しく、2・3はやや特異な遺物である。4は、外面は縦方向のミガキ、内面はケズリによる調整が行われている。2~4の底部は、出土している甕の特徴から松本編年IV-2~V-1様式に相当する資料であろう。

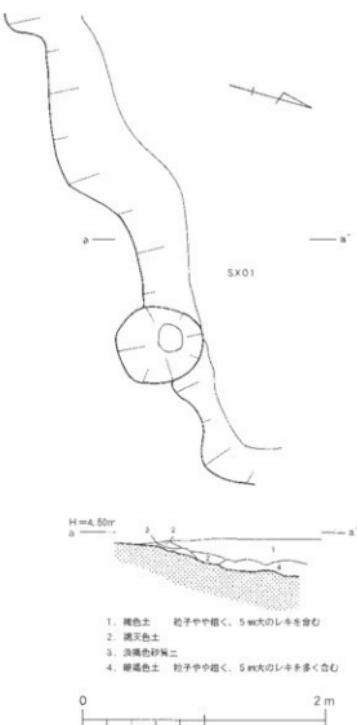
S X 0 1 (第88図)

0~1Grの灰白色粗砂層上面で検出した落ち込み状遺構である。西側及び北側が調査区外へと達しているため規模や形状は明らかではないが、東西長3.82m以上、南北長2.26m以上を測り、かなり規模の大きい遺構と推察される。また、遺構の東側ではピット状遺構と切合関係にあり、これよりも古い時期の遺構であることが明らかである。なお、検出高は標高4.46mである。

覆土には上層に褐色土、下層に暗褐色土が広く堆積して基盤層である灰白色粗砂層へと達している。なお、肩部には褐灰色土、淡褐色砂質土の堆積が認められる。断面の形状は、南肩部からは緩やかに落ちて底面はほぼ平坦に作り出しており、最深部までは30cmを測る。



第87図 SD01 出土遺物実測図



第88図 SX01 実測図

遺物には、弥生時代後期頃と考えられる小片が出土していることから、遺構が築かれたのも当該期であろう。機能については、部分的な検出のため規模や形状が明らかではなく、不明である。

S X 0 2 (第89図)

0~1Grにかけての灰白色粗砂層上面で検出した落ち込み状遺構である。南側及び西側が調査区外へと達しているため、規模や形状については明らかではない。西側ではSK03と切合関係にあり、これよりも古い時期に築かれたことが明らかである。検出した状況では東西長3.2m以上、南北長1.7m以上を測る。なお、検出高は標高4.46mである。

覆土には上層に暗褐色土、灰褐色土、下層に淡褐色砂質土、褐色砂質土と堆積して基盤層である灰白色粗砂層へと達している。断面の形状は、北肩部からは比較的緩やかに落ちて最深部までは50cmを測る。底面におけるレベルは、南側調査区外へとさらに落ちているものと推察される。また、細長く突出する遺構東側では、深さ15cmと浅くなっていることが注意される。

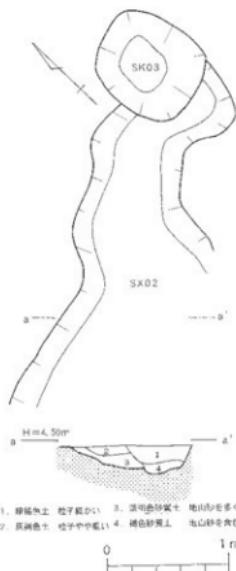
遺物には弥生土器と考えられる小片が2点出土しているにすぎず、遺構が築かれた時期については断定できない。しかし、SK03からは奈良時代から平安時代にかけての土師器や須恵器が出土しており、これよりも古い時期の遺構である。機能については、部分的な検出のため規模や形状が明らかではなく、不明である。

1 Gr P 0 1 (第90図)

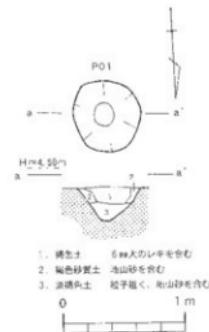
1Grの灰白色粗砂層上面で検出したピット状遺構である。平面プランは、径約56cmを測るほぼ円形状を呈している。なお、検出高は標高4.38mである。

覆土には上層の中央部に褐色土、肩部には褐色砂質土、下層には淡褐色土が堆積して基盤層である灰白色粗砂層へと達している。断面の形状は、肩部から約45度の角度で落ちてほぼ中央に位置し、狭い底面は丸く作り出しており、最深部までは28cmを測る。

遺物は全く出土しておらず、築かれた時期については不明である。機能については、東西にはば等間隔で同規模のピット状遺構が配置されていることから、掘立柱建物の柱穴としての可能性をもつものである。



第89図 SX02 実測図



第90図 1Gr P01 実測図

2 Gr P 0 1 (第91図)

2Grの灰白色粗砂層上面で検出したピット状遺構である。平面プランは長軸長60cm、最大幅42cmを測り、西北西—東南東方向に基軸をもつ橢円形状を呈している。なお、検出高は標高4.40mである。

覆土には上層中央に褐色土、肩部に褐灰色土、灰褐色土、下層には淡褐色砂質土、淡灰褐色砂質土が堆積して基盤層である灰白色粗砂層へと達している。覆土は、全て粒子がやや粗いことが特徴である。断面の形状は、肩部からやや鋭角に落ちて底面は丸く作り出しており、最深部までは18cmを測る。

遺物は全く出土しておらず、築かれた時期については不明である。機能については、他のピット状遺構とは掘立柱建物跡となるような配置は認められず、不明である。

2Gr P02 (第92図)

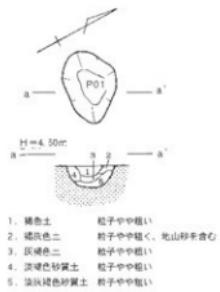
2Grの灰白色粗砂層上面で検出したピット状遺構である。平面プランは、長軸長72cm、最大幅52cmを測り、西南西—東北東方向に基軸をもつややいびつな橢円形状を呈している。なお、検出高は標高4.42mである。

覆土には上層に灰褐色土、下層には黄褐色砂質土が堆積して基盤層である灰白色粗砂層へと達している。断面の形状は、肩部から鋭角に落ちて東に偏って位置する底面は丸く作り出しており、最深部までは33cmを測る。

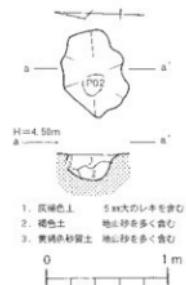
遺物は全く出土しておらず、遺構が築かれた時期については不明である。機能については他のピット状遺構とは掘立柱建物跡となるような配置は認められないことから、不明である。

註

(1)「弥生土器の様式と編年 山陽・山陰編」木耳社 正岡睦夫・松本岩雄 1992年



第91図 2Gr P01 実測図



第92図 2Gr P02 実測図

IX区 出土遺物観察表（土器）

件名	出土地点	器種	法寸 (cm)			形質・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考	
			長径	底径	器高						
87-1 -2 -3 -4	1Gr 2Gr 2Gr 2Gr	弥生土器 弥生土器 弥生土器 弥生土器	S D 01 S D 01 S D 01 S D 01	- - - --	5.6 9.8 7.7 3.2	- - - -	外／ナデ 内／ナデ 底部下 内／ケズリ 外／ハケ 内／ケズリ 底／ハケ 外／ハケ 内／ミガキ 底／ミガキ 外／ミガキ 内／ケズリ 底／ナデ	褐褐色 外／黒褐色 内／棕褐色 底／黒褐色 外／黑色 内／棕褐色 底／黑色 外／棕褐色 内／黒褐色 底／黑色	やや粗い 1mm以下の白色砂粒、 石英、貝壳を含む 1mm大の白色砂粒、 石英、貝壳を含む やや粗い 1mm大の砂粒、 石英を含む やや粗い 1~2mm大の砂粒、 石英を含む	直好 直好 直好 直好	

X III. 総括

1. 遺構

(1) 弥生時代後期

弥生時代後期に築かれた遺構として確実なものとしては、IX区で検出しているSD01がある。南西—北東方向に基軸をもつもので、規模や形状などから水路として利用されていたものと考えられている。当該期における他の遺構としては、同じくIX区のSX01、SX02のほかは検出されておらず、IV区・V区・VI区からわずかに遺物が出土しているにすぎない。過去の発掘調査では、第2次発掘調査時のSD01～SD03、第3次発掘調査時のSD23、第4次発掘調査時のSD03、SD04などが当該期の遺構とされているが、IX区SD01とは配置的に連続するものとは考えにくい。なお、弥生時代後期中葉から後葉にかけては一時的な空白期間が認められており、この状況はこれまでの発掘調査においても同様である。のことから、小山遺跡第3地点では、この時期には生活基盤としては利用されなかったものと考えられる。

(2) 弥生時代終末期から古墳時代前期初頭

当該期の遺構としては、II区でSK10、SK11、A6Gr P01を検出している。いずれも土壙墓と考えられるもので、基軸を南西—北東に向いている。遺構内からは草田編年7期の古式土師器甕や高坏などが出土地している。また、V区では多量の土器を伴ったSX01を検出している。部分的な検出であり形状は明らかではないが、第4次発掘調査時のSD03と方位や遺物の出土状況に類似性が指摘され、連続する可能性が強いものである。また、第3次発掘調査時のSD23、第4次発掘調査時のSD04、SK13など多くの遺構が配置されている。その他、IV区・IX区においてもわずかながら土器片が出土している。

(3) 奈良時代から平安時代

古墳時代前期後半から後期にかけての確実な遺構は検出されておらず、第3次発掘調査時に古墳時代後期のSK18を検出しているのみである。のことから、この時期には生活基盤としてはほとんど機能していないかったものと考えられる。

奈良時代から平安時代にかけての遺構は、最も多く配置されている。II区では南南東—北北西あるいは西南西—東北東方向に基軸をもつ多くの土坑状遺構やピット状遺構が配置され、柱列や掘立柱建物跡と推察されている。なかでもSK13からは柱根が検出されている。VI区では当該期の井戸を2検出している。SK02は底部に木枠を組んだ井戸で、遺構内からは土器が多量に出土していることから、廃棄する際に供獻したものと考えられている。SK03からも当該期の遺物が検出されており、素掘りの井戸として利用されていたものと考えられている。IX区では、南北、東西方向に直線上に配置された掘立柱建物跡あるいは柱列と考えられる土坑状遺構やピット状遺構を検出している。

(4) 中世期

中世の遺構としては、素掘りの井戸と推察されるV区SE01がある。遺構内からは12~13世紀代の特徴をもつ土師器坏や小皿が多量に検出されている。その他には当該期の遺構は検出されていない。また、過去の発掘調査においても中世末の遺構がわずかながら検出されてはいるものの、当該期の遺構なく、集落の衰退期であったことは明らかである。

2. 遺物

(1) 弥生時代後期

当該期の出土遺物は調査区をとおしても少量で、全体の形状が把握できるものも少ない。しかし、甕の口縁部には拡張して凹線文を施すものが多く認められており、松本編年IV-2~V-1様式に相当する資料が出土している。また、底部破片には外面底部がハケやミガキによって調整される特異な遺物がIX区SD01から出土している。なお、第2次発掘調査、第3次発掘調査においても弥生時代中期後葉以前の遺物は認められていない。

(2) 弥生時代終末期から古墳時代前期初頭

この時期の遺物には、壺、甕、高坏、低脚坏、器台などが出土している。このほとんどは草田編年7期に相当する資料であるが、わずかながら5~6期と考えられる遺物も出土している。遺構としてはV区SX01からの出土量が最も多い。この中には布留系の甕も出土しており、人的交流があったことが窺える。また、出雲地方特有のやや器高の高い低脚坏も出土している。

(3) 奈良時代から平安時代

当該期の遺物は、各区から出土しており、出土量も多い。器種には土師器坏、壺、甕、須恵器坏、直口壺、甕、壺などが出土している。その他当該期に属するものとして、移動式窯や土錘、製塩土器なども認められている。

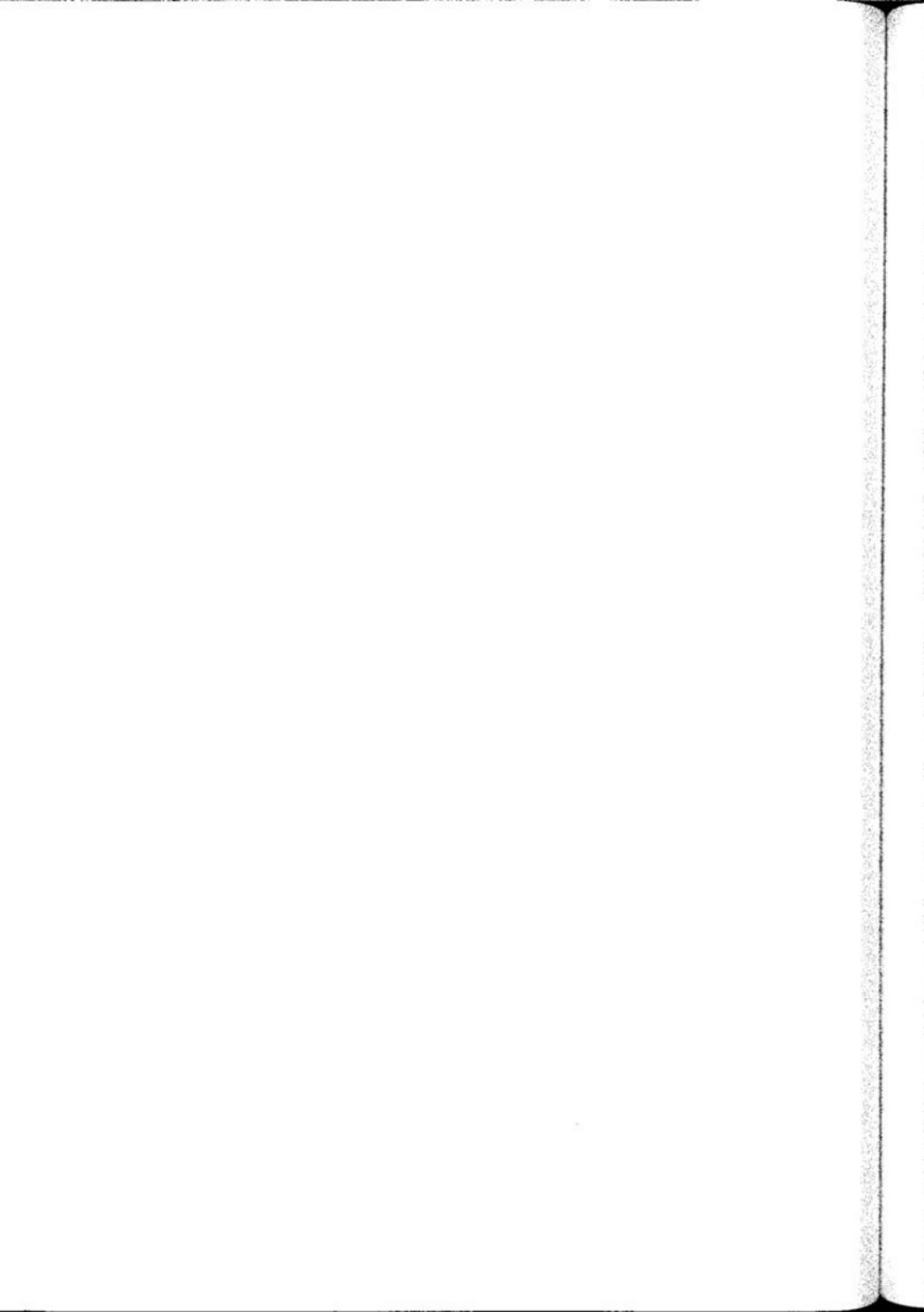
(4) 中世期

この時期の遺構はV区SE01のみであるが、遺構内からは土師器坏、小皿などが出土しており、良好な資料となっている。

3. おわりに

今回の発掘調査では範囲が極めて限定されていたこともあり、遺跡の性格を十分に把握することはできなかった。小山遺跡第3地点の周辺はいち早く宅地化が進み、立錐の隙間もないほどであるが、今後調査する機会があれば、指摘されている官衙施設の存在や拠点集落と目される矢野遺跡との関連性など遺跡の実態を明らかにし、郷土の財産として後世に伝えていくことが望まれる。

図版



I 区 図版



I 区 遺構完掘状況（東から）



2Gr 遺構完掘状況（北から）



SD01 土層断面

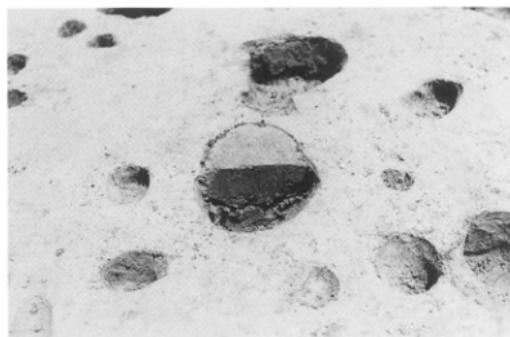
図版2



SX01 土層断面



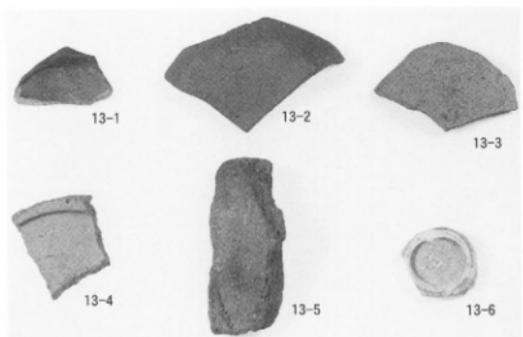
SX02 採出状況



1Gr P01 土層断面

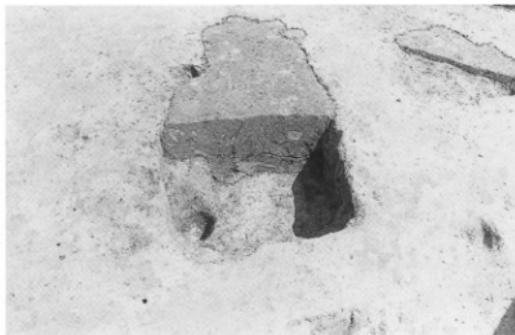


3Gr P02 土層断面

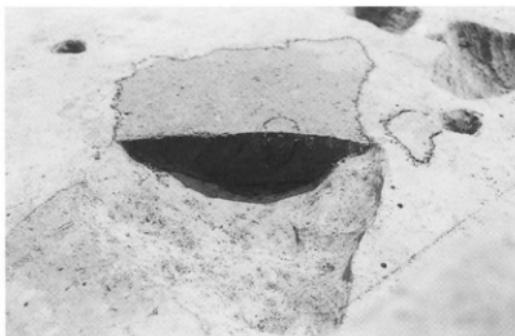


I区 出土遺物

II区 図版



SK01 土層断面



SK02 土層断面



SK04 土層断面



SK04 完掘状况



SK05・SK06 土層断面



SK11 遺物出土状況

图版6



SK10・SK11 完掘状況



SK12・SK13 土層断面



SK12・SK13 完掘状況



SK25 完掘状况



SD01 完掘状况



SD02 土层断面

図版8



SD02 完掘状況



B2Gr P01 土層断面



A5Gr 遺物出土状況



4～5Gr 遺構検出状況

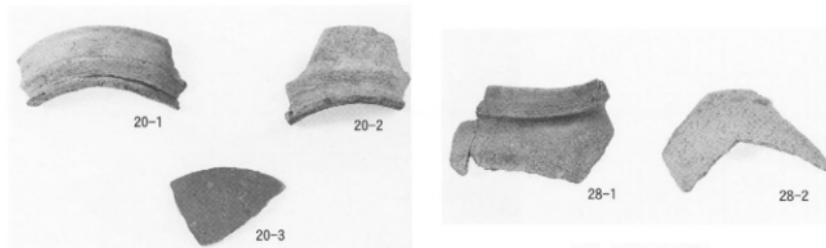


A6Gr P01 土層断面



A6Gr P01 遺物出土状況

図版10

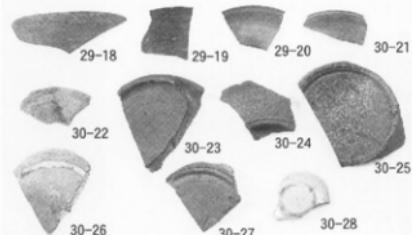
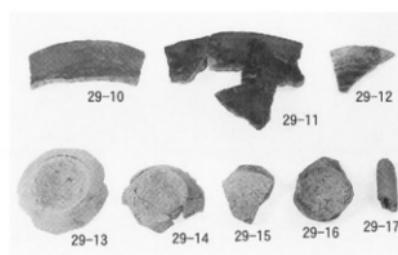
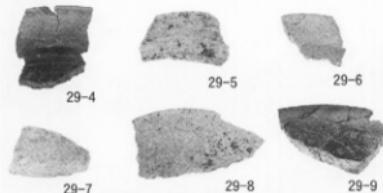
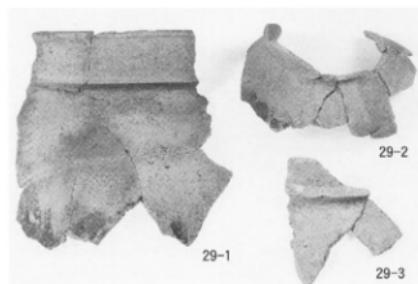


SK11 出土遺物

A6Gr P01 出土遺物

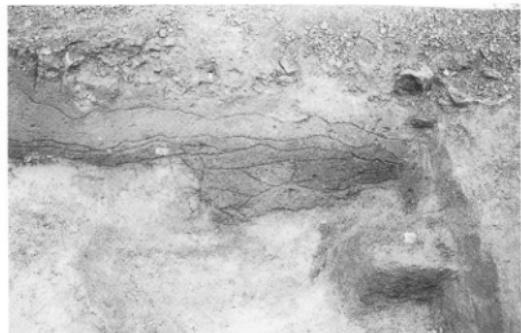


SK13 出土木製品



II区出土遺物

III区 図版



SK01 土層断面



P01・P02 完掘状況



34-1



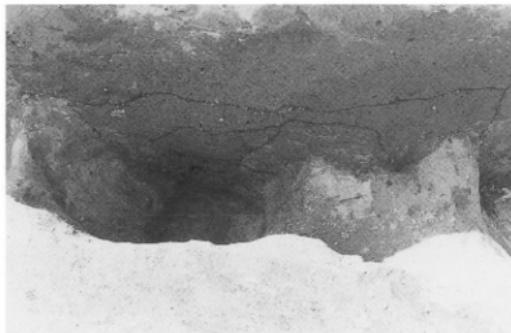
34-2



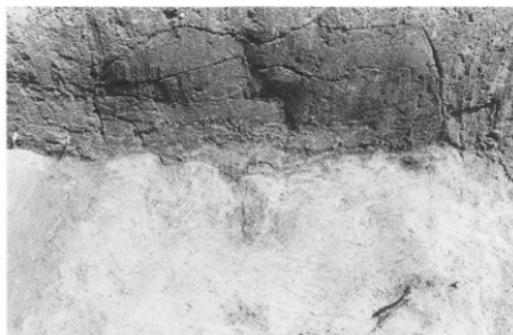
34-3

III区 出土遺物

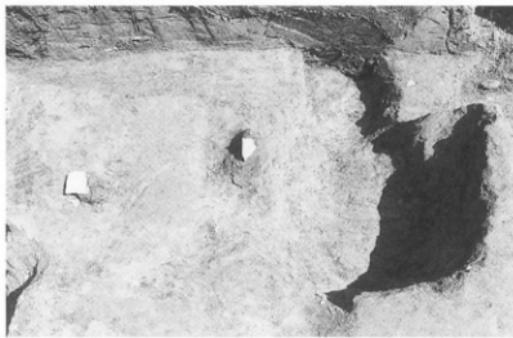
IV区 図版



SK01 土層断面



SK04 土層断面



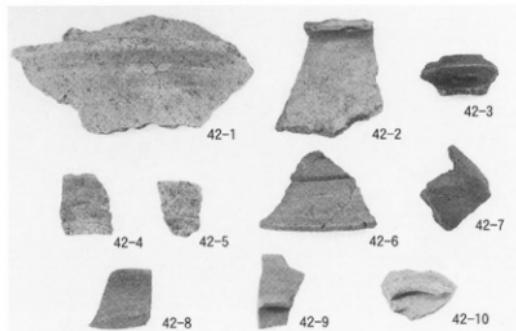
SK05 検出状況



SK06 土层断面

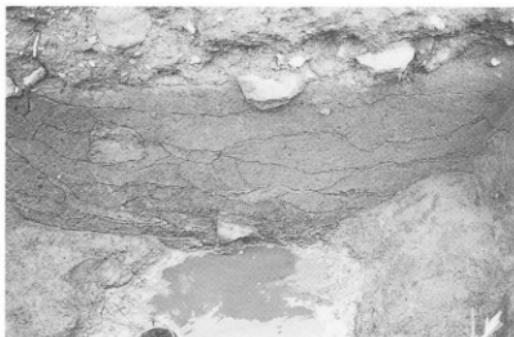


SD01 完掘状况



IV区 出土遗物

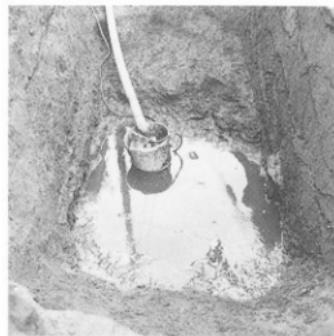
V区 图示



SE01 土层断面



SE01 遗物出土状况



SE01 完掘状况



SD01 土層断面



SD01・SD02 検出状況

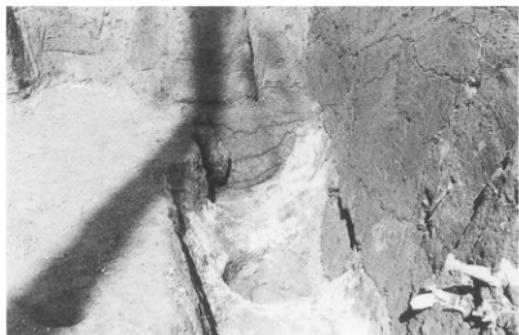


SX01・SD01・SD02 検出状況

図版16



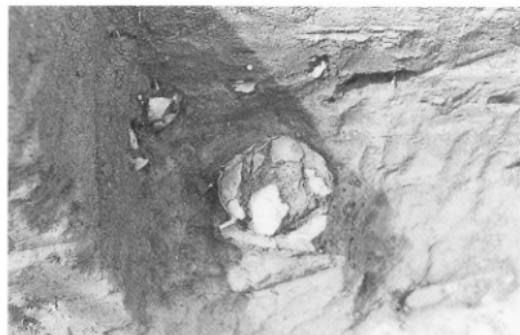
SD05 土層断面



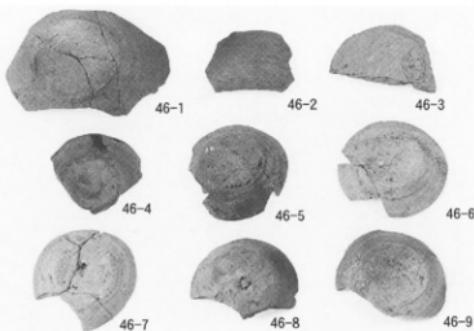
SD06 土層断面



SX01 遺物出土状況



SX01 遗物出土状況



SE01 出土遺物



48-1

SD01 出土遺物